

**市道本郷新宮線道路改良工事に伴う
古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書**



1998年3月

出雲市教育委員会

**市道本郷新宮線道路改良工事に伴う
古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書**

1998年3月

出雲市教育委員会



調査区B 大溝

序

出雲市内には、今市大念寺古墳や上塩冶築山古墳など全国的によく知られた数多くの遺跡があります。

加茂岩倉遺跡での39個の銅鐸の発見は記憶に新しいところですが、358本の銅劍など大量の青銅器が発見された斐川町の荒神谷遺跡や弥生時代の墳墓としては最大クラスの四隅突出型墳丘墓を有する西谷墳墓群と弥生時代を考える上で重要な遺跡がある出雲平野は、全国の研究者・古代史ファーンの注目のフィールドです。出雲平野の遺跡への関心とその重要性はますます高くなり、特にこれらの遺跡の背景ともなる集落遺跡の調査への期待は大きく、環濠集落として話題を呼んだ正蓮寺遺跡や天神遺跡とともに古志本郷遺跡も弥生時代の集落遺跡の一つとしてよく知られています。今回の調査でも規模の大きな溝が検出されており、また、斐伊川放水路事業に伴う調査でも多くの成果をあげています。古志本郷遺跡は出雲平野でも最も調査の進んでいる遺跡といえるでしょう。

本書が、今後の研究の一助をなし、広く市民の方に文化財保護についてご理解いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査・報告書の作成にあたっては、地元の方々、関係機関に多くのご指導とご援助を賜りましたことを、厚くお礼申し上げるとともに、今後とも出雲市文化財行政の推進にご協力いただきますようお願い申しあげます。

平成10年(1998)3月

出雲市教育委員会

教育長 多久 博

例　　言

1. 本書は、出雲市建設事業部道路河川課の委託を受けて、出雲市教育委員会が平成7年度に実施した市道本郷新宮線道路改良工事に伴う古志本郷遺跡発掘調査報告書である。

2. 発掘地は次の通りである。

調査区A 出雲市古志町字天庭1127-1

調査区B 出雲市古志町字天庭1126-1

調査区C 出雲市古志町字天庭1122-1他

3. 調査組織は次の通りである。

調査主体　出雲市教育委員会

事務局　　野津建一（文化・スポーツ課長）

調査員　　松山智弘（文化・スポーツ課主事）

調査指導　田中義昭（島根大学法文学部教授）

4. 本書で使用した方位は磁北を示す。

5. 遺物の実測は松山・伊藤　寿・竹田章乃・糸賀伸文を中心に行い、高橋智也・永田節子・鶴口令子・石川桂子・松山美奈子・富田裕子の協力を得た。浮写は永田・鶴口・石川が行った。本書の執筆・編集は松山が行った。

6. 本遺跡の出土遺物及び実測図・写真は出雲市教育委員会で保管している。

7. 調査にあたり下記の方々にご協力いただいた。記して感謝申し上げます。

江角和武・神田忠次・武田利一・板倉幸昌・建設省出雲工事事務所・古志公民館

本文目次

第1章 位置と環境	1
第2章 遺跡の概要	5
第3章 調査の概要	6
1. 調査の概要	6
2. 調査区 A	6
3. 調査区 B	10
4. 調査区 C	22
第4章 まとめ	44
1. 古志本郷遺跡の調査について	44
2. 古志本郷遺跡と出雲西部の集落遺跡	51

挿 図 目 次

第1図 遺跡分布図	3・4
第2図 調査区配置図	7
第3図 調査平面図（A区）	8
第4図 A区出土遺物	8
第5図 A区土層図	9
第6図 B区遺構配置図	10
第7図 B区土層図	11
第8図 S D 0 1 土層図	12
第9図 S D 0 1 出土遺物	12
第10図 大溝土層図	13
第11図 大溝掘り返し分層図	13
第12図 大溝土層（4 line）上	14
掘り返し分層図 下	
第13図 大溝出土遺物 B 3・4・5 区(1)	15
(1～9 IV層、10～13 V層)	
第14図 大溝出土遺物 B 3・4・5 区(2)	16
(IV層)	
第15図 大溝出土遺物 B 3・4・5 区(3)	17
(IV層)	
第16図 大溝付近出土遺物	17
第17図 大溝出土遺物 B 1・B 2	18
第18図 大溝出土遺物(6)	19
第19図 大溝土層図（5 line）	19
第20図 道路状遺構平面図	20
（破線は大溝）	
第21図 道路状遺構出土遺物	21
第22図 C区遺構配置図（北側）	22
第23図 C区遺構配置図（南側）	23
第24図 S K 0 1	24
第25図 S K 0 1 出土遺物	24
第26図 大溝掘り返し分層図	25～26
（調査区C南壁）	
第27図 大溝掘り返し分層図（8 line）	25～26
第28図 C区南壁土層図	27
第29図 大溝出土遺物 C-10・11	28
（1～8 II層、11～13 I層、9・10A層）	
第30図 大溝出土遺物 C-10・11（A層）	29
第31図 大溝出土遺物 C-10・11（A層）	30
第32図 大溝出土遺物 C-10・11（A層）	31
第33図 大溝出土遺物 C-10・11（A層）	32
第34図 大溝出土遺物 C-10・11（A層）	33
第35図 大溝出土遺物 C-8・9	34
（1～8 II層、9～18A層）	
第36図 大溝出土遺物 C-8・9	35
第37図 大溝出土遺物 C-8・9	35
井戸-1 (1)	36
井戸-1 土層図	37
井戸-1 (2)	38
井戸-1 出土遺物(1)	38
井戸-1 出土遺物(2)	39
井戸-2	40
井戸-3	41
古志本郷遺跡出土遺物 変遷図	45
2次・6次調査遺構配置図	46
古志本郷遺跡 配置図	48
1次1・2・4次調査以降配置図	50
1次調査3トレンチ出土遺物(1)	53
1次調査3トレンチ出土遺物(2)	54
1次調査3トレンチ出土遺物(3)	55
1次調査3トレンチ出土遺物(4)	56
1次調査3トレンチ出土遺物(5)	57
1次調査3トレンチ出土遺物(6)	58
1次調査3トレンチ出土遺物(7)	59
1次調査3トレンチ出土遺物(8)	60
1次調査3トレンチ出土遺物(9)	61
1次調査3トレンチ出土遺物(10)	62
1次調査3トレンチ (II)	
・1・2トレンチ出土遺物	
1次4トレンチ出土遺物	64

図版

- 図版1 古志本郷遺跡空中写真(北西から)
図版2 古志本郷遺跡空中写真(南から)
図版3 古志本郷遺跡より西側
図版4 第6次調査地点(上から)
図版5 上 調査前の状況
下 調査区B SD1
図版6 調査区B 大溝
図版7 上 調査区B 大溝
下 調査区B 大溝
図版8 上 調査区B 大溝
下 調査区B
大溝土層堆積状況(2line)
図版9 上 調査区B
大溝土層堆積状況(2line)
下 調査区B 大溝遺物出土状況
図版10 上 大溝(B・1・2区)調査状況
下 調査区B 大溝調査状況
図版11 上 調査区B
大溝土層堆積状況(中央ベルト)
下 調査区B 道路状構
図版12 上 調査区C 大溝
下 調査区C 大溝調査状況
図版13 上 調査区C
大溝土層堆積状況(調査区南壁)
下 調査区C 大溝遺物出土状況
図版14 上 調査区C 大溝遺物出土状況
下 調査区C 大溝遺物出土状況
図版15 上 調査区C 井戸-1
下 調査区C 井戸-2
図版16 上 調査区C 井戸-2
下 調査区C 井戸-3
図版17 調査区B SD1出土遺物
図版18 調査区B 大溝出土遺物
図版19 上 調査区B 大溝出土遺物

- 下 左 調査区B
大溝付近出土遺物
下 右 調査区B 大溝出土遺物
図版20 上 調査区B 道路状構出土遺物
下 調査区B 道路状構出土遺物
図版21 上 調査区C SK1出土遺物
下 調査区C 大溝出土遺物
図版22 調査区C 大溝出土遺物
図版23 調査区C 大溝出土遺物
図版24 調査区C 大溝出土遺物
図版25 調査区C 大溝出土遺物
図版26 調査区C 大溝出土遺物
下 須次式土器
図版27 調査区C 大溝出土遺物
図版28 調査区C 大溝出土遺物
図版29 上 調査区C 大溝出土遺物
右 (分銅形土製品)
下 大溝出土塙町式土器
図版30 上 調査区C 井戸-1出土
土師質土器
下 調査区C 井戸-1出土
陶磁器
図版31 1次調査(1988年)
3トレンチ遺物出土状況
図版32 上 1次調査
3トレンチ調査状況
下 1次調査
3トレンチ調査状況
図版33 上 1次調査
3トレンチ遺物出土状況
下 1次調査
3トレンチ遺物出土状況
図版34 上 1次調査
3トレンチ遺物出土状況

- 下 1次調査
3トレンチ落ち込み状遺構2
- 図版35 上 1次調査
3トレンチ落ち込み状遺構1
- 下 1次調査
3トレンチ落ち込み状遺構1
貝層
- 図版36 上 1次調査(1988年)1トレンチ
下 1次調査(1988年)2トレンチ
- 図版37 上 1次調査(1988年)4トレンチ
下 1次調査(1988年)4トレンチ
- 図版38 1次調査 3トレンチ出土遺物
- 図版39 1次調査 3トレンチ出土遺物
- 図版40 1次調査 3トレンチ出土遺物
- 図版41 1次調査 3トレンチ出土遺物
- 図版42 1次調査 3トレンチ出土遺物
- 図版43 1次調査 3トレンチ出土遺物
- 図版44 1次調査 3トレンチ出土遺物
- 図版45 1次調査 3トレンチ出土遺物
- 図版46 1次調査 3トレンチ出土遺物
- 図版47 1次調査 3トレンチ出土遺物
- 図版48 1次調査 3トレンチ出土遺物
- 図版49 1次調査 3トレンチ出土遺物
- 図版50 上 左 1次調査
3トレンチ出土遺物
上 右 1次調査
4トレンチ出土遺物
下 1次調査
4トレンチ出土遺物

第1章 位置と環境

古志本郷遺跡のある出雲平野は斐伊川と神戸川による沖積平野で、南北は山に挟まれ、東に宍道湖が西には神門水海があり、両河川はともに神門水海に流れ込んでいた。このような自然地形によって形成された小宇宙に多くの遺跡がきずかれた。ごくごくおおざっぱな弥生時代の景観である。

縄文時代については確認されている遺跡も少ないが、縄文早期の遺跡として、北山山系の弥山南麓にある菱根遺跡や浜山（出雲砂丘）の上長浜貝塚が、後期から晩期のものとして原山遺跡・大社境内遺跡がよく知られている。いずれも大社町の北山山麓から浜山にかけて立地している。さらに神西湖南岸の丘陵裾部でも御領田遺跡・三部竹崎遺跡・奥ノ谷遺跡・姉谷恵比須遺跡などの縄文後・晩期の遺跡が発見されており、特に御領田遺跡では縄文時代後期の堅穴住居が調査されている。

また、最近の調査では神戸川右岸丘陵の谷間にある三田谷遺跡でも後期の遺物がまとめて出土しており、平野の中心部でも矢野遺跡や善行寺遺跡など後・晩期のキャンプ地的な遺跡も発見されている。

これらの縄文後・晩期の遺跡からは弥生前期の遺物も出土しており、これらの遺跡が連続していることが分かる。

中期にはいるとこれらの遺跡もいったん姿を消すようであるが、しかしながら、中期中葉になると平野の状況は一変し各所で集落と呼べる遺跡が分布するようになる。神戸川右岸では天神遺跡が出現する。一部ではあるが環濠とも言われる規模の大きな溝も検出されている。また、衣笠と考えられる木製品も出土している。矢野遺跡を中心とする四絡遺跡群や神戸川左岸でも知井宮多聞院遺跡をはじめとし田畠遺跡や正蓮寺周辺遺跡などからなる古志遺跡群が分布するようになる。後期になると斐伊川の流域にも山持川川岸遺跡や里方別所遺跡などが現れる。このように中期末から後期初めにかけて平野全体に集落が広がるわけだが、この頃に神庭荒神谷遺跡の大量の青銅器が埋納されたと考えられている。その後もこれらの遺跡は安定して営まれたようで、後期後半から終末期にかけて四隅突出型墳丘墓6基からなる西谷墳墓群が築かれる。

これら集落遺跡の多くは古墳時代にはいる前後あたりから縮小する傾向にあり、四絡遺跡群・天神遺跡・知井宮多聞院遺跡・古志本郷遺跡などの平野中心部の遺跡は古墳時代初頭にいったん途切れるようである。天神遺跡では環濠の可能性が指摘されている溝が草田6期の大量の土器とともに埋まっており、この中には布留式古段階の土器も含まれている。このように古墳時代開始直後に中心集落は大きな画期をむかえる。しかしながら、どのような理由で集落が廃絶されるのかは分かっていない。

一方で北山山麓と神西湖の南岸では古墳時代以後も継続して集落が認められ、湖陵町西安原遺跡では前期の木造状の遺構が検出されるなど比較的の安定しているようである。唯一の前期古墳である山地古墳や大寺古墳もこれらの地域にある。

古墳時代中期から後期前半の状況は集落・古墳ともに低调で、斐川町に軍原古墳・神庭岩舟古墳や結古墳群などが中期のものとして、平田市の上島古墳が後期前半のものとして知られている。また、平野中心部にあたる出雲市内には前期からめったった古墳は見られない。集落遺跡も前期初めに廃絶された後、中期にはいると1期の須恵器をともなった遺構が現れるようになり、再び集落が形成され

始める。

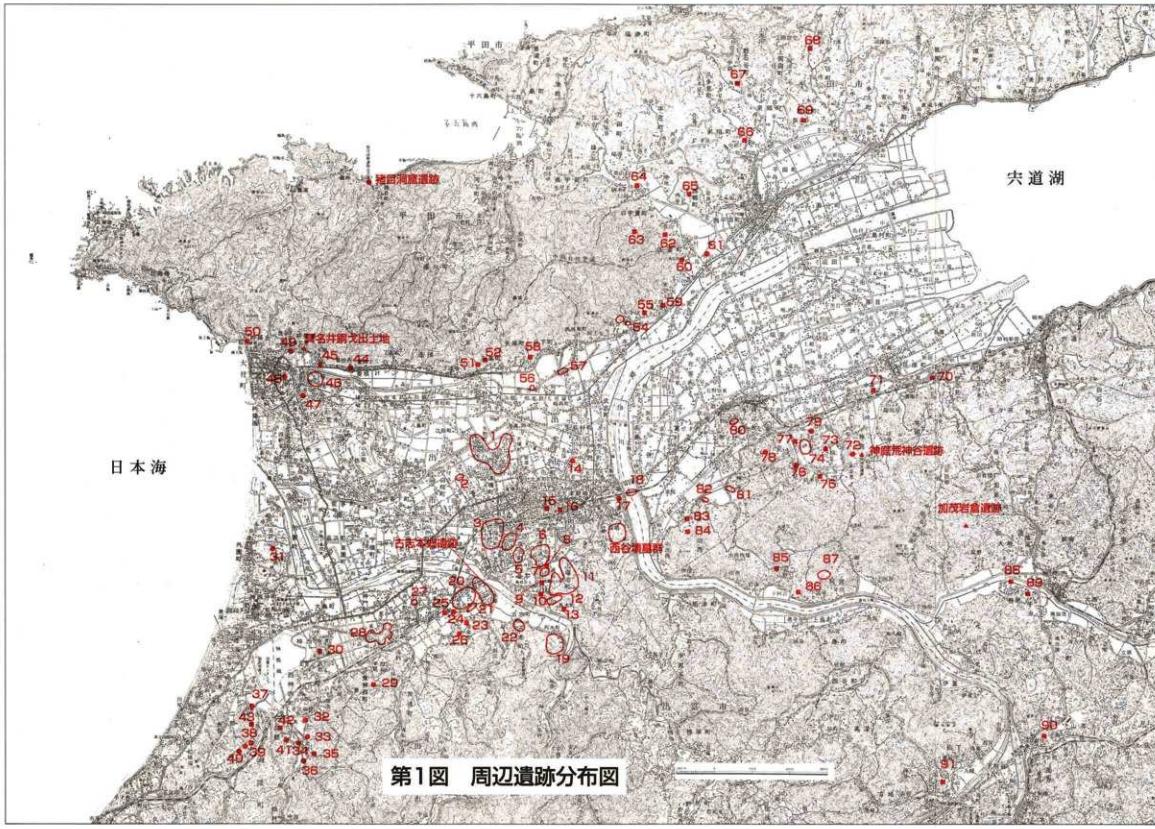
そして後期になると推定墳長100mの前方後円墳である大念寺古墳が突如として出現する。続いて上塩冶築山古墳・地蔵山古墳と首長墓が造られ6世紀末からは横穴墓が爆発的に造られ始める。最も大規模な上塩冶横穴墓群は開口しているもので170基に及んでいる。

古志本郷遺跡のある神戸川左岸にも妙蓮寺山古墳・放れ山古墳・宝塚古墳など横穴式石室をもつ古墳が築かれ、神門横穴墓群や井上横穴墓群・地蔵堂横穴墓群など多くの横穴墓が築かれている。

古墳時代後期の集落は良好な形では検出されていないが、古墳や横穴墓の状況から考えると多くの集落が営まれたと推定される。

参考文献

- 田中義昭「加茂岩倉遺跡の発見とその意義」『歴史地名通信』22 平凡社地方資料センター 1997
田中義昭・西尾克己「出雲平野における原始・古代集落の分布について」『山陰地域研究』4 島根大学山陰地域研究総合センター 1988
勝部 昭・西尾克己編『出雲・上塩冶を中心とする埋蔵文化財調査報告』建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会 1980
出雲考古学研究会『古代の出雲を考える3 出雲平野の集落遺跡I』1983
出雲考古学研究会『古代の出雲を考える1 天神遺跡の諸問題』1979
村上 勇他『出雲・原山遺跡発掘調査概報』大社町教育委員会 1986
川上 稔『上長浜貝塚』出雲市教育委員会 1996
川上 稔『山持川川岸遺跡』出雲市教育委員会 1996
川上 稔・赤澤秀典『山持川川岸遺跡』島根県埋蔵文化財調査報告書 島根県教育委員会
川上 稔『古志本郷遺跡発掘調査報告書』『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告』第4集出雲市教育委員会 1994
川上 稔『神門地区詳細分布調査』出雲市教育委員会
角田徳幸・野坂俊之『神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財報告書(御領田遺跡・三部竹崎遺跡)』1994
西尾克己・野坂俊之『神西湖周辺の集落遺跡』『湖陵町誌研究』4 湖陵町教育委員会 1995
岸 道三『善行寺遺跡』『出雲市埋蔵文化財調査報告書』7 出雲市教育委員会 1997
岸 道三『天神遺跡第7次発掘調査報告書』出雲市教育委員会 1996
角田徳幸『天神遺跡発掘調査報告書IV』出雲市教育委員会 1986
田中義昭編『出雲市矢野遺跡の発掘調査(昭和63年度文部省科学研究費補助金〔一般研究A〕研究成果報告書)』島根大学 1989
大塚初重『島根県出雲市知井宮遺跡の調査』『考古学集刊』2-1 1963
出雲考古学研究会『古代の出雲を考える2-西谷墳墓群』1980
渡辺貞幸『西谷墳墓群の調査(1)』『山陰・山陽地方における弥生時代墳丘墓の比較研究』島根大学法文学部考古学研究室 1992
角田徳幸・西尾克己『出雲上塩冶横穴群第22支群』『島根県埋蔵文化財調査報告書』XII 島根県教育委員会 1986
松山智弘『地蔵堂横穴墓群発掘調査報告書』出雲市教育委員会 1994
出雲市教育委員会『遺跡が語る古代の出雲・出雲平野の遺跡を中心に-』1997



第1図 周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|-------------------------|--------------|-------------|--------------|-----------------|
| 1. 四格遺跡群 | 20. 正蓮寺周辺遺跡 | 40. 只谷「遺跡 | 60. 上島古墳 | 80. 平野横穴墓群 |
| (「矢野遺跡」、小山遺跡、大塚遺跡、渡橋遺跡) | 21. 田畠遺跡 | 41. 霧荷古墳群 | 61. 潟代遺跡 | 81. 城山古墳群 |
| 2. 白枝荒神道路 | 22. 井上横穴墓群 | 42. 貉道古墳 | 62. 宮園古墳群 | 82. 後谷道路(出雲正倉路) |
| 3. 天神道路 | 23. 妙蓮寺古墳 | 43. 八幡宮横穴墓 | 63. 左豊谷古墳 | 83. 出西小丸古墳 |
| 4. 高西道路 | 24. 宝塚古墳 | 44. 八重根古墳 | 64. 口宇賀古墳 | 84. 山の奥横穴墓群 |
| 5. 神門寺境内発寺 | 25. 天神原古墳 | 45. 修羅山本郷遺跡 | 65. 山根垣古墳 | 85. 高野古墳群 |
| 6. 宮松道路 | 26. 地藏堂横穴墓群 | 46. 原山遺跡 | 66. 山崎古墳 | 86. 布子谷古墳 |
| 7. 角田道路 | 27. 知井宮多院院遺跡 | 47. 南原遺跡 | 67. 伊義古墳 | 87. 天寺平慶寺 |
| 8. 上長浜遺跡 | 28. 神門横穴墓群 | 48. 鹿食山遺跡 | 68. 小合下古墳 | 88. 神原神社古墳 |
| 9. 地蔵堂横穴墓群 | 29. 神門横穴墓群 | 49. 大原山内遺跡 | 69. 鶴見古墳 | 89. 神原正面古墳群 |
| 10. 半分古墳 | 30. 山地古墳 | 50. 石臼古墳 | 70. 冠原古墳 | 90. 麥伊中山古墳群 |
| 11. 上堤浜遺跡 | 31. 上長浜遺跡 | 51. 矢尾根古墳群 | 71. 神庭岩舟山古墳 | 91. 松木古墳群 |
| 12. 三田谷遺跡 | 32. 中田谷貝塚 | 52. 石臼古墳 | 72. 西谷遺跡 | |
| 13. 光明寺古墳群 | 33. 三部竹筒跡 | 53. 平林寺古墳群 | 73. 西院院横古墳 | |
| 14. 大蒙遺跡 | 34. 霧庭遺跡 | 54. 善願寺古墳群 | 74. 結古墳群 | |
| 15. 今市塚山古墳 | 35. 奥ノ谷遺跡 | 55. 大寺古墳 | 75. 武志西古墳 | |
| 16. 今市大念寺古墳 | 36. 領頭田遺跡 | 56. 里方宮所遺跡 | 76. 結古墳 | |
| 17. 石土手遺跡 | 37. 西安原遺跡 | 57. 山特川川岸遺跡 | 77. 貴船古墳 | |
| 18. 刈引山古墳群 | 38. 姉谷奈比須遺跡 | 58. 大前川古墳 | 78. 神水三メ田古墳群 | |
| 19. 斎伊川鉄橋遺跡 | 39. 只谷「遺跡 | 59. 美談寺古墳 | 79. 宮谷遺跡 | |

第2章 遺跡の概要

古志本郷遺跡は、神戸川の左岸に、神戸川に沿ってのびる微高地に広がる遺跡である。この微高地は現在も住宅の密集地となっており微高地の周囲は水田となっている。

遺物の散布地として知られていたようであるが、87年に範囲確認調査が実施されて以来、8次調査を数える。1次調査ではこの遺跡が弥生中期の後葉に出現することや、玉作を行っている可能性が指摘された。第3トレンチからは弥生時代終末期の土器が大量に出土している。古志公民館建設に伴う2次調査でははじめて面的な調査が行われた。弥生時代の構造としては竪穴住居3棟と溝が1条検出されている。いずれも弥生中期後葉の土器が伴っている。そのうち1棟では黒曜石や玉髓・グリーンタフなどの薄片が出土している。

竪穴住居が検出されたことで、弥生時代中期後葉から集落が形成され始めたことが確実となった。また、このときの調査では中世の溝や土壙がたくさん検出されている。

平成7年より始められた斐伊川放水路事業に伴う調査（7・8次調査）でも中期後葉の竪穴住居が9棟検出されており、古志公民館から北にかけては、集落開始期の居住域になっていたようである。今回の調査で検出した大溝も弥生時代中期後葉に掘削されたもので、竪穴住居と同時期のものである。

古志本郷遺跡の周辺にもいくつかの弥生時代の集落遺跡が知られている。神戸川左岸の遺跡群の中では西端で神門水海の汀線付近に位置したと考えられる知井宮多聞院遺跡は最も古く、中期中葉から存在が知られる。昭和33年に行われた明治大学考古学研究室の発掘調査では、中期中葉から古墳時代初頭にいたる遺物と、中期後葉から古墳時代初頭にかけての貝層が検出されている。この遺跡は中期中葉から古墳時代初頭まで途切れることなく営まれたようである。また、古志本郷遺跡の西側には隣接して正蓮寺周辺遺跡がある。この遺跡も近年の調査で新たに発見されたもので、弥生時代中期～終末にかけての比較的規模の大きな溝が複数発見されており多重環濠の可能性が指摘されている。また、古志本郷遺跡の南側には田畠遺跡・放れ山遺跡が知られ、田畠遺跡では中期後葉の竪穴住居と溝が検出されている。放れ山遺跡は放れ山古墳が立地する丘陵の北斜面より石斧が出土しており、平野の南側丘陵縁辺部の遺跡として注意される。これらの遺跡を総称して古志遺跡群と呼ばれており、出雲平野の主要な遺跡群の一つとされている。

第3章 調査の概要

1. 調査の概要

この調査は市道本郷新宮線道路改良工事に伴うもので、出雲市建設事業部道路河川課より委託を受けて実施したものである。事業地が古志本郷遺跡にかかるところから事業の実施に当たっては発掘調査を行うことを出雲市教育委員会と道路河川課で確認していた。事業計画が具体化し平成6年度に調査の依頼があり翌年度に調査を実施することとなった。工事は現在の市道本郷新宮線の東側に歩道を整備するもので、古志公民館から北に長さ150mの細長い調査地が設定された。周辺は水田になっており調査地もその一部である。調査区の幅が平均6mと狭く、造構面までが深さ2mと深いことと、周辺は水田となっており調査が農繁期と重なった場合や地山である砂礫層からは湧水が激しく、造構検出が可能な範囲はさらに限られることとなった。

調査地は古志本郷遺跡の中心部と思われる微高地北西の縁辺部にあたるところで、地表面は北側に徐々に低くなっている。また東西方向では、市道本郷新宮線から両方向に徐々に高くなっている。調査地は微高地と微高地の谷間のような場所にあたる。このような立地もふまえ、現在では市道本郷新宮線を境に東側が古志本郷遺跡、西側を正蓮寺周辺遺跡としている。

調査区が細長いことや途中に道路が横断している箇所があることから便宜的に調査区を3カ所に分けて北からA～Cとし、A区から調査を開始した。

調査区A・Bでは調査区内を南北方向に5m間隔で区切り調査区Aは1区から9区までありA1区などと呼ぶことにした。調査区Bは1区から8区まである。なお、A9ラインとB1ラインは同じで重なっている。調査区Cも南北に5m間隔で区切りC1区からC11区を設定し調査を行った。ただし、この調査区の軸はA・B調査区とは異なっており、南北軸で4度西東に振っている。古志本郷遺跡については、古志公民館から北についてはこれまで発掘調査が行われておらず遺跡の詳細については分かっていないかったので、A区ではトレッチにより土層の堆積状況等を確認した上で面的な調査にはいった。なお、耕作土については重機で発掘している。

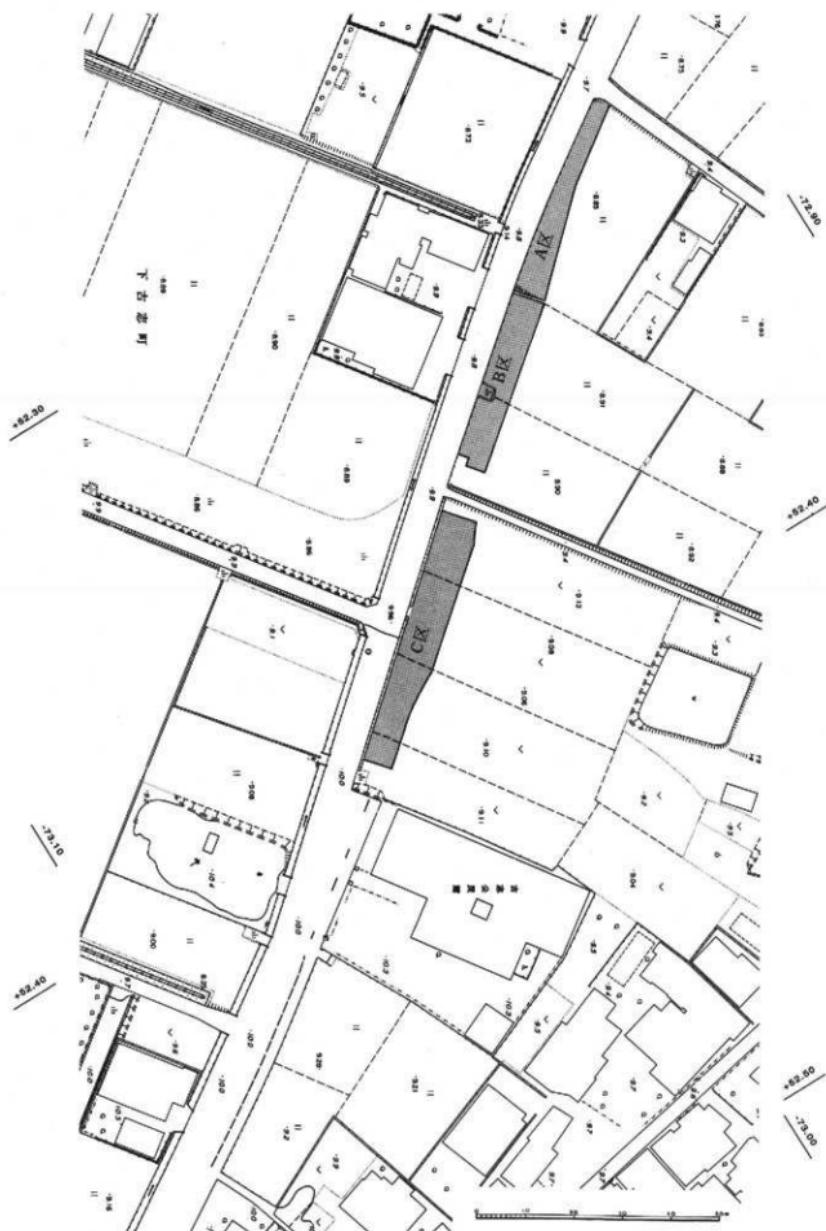
2. 調査区A

この調査区は今回の調査で最も北に位置しており、非常に細長い調査区である。調査区は北端で幅3.6m、南端で幅6.7m、長さは45mを測る細長いものである。

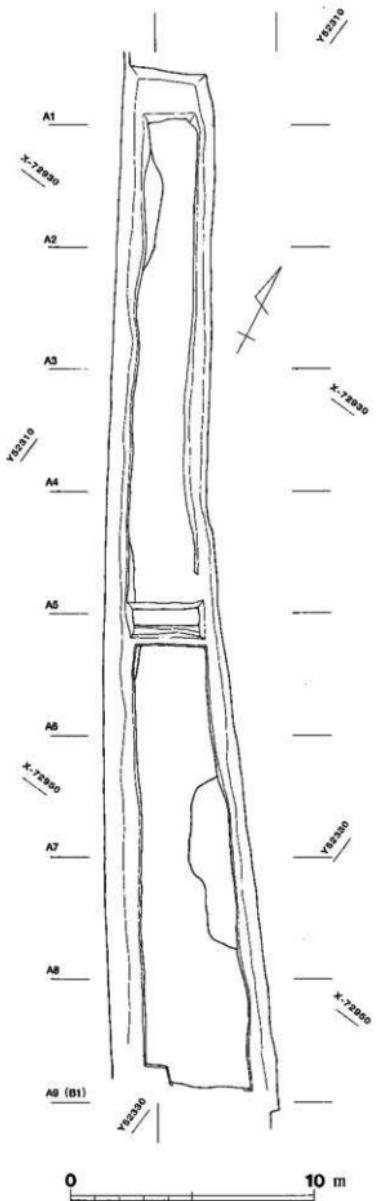
この調査区はもっとも低い場所にあたることや、調査が農繁期にあたり湧水が著しく地山まで下げることが非常に困難であった。このため、大部分については遺物も出土しないことから調査を止め、一部については地山（砂礫層）まで下げている。

A区では地山である砂礫層を標高7.8mで検出している。第2次調査で竪穴住居が検出されている同じ層が8.7mを測ることから居住域と比べると1m近く低い位置にあたることが分かる。砂礫層まで下げたところでは造構は検出されなかった。調査区B・Cで検出された大溝は調査区Aの南東をかすめていたと思われるが、この時点では残念ながら確認できなかった。

出土遺物としては、陶磁器が大部分を占めるが、わずかに弥生土器・須恵器などが混在して出土し



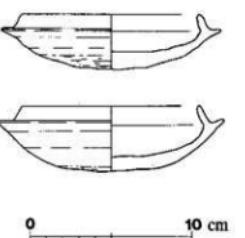
第2図 調査区配置図



第3図 調査区平面図 (A区)

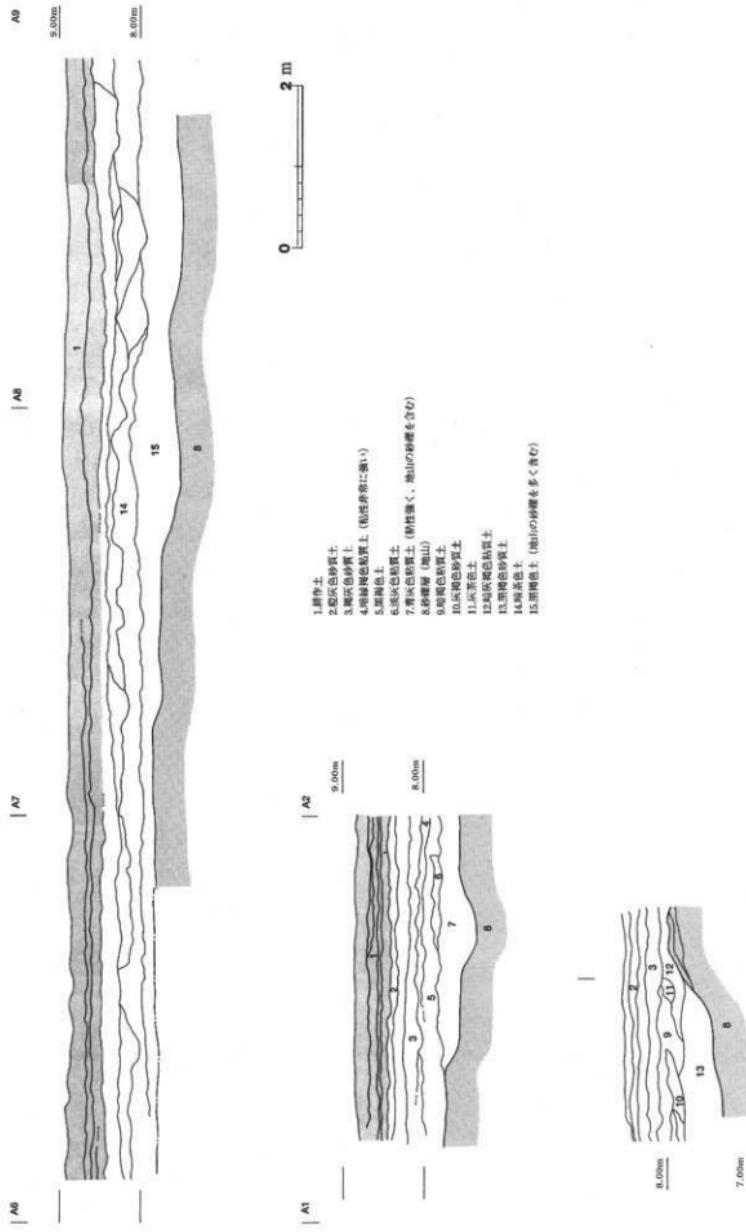
ている。地山の直上層でも同じような状況であることから、近世以降に大きな攪乱を受けているものと思われる。

図示できた遺物として須恵器の壺が2点ある。いずれも底部は回転ヘラ削りを施す。いずれも大谷4期にあたる。



第4図 A区出土遺物

第5図 A区土層図



3. 調査区B

B区とC区では弥生時代の比較的規模の大きい溝が両調査区で検出されている。調査区Cは第2次調査がおこなわれた古志公民館の北隣にある。

遺構はすべて地山の砂礫層での検出となった。地山は調査区北端で7.8m・南端で8.1mを測り南から北に傾斜している。地山は砂礫層であるが北側のB-1区と大溝の西側はではシルト層の部分がある。

近世の井戸や土壌などが地山である砂礫層から検出されており、大溝の南側は全体的に地山が皿状に窪んでおり、ここからも近世の遺物が出土していることから、この時期に大きく攢乱されているようである。

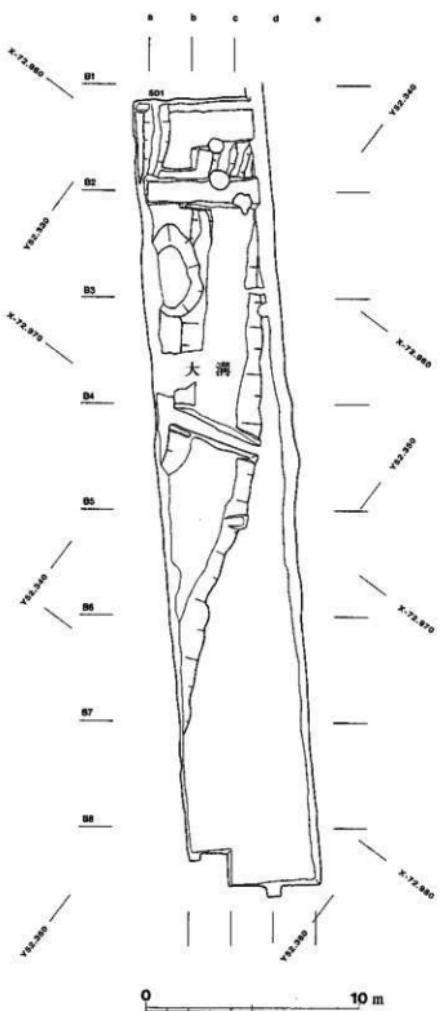
弥生時代の包含層は検出されず、この時代の遺構としては規模の大きな溝（大溝）やそれと平行するSD1を検出している。

SD1

この溝は調査区の北西隅で検出された遺構である。ほんの一部分しか検出されていないがほぼ大溝と平行して伸びているようである。幅1.28m・深さは現状では0.7mを測るが本来は1m以上あったものと推定され、比較的深い溝である。出土遺物は全て2層の上部に含まれていた。

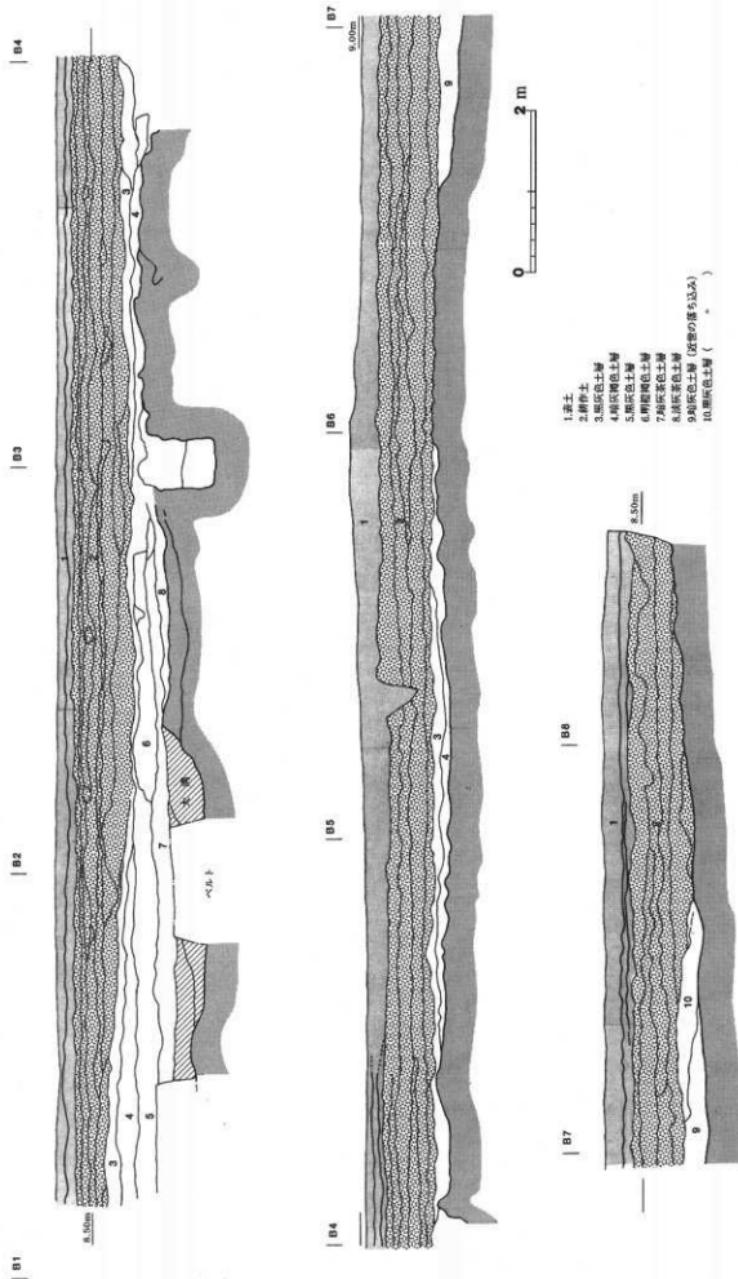
SD1出土遺物（第9図）

(1)は法量の大きな甕である。頸部から口縁部にかけては器壁が厚いのに対して胴部では4mmと非常に薄いつくりとなっている。口縁部は端部の器壁が厚く、形態は丸く収める。下段の突出は下向きである。外面には下半に貝殻腹縁による擬凹線を施し、上半は横ナデが施されており擬凹線の一部が消えているようである。内面は頸部がヘラ磨きで口縁部はナデである。



第6図 B区遺構配置図

第7図 B区土層図

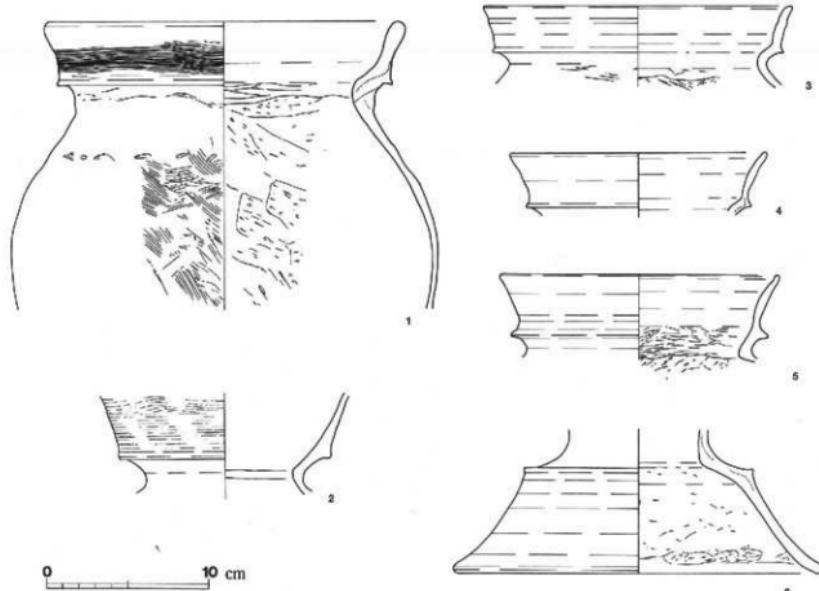


肩部外面には米粒状の列点紋が施される。胴部外面は刷毛目、内面はヘラ削りである。(2)は鼓形器台の脚部で、外面は沈線を施した後に撫で消したか板状の工具で撫でたような調整である。(3)～(5)は口縁部が無紋の壺である。(3)は口縁端部が薄く延びる。(4)は口縁端部を丸く収める。(5)は口縁端部の内側を強く撫で、端部をつまみ上げたような形態に仕上げている。また下段の突出を強調している。頸部内面にはヘラミガキが施される。(6)は鼓形器台の脚部である。外面はナデ調整で内面は端部はナデ調整で他はヘラ削りの後にナデしているようである。

(1)・(2)は草田3期、(3)・(6)は草田4期、(4)・(5)は草田5期に相当する。

大溝

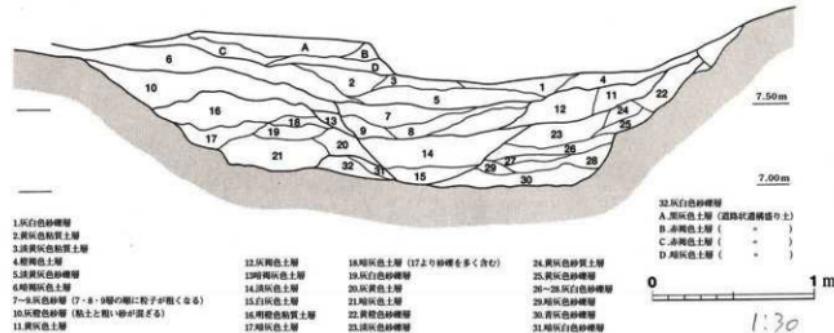
この遺構は、B区の北側とC区の南側でそれぞれ検出された溝である。途中は調査区外になるが、非常に規模が大きいことなど一連の溝と考えられる。それぞれの調査区で検出された両端を直線距離で測ると100mになる。B区では調査区を対角線上にのびており、ここでの検出長は28mを測る。北側は直線的にのびるが、南半分は西側に向きを変えている。幅は4.1m、深さ1mを測る非常に大きな溝である。断面は逆台形をしており、およそ40度の傾斜で立ち上がっている。



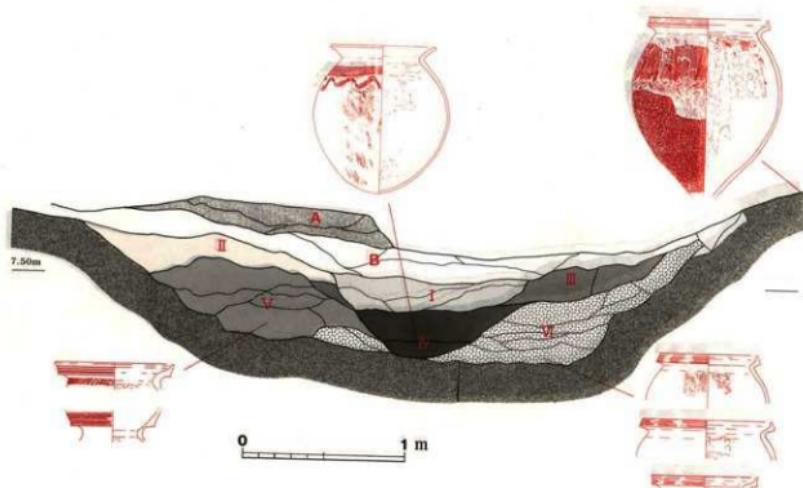
第8図 SD01土層図

第9図 SD01出土遺物

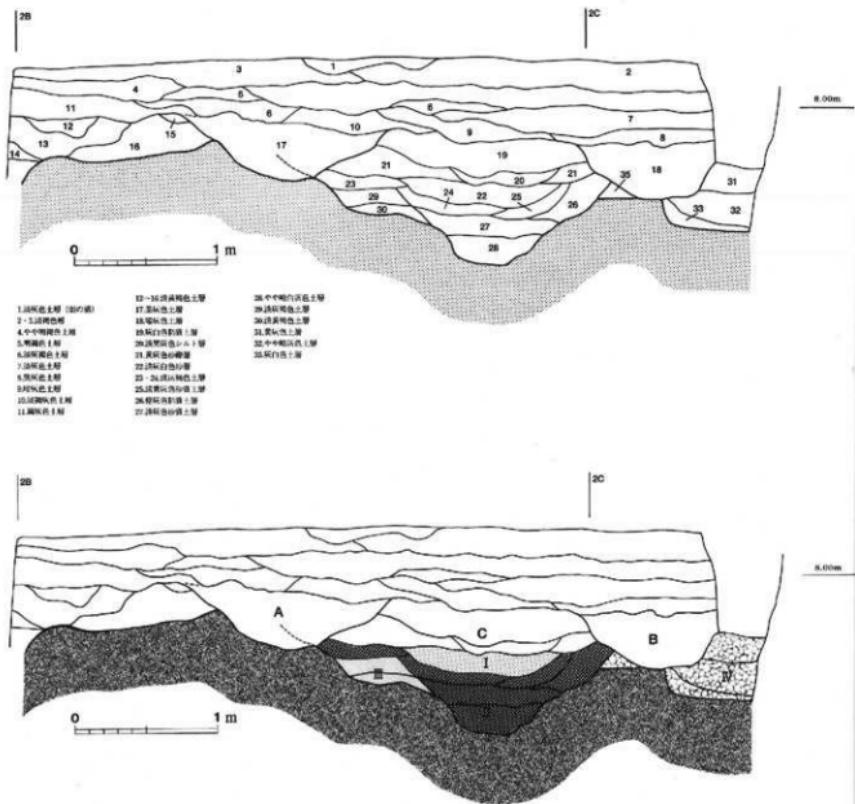
土層の堆積状況より3回から4回の掘り返しを行っていることから、当初からこの規模であったかどうかは分からぬが、西側の肩では地山直上で中期後葉の土器が出土していることから、大きくは変わらないものと考えられる。確認できる掘り返しからは溝の規模は縮小しており、最初に掘削された時点が最大規模を呈していたと思われる。遺構は地山での検出となつたので、溝は砂礫層に掘り込まれているが、溝の西側は地山が黄色シルト層が、北側の1・2区は灰色シルト層が砂礫層の上にのっておりそこから掘り込まれている。



第10図 大溝土層図（中央ベルト北面）

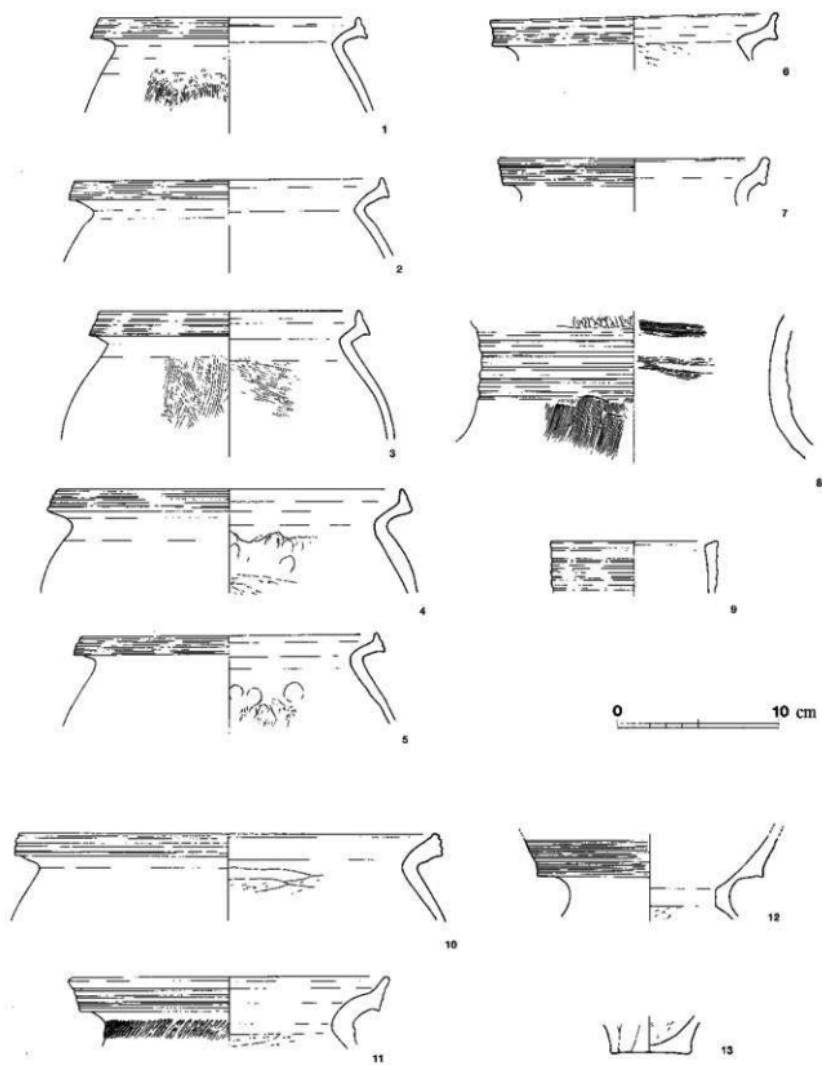


第11図 大溝掘り返し分層図

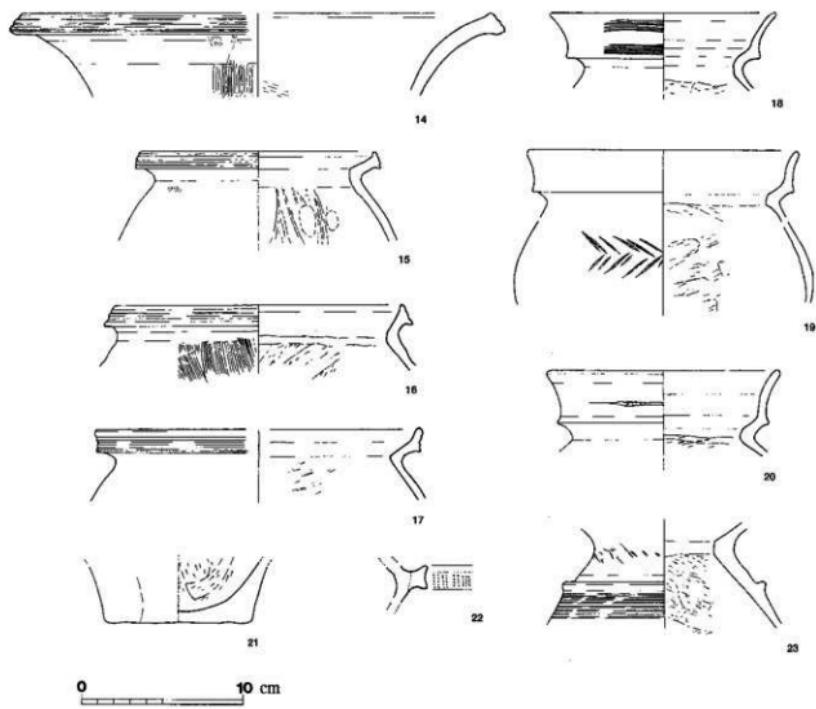


第12図 大溝土層図 (2line) 上
掘り返し分層図 下

造構中央の横断セクション（11図）では大きく6の層に分類することができる。最初に堆積した層はVI層でこの層の西側が掘り返されてV層が再び堆積する。その後中心部分を幅1m掘削しており、IV層がこの部分を埋めている。III層とII層もIV層にづづいて堆積したか、もう一度掘り返した後に堆積したものかはっきりしない。最後に堆積しているのがI層である。このときには溝は幅1. 2m、深さ20cmしかない。このように3回ないし4回の掘り返しが確認できるが、溝は砂疊層に掘り込まれており崩れやすいことや出土遺物から使用期間が長期にわたると考えられ、実際にはこれ以上に掘り返しが行われていたと考えられる。5ラインセクションでも（19図）同様に掘り返しが観察されるが、最後の堆積であるI層が斜めにカットされておりもう一度掘削が行われているようである。



第13図 大溝出土遺物 B3・4・5区 (1) (1~9VI層、10~13V層)

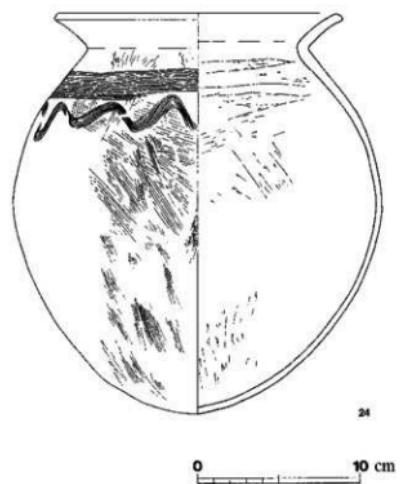


第14図 大溝出土遺物 B3・4・5区(2) (IV層)

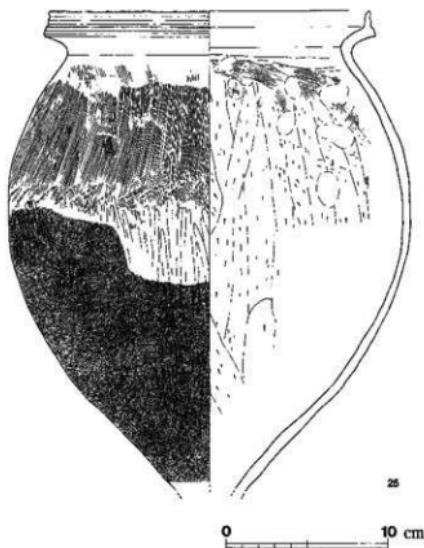
このように地山である砂疊層に掘り込まれていることから、比較的急速に溝は埋まっていたものと思われる。そのたびに掘り返されているようであるが、溝の規模はそのたびに縮小されていることが分かる。

遺物は、IV層・V層・VI層から出土しているが、大半は小片でかなり風化している。付近から捨てられたと言うよりも、ローリングを受けながら流れてきたような遺物である。また、掘り返しがなされているために遺物は新旧混ざって出土しているため、堆積の明確な時期は判断が難しい。しかし、最初の堆積であるVI層からは弥生時代中期後葉～後期初頭の土器でまとまっている。また中期中葉以前の土器が出土していないことから、最初に溝を掘削した時期は中期後半と考えて大過ないであろう。また、IV層からは布留式の甕(15図)が1点ほぼ完形で出土している。またIII層は他の層と異なり水流による砂の堆積層であることから他と区別がしやすい。この層はC区でも検出されており、そこでは布留式の小型丸底壺(29図12・13)が出土している。

調査区北側で検出した部分(B1・2)では東側については調査区外にあり全体の状況は確認できないが、現状では地山での断面形がW字形をしており、IからIIIが堆積している部分とIVが堆積している部分とに底の部分は2条になっている。隣接した正蓮寺遺跡では上端からW字形の溝が検出され



第15図 大溝出土遺物B3・4・5区(3)(IV層)



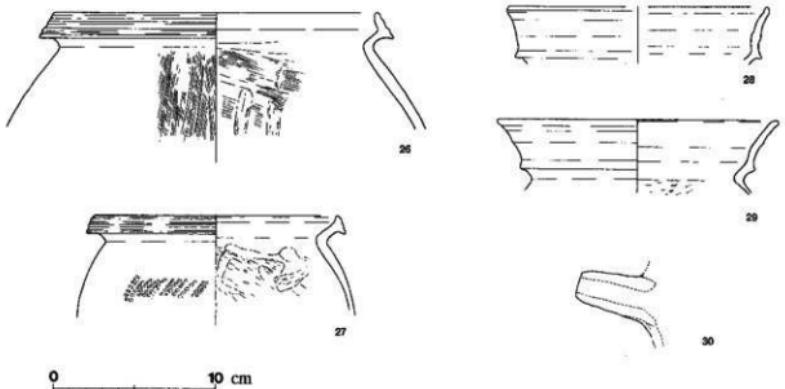
第16図 大溝付近出土遺物

ているが、ここでは、掘り返しによる切り合もあるので当初からこのような形態であったかは断定できない。

掘り返しについては4回確認でき、現状では早い段階で堆積しているⅢ層より草田5期の土器(図17-29)が出土していることから、Ⅲ層堆積以前にも掘り返しがあったものと思われる。また、I層は水流による砂の堆積層であることから中央横断のセクションのI層と対応し、これ以降は掘り返しを行っていない。A・B層については時期は不明であるが大溝廃絶後に堆積したC層に掘り込まれていることから、直接大溝にかかわるものではない。

大溝出土遺物(第13~17図)

(1)~(9)は最初の堆積層であるVI層から出土したものである。(1)~(7)は壺で、(1)~(5)は口縁は短小で内傾しており、2条~4条の凹線を施している。胴部の調整は風化が著しいが、外面は縦方向の刷毛目である。内面は(1)~(3)は刷毛目で残っている部分ではヘラ削りは見られない、(4)・(5)は頸部付近は指頭圧痕が顕著でそれ以下はヘラ削りである。(6)・(7)は口縁部は直立し、(6)は凹線紋(7)は擬凹線を施す。(6)の胴部内面は頸部までヘラ削りが達している。(8)は壺の頸部で5条の凹線が施され、その上段に指頭圧痕紋帯がある。



第17図 大溝出土遺物 B1・B2

ある。調整は内外面とも刷毛目調整である。(9)は無頸壺の口縁部と推定される。口縁部には5条の沈線が施され、端部の平坦面は内傾している。

(1)～(5)は松本IV-2に(6)・(7)は草田1期にあたる。

(10)～(13)はV層から出土したものである。(10)は口縁端部はあまり拡張していないが、凹線が3条施される。(11)は口縁が拡張され4条の擬凹線が施されており、器壁も厚くなっている。頸部外面には刺突紋が施される。(12)は鼓形器台で、風化が著しいが受け部外面には擬凹線が施されるようである。(13)は甕の底部と思われ内面はヘラ削りである。

(10)・(11)は草田1期、(12)草田3期にあたる。

(14)～(24)はIV層から出土したものである。(14)は壺の口縁部と思われ、端部には3条の凹線が施される。(15)・(16)は口縁端部は内傾し短小で3条の凹線を施している。胴部内面は頸部まで縦方向のヘラ削りが達している。(17)は短いが直立する口縁に3条の凹線が施されている。胴部の頸部付近は横方向のヘラ削りが施される。(18)～(20)は複合口縁の甕である。(18)は口縁外面には擬凹線が施されており、下段の突出は下垂ぎみである。(19)は口縁端部は丸く收め、下段の突出はシャープさを欠く。肩部には綾杉紋が施される。(20)も口縁端部を丸く收め、下段の突出はシャープさを欠く。(21)は底部で内面はヘラ削りである。(22)は装飾壺の胴部直帶とおもわれ、櫛状工具による列点紋が施されている。(23)は鼓形器台で、脚部外面は不明瞭だが擬凹線が施されているようである。施紋後にナデ消された可能性もある。また、筒部外面にはピッチの一定しない列点紋がある。

(24)は単純口縁の甕である。口縁部は直線的に開くが、端部が若干外反し、やや丸みを帯びているが平坦面を持つ。底部は完全な丸底を呈する。肩部には平行線紋とその下に波状紋が施されており、両方とも全局している。胴部内面はヘラ削りで底部には浅い指頭圧痕が残る。また、底より少し上に5mmほどの小孔がある。外面の頸部を除く全体と、内面の底部には煤が付着している。この土器が溝の埋土から出土した中では最も新しい時期に当たる。

(25)は大溝内ではなく大溝西側の肩付近の地山直上より出土したものである。口縁部は上側のみ

拡張しており3条の凹線を施す。胴部外面は最大径に列点紋があり、それより上半は縦方向の刷毛目調整、下半はミガキである。内面は底部から頸部付近までヘラ削りがなされ、頸部には刷毛目ないしナデが施される。

底部は欠損しているが、小さな底部がつくと思われる。また、胴部最大径以下は全面煤が付着している。

(14)・(15)・(25)は松本IV-2、(16)・(17)は草田1期、(18)・(23)は草田3期、(19)・(20)は草田4期にあたる。

(26)～(30)は調査区のB-1・2区で出土したものである。(26)は口縁部は内傾し3条の凹線を施す。(27)は肩部に列点紋があり、胴部内面のヘラ削りは頸部付近まであがっている。(28)は口縁端部をつまみ上げたように上方にのびている。(29)は口縁部は外方に開き、端部は折り曲げたようになっている。(30)は注口部分である。(26)・(27)は松本IV-2、(28)・(29)は草田5期にあたる。

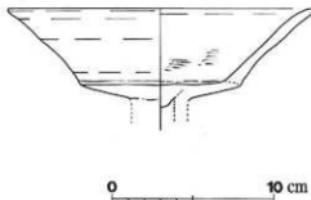
大溝廃絶後の堆積層（第19図）

大溝の最後の掘り返し部分に堆積したI層の上にはB層が堆積している。この層には掘り返しの痕跡がないことから、大溝が機能を失った後に堆積したものである。この層中から古墳時代中期の高坏（第18図）が1点のみ出土している。

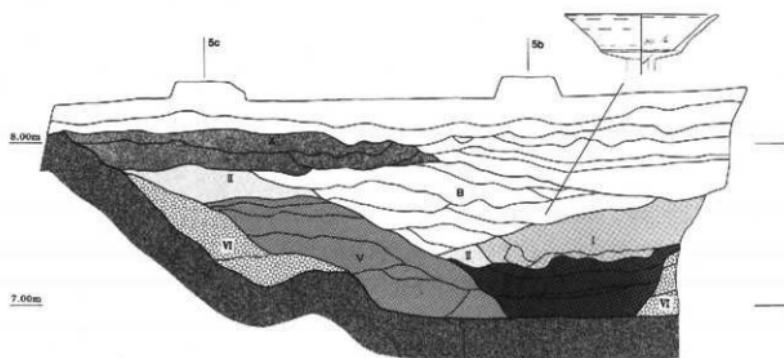
この土器は坏底部と口縁部の境に段を有する高坏で底部に対して口縁部が長く直線的にのびる。接合法は円盤充填法によっている。

道路状遺構（第20図）

B層は大溝の東側半分を覆っており、この層の上面が



第18図 大溝出土遺物



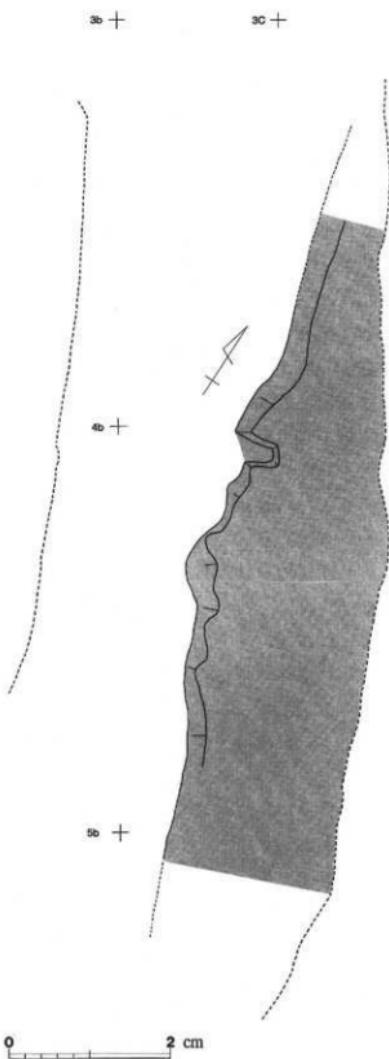
第19図 大溝土層図 (5line)

地山である砂礫層と同じ高さになる。この層は砂と粘質土が混ざり合った上層で、非常に堅くしまっており、砂礫層に含まれる輕石が多く含まれている。この層は幅2.1m・長さ8.1mの範囲で面的に検出されており、この層の範囲は盛り土によって造られた道路状遺構と思われる。輕石も小さいものが多く、堅くしめるために碎いて混ぜたものようである。またこの遺構の西側は傾斜して低くなっているので側溝の役割を果たしたと思われる。ここから土器が出土しているが、大半は大溝に伴うと思われる遺物である。しかしながら出雲4期の蓋や高台付きの土師器などが出土しており、これらがこの遺構の時期を示すものと思われる。

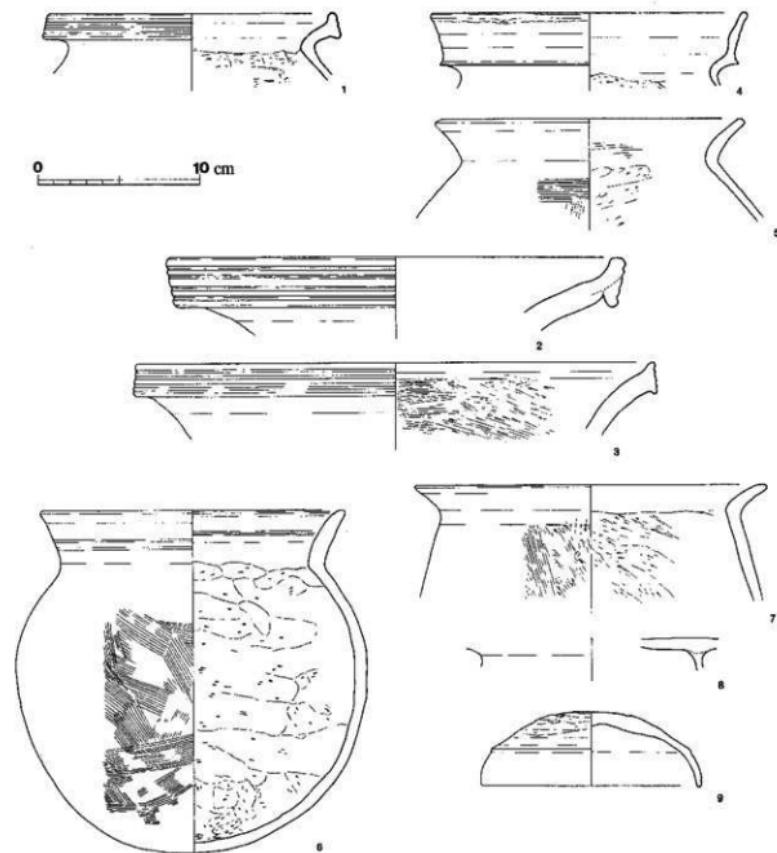
道路状遺構出土遺物（第21図）

(1)～(4)は弥生土器である。(1)は口縁は短小だがやや器壁が厚くしっかりし、3条の凹線を施す。胸部内面は頸部以下へラ削りである。(4)は複合口縁を呈し端部は丸く収める。下段の突出も比較的明瞭である。(2)・(3)は壺あるいは器台の口縁と思われる。(2)は器壁の厚い土器である。口縁部には4条の沈線を施した後に横撫でを行っている。また、内外面とも赤色顔料が塗布されている。(3)は口縁部には4条の凹線を施している。内面は粗い刷毛目が施される。

(5)は非常に小さな破片であるが、布留式の甕と思われる。口縁は若干外反気味に立ち上がり、端部は丸み



第20図 道路状遺構平面図
(破線は大溝)



第21図 道路状遺構出土遺物

があるものの平坦面を持つ。肩部には刷毛原体による平行線紋が施される。

(6)・(7)は古墳時代後期以降の土器と思われる。(6)・(7)は単純口縁の壺で、(6)は完形に復元された。やや外反気味の口縁で端部は薄くなる。胴部はほぼ円形である。(7)は口縁が開き、胴部は肩の張らない長細いタイプである。(8)は非常に小さな破片であるが上師器の壺である。高台が付き、内外面とも赤色顔料を塗布している。(9)は須恵器の壺蓋である。天井部は回転へら削りで、非常に雑で削りの単位は不明瞭である。口縁端部はそのまま丸く收める。

4. 調査区C

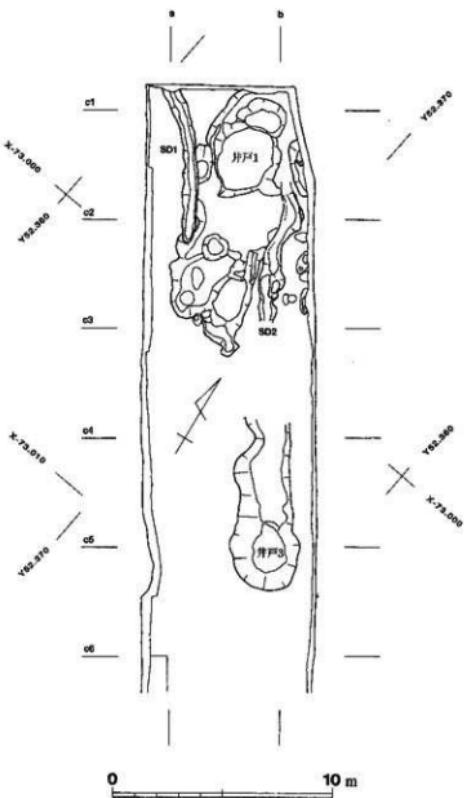
C区は南端の調査区で微高地の高所側にあたる。遺構検出面となった地山の砂礫層は標高8.4mでA区・B区に比べて安定した状態である。この調査区でもB区で検出された大溝の一部が検出されている。また、弥生時代の遺構として他に埋甕を伴う土壌がある。これらの遺構は調査区の南側で検出されている。またこの調査区の南に隣接している古志公民館建設に伴う調査でも弥生中期後葉の竪穴住居が3棟検出されており、C区の中央部から微高地の高所にかけてが古志本郷遺跡の居住域となっているようである。その他の遺構としては近世の井戸や土壌がいくつか検出されている。これらの遺構も地山で検出され、弥生時代の包含層も検出されないことから、近世以降に大きな改変が行われたようである。

耕作土の下には近世の遺構を切る溝が南北方向にいくつか検出されているが、これらは最近の烟か水田に伴うものと考えられる。

SK01 (第25図)

調査区の南側で検出された遺構で、大溝の肩付近に重なるように堀込まれている。現状ではこの遺構が大溝を切っているが、出土した土器は大溝掘削時の土器と同じことから、大溝掘削後早い時期にこの土壌は掘られたものと思われる。東西2.14m・南北1.52mを測る不正形な楕円形プランである。深さは34cmで、非常に浅い皿状の断面を呈する。また、土壌の西側をピット状に掘りくぼめそこに土器を埋めている。

この土器は、胴部の下半部が破粹され失われており、底がない状態で設置されていた。口縁から



第22図 C区遺構配置図(北側)

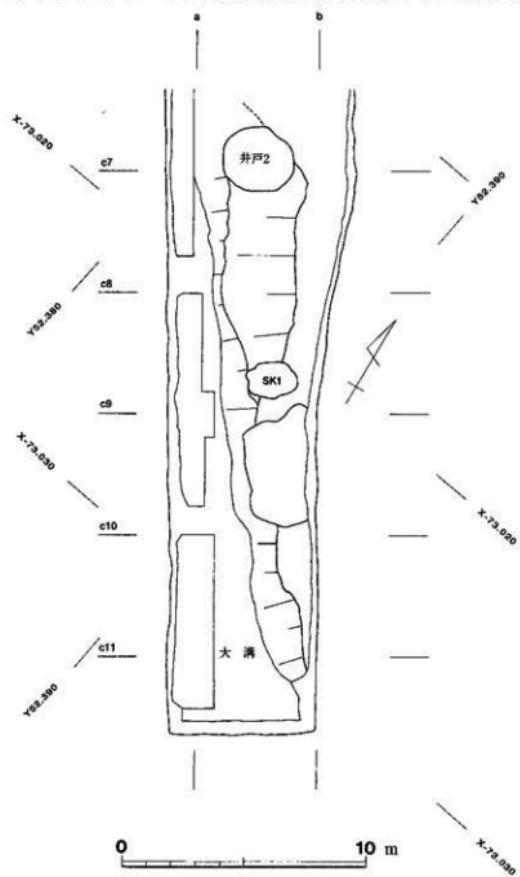
肩部にかけては当初から失われていたかわからない。

SK01出土遺物

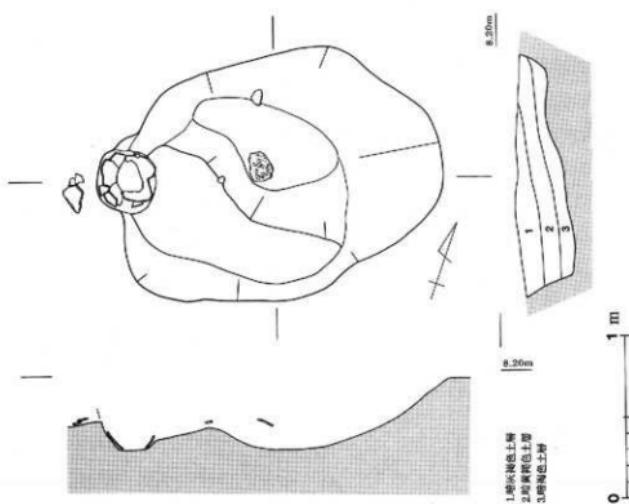
この土器は甕の胴部と思われ、外面は縦方向のヘラミガキで内面はヘラ削りである。現存している上端は垂直に立ち上がっており胴部最大径にあたり、そこに列点紋が施されている。胴が張っていることから時期は松本IV期のものと思われ、大溝掘削時の土器と同時期と思われる。

大溝

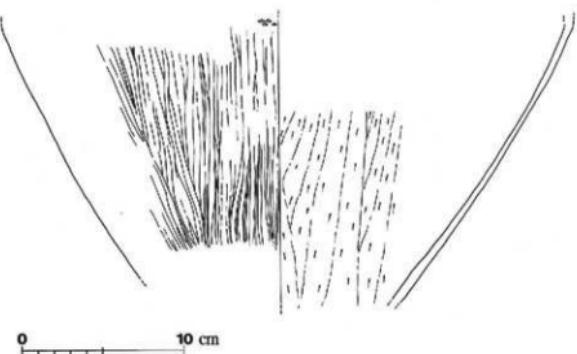
C区では調査区の南半分で検出された。溝の東側の傾斜を検出したのみで、西側は調査区外になる。長さ24mにわたり検出された。幅は検出した部分で5、6mあり、B区で検出された部分にくらべて非常に大きな規模になっている。深さは1、6mである。断面は逆台形を呈するものと思われるが、C区で検出した北半分(C-8・9)は非常に緩やかな傾斜になっており、中央部と思われるところのみ溝状に掘り込まれている。この傾斜の緩やかな部分は、埋甕をした土壤も検出されており、東側では住居も確認されていることからなんらかの役割を持っていたものと思われる。ここではB区のようにはっきりとした掘り返しの状況は確認できなかったが、底に堆積している土層は斜めにカットされていることから、B区同様に掘り返しが繰り返し行われ使用してきたものと考えられる。B区に比べて規模は大きくなっているが、B区で見られたように掘り返しごとに溝の規模が大きく縮小するような様子は見られない。またB区のI層に対応する層としてI層が確認できる。この層は



第23図 C区遺構配置図(南側)



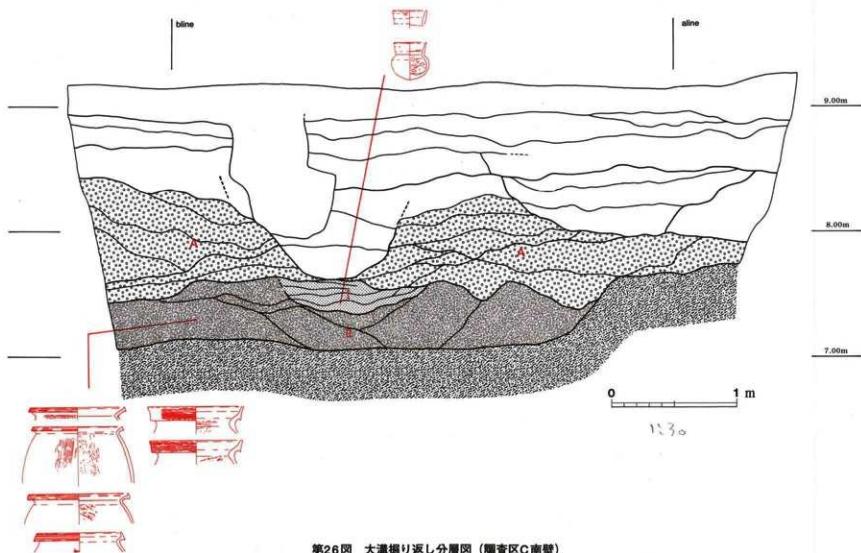
第24図 SK01



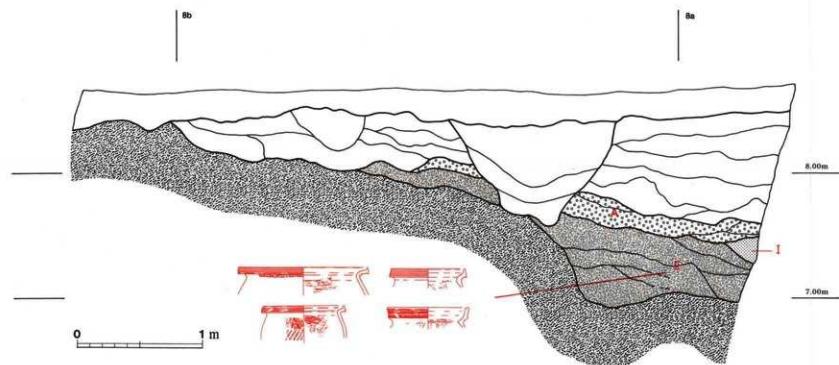
第25図 SK01出土遺物

溝のほぼ中央にあたると思われる標高7.5 m のあたりに幅1.2 m、厚さ30 cmで皿状に堆積しており、B区で観察されたのとほぼ同規模である。水流によって形成された砂層である。この層からも布留式の小型丸底壺が出土している。

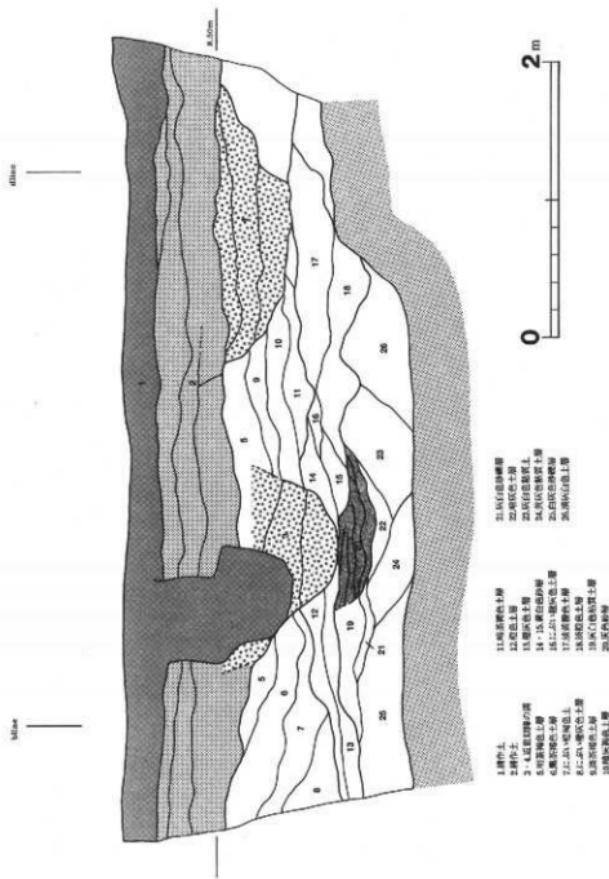
B区に比べると多くの土器が出土している。これは、C区で検出された大溝の東側が居住域になっていることがこれまでの調査で分かっており、付近からこの溝に廃棄されたものと思われる。遺物の大半は溝東側の斜面付近から出土している。南端セクションの3・4層や8ラインセクションの3層中から多くの土器が出土している。溝の斜面に沿って上から流れてきたような状況で出土するものもあった。おそらく大半の破片は溝の斜面付近に廃棄されそこにたまっていたものと思われる。出土した土器は在地のもの以外に、備後北部の塙町式土器、北部九州の須玖式土器や畿内の布留式土器、それに分銅形土製品なども出土している。



第26図 大溝掘り返し分層図 (調査区C南壁)



第27図 大溝掘り返し分層図 (8line)



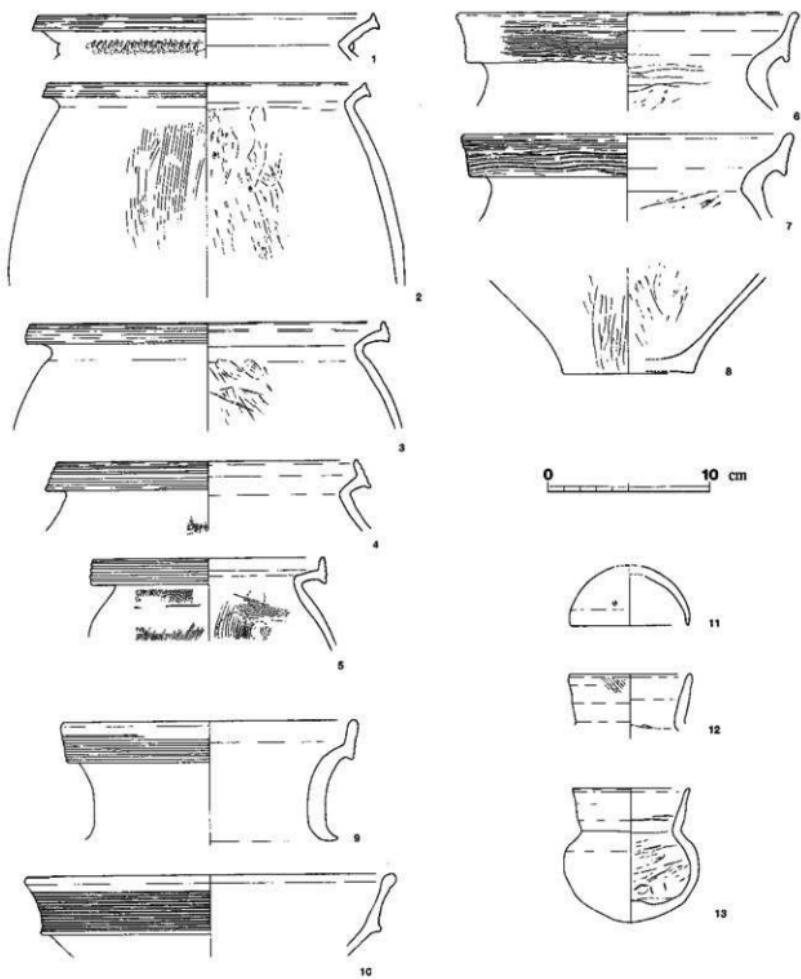
第28図 C区南壁土層図

大溝の使用期間は掘り返しが行われていたり、規模の大きな遺構であることから、各層とも各時期のものが混在しているが、掘削時に伴うと思われるもっとも古い時期の土器は松本IV-2にあたる。後期前半の土器も比較的多くの量をしめるが、その後の遺物は減少し、もっとも新しい時期にあたる布留式の小型丸底壺が廃棄した時期を示すと考えられる。つまり、中期の後葉に掘削され古墳時代初頭には埋没していると考えられ、B区で確認された時期とも対応する。

大溝出土遺物

C-10・11区（第29～34図）

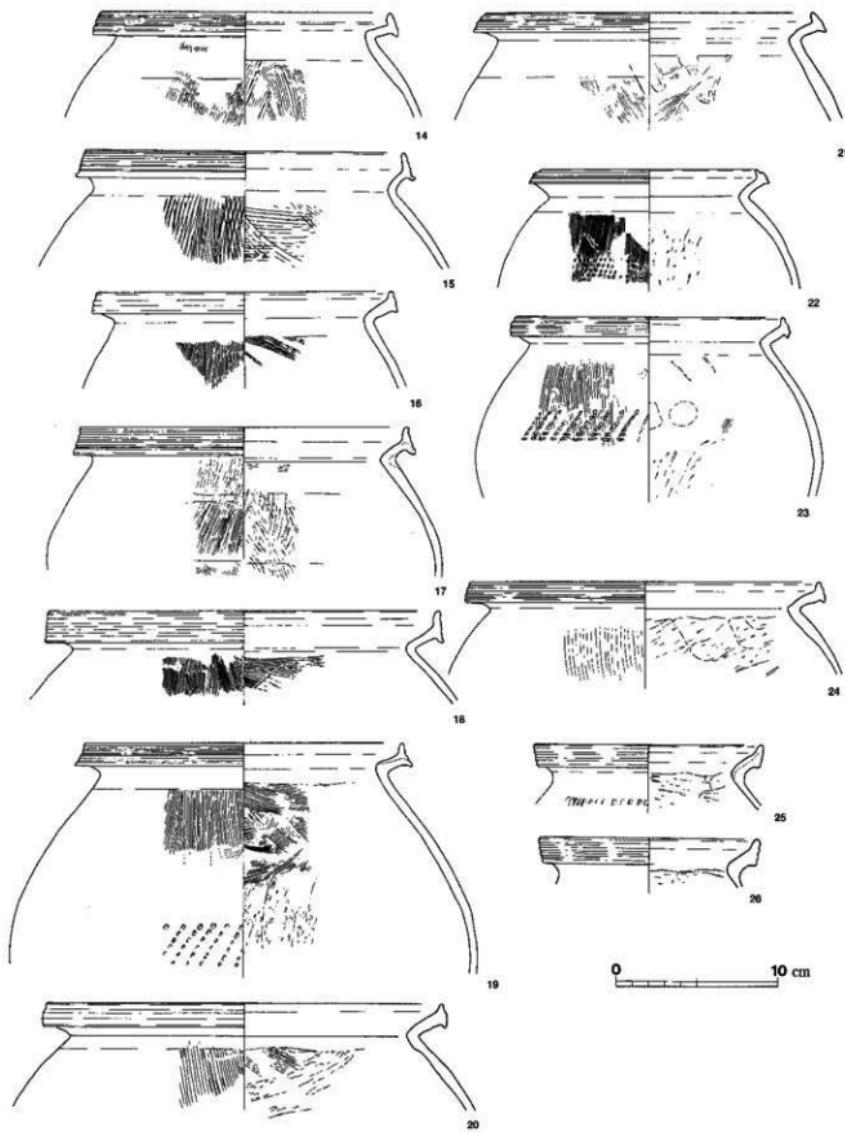
(1)～(8)はⅢ層から出土している。(1)～(5)は口縁端部を拡張し2から4条の凹線を施している。(1)は頸部に刺突紋を施した貼り付け突端がある。(2)は口縁部は短く、胴はあまり張ら



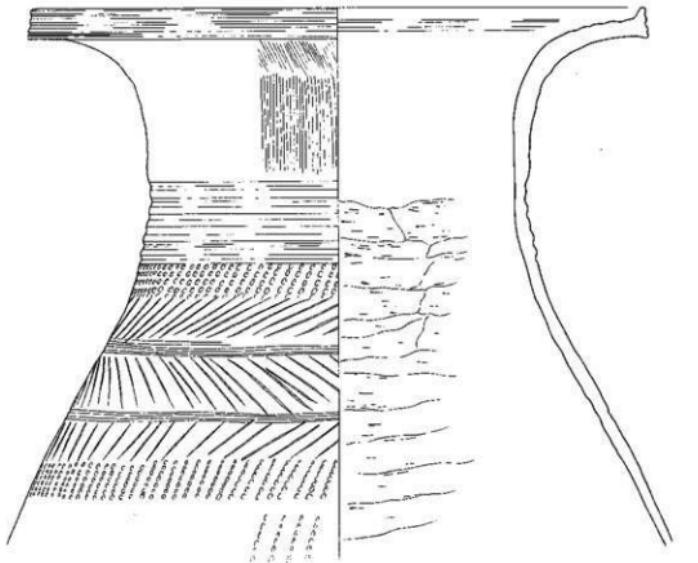
第29図 大溝出土遺物C-10・11 (1~8 II層、11~13 I層、9・10 A層)

ないプロポーションである。口縁端部には2条の凹線を施し、胴部内面は頸部付近まで縦方向のヘラ削りが施される。(3)は口縁端部には3条の凹線が施され、胴部内面はヘラ削りが頸部付近まであがっている。(4)は口縁端部の拡張が比較的大きく4条の凹線が施される。(5)は、口縁端部が直立しており4条の凹線が施される。

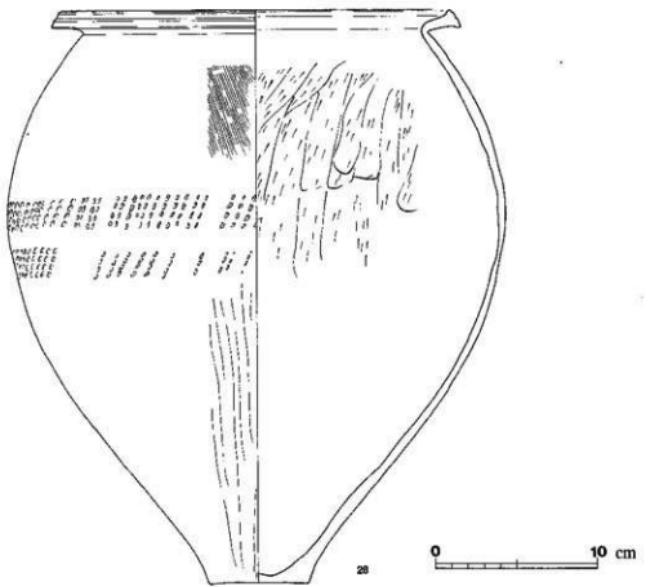
(6)(7)は複合口縁を呈する甕である。頸部の器壁が厚く、口縁端部は丸く收め、下段の突出は下



第30図 大溝出土遺物C-10・11(A層)



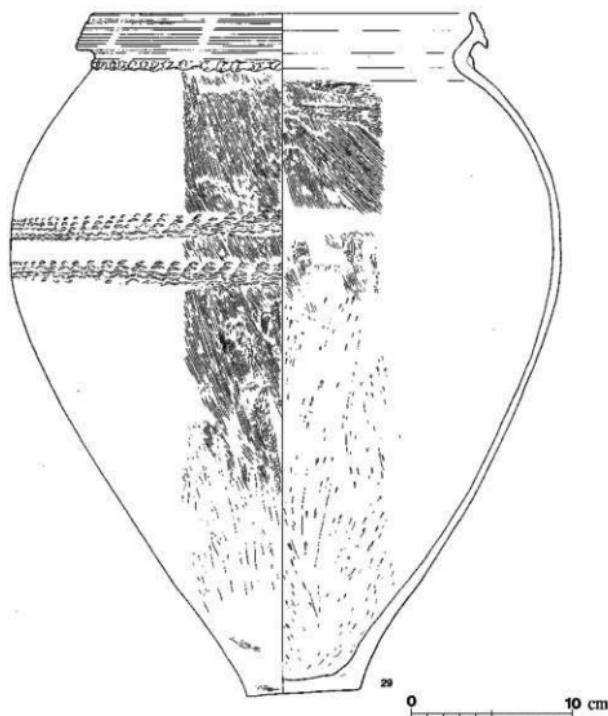
27



28

0 10 cm

第31図 大溝出土遺物 C10・11



第32図 大溝出土遺物 C・10・11 (A層)

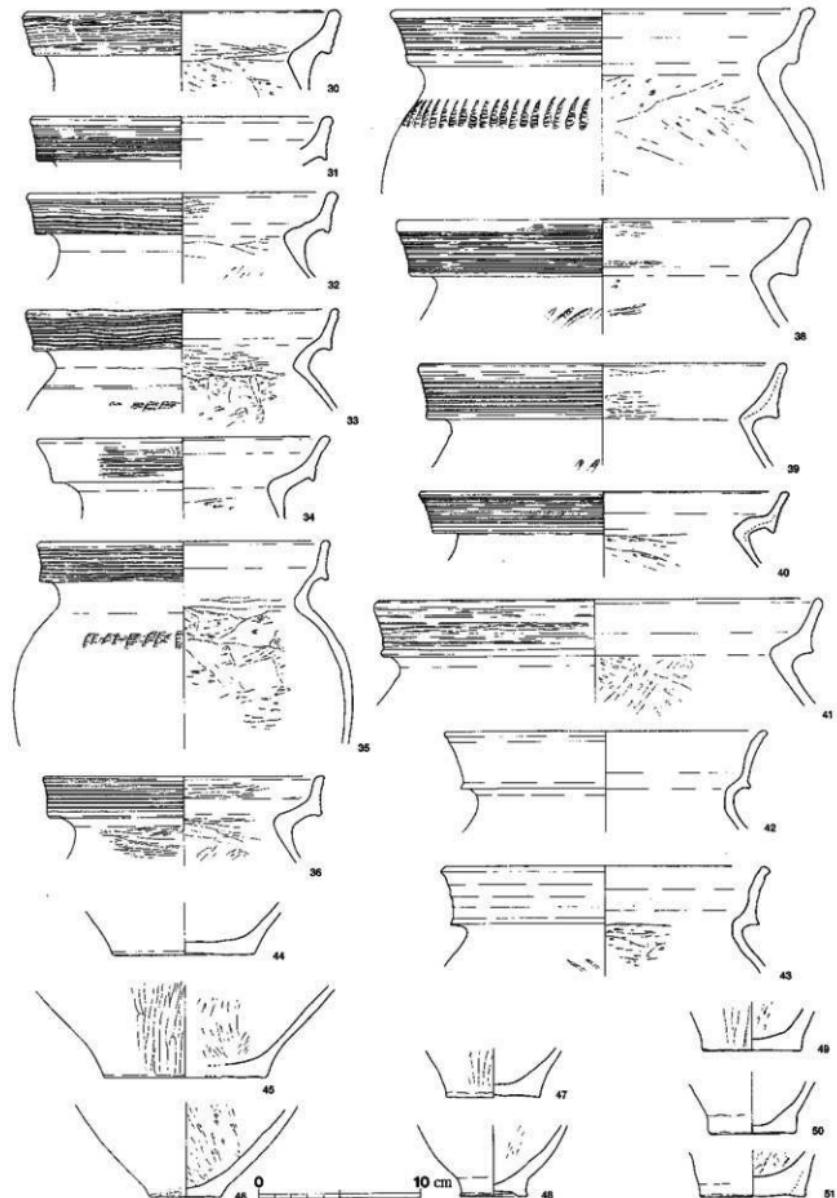
垂する。外面には擬凹線紋が施される。(8)は底部で、外面ヘラミガキで内面はヘラ削りである。

(9)・(10)はA層の7~12層から出土している。

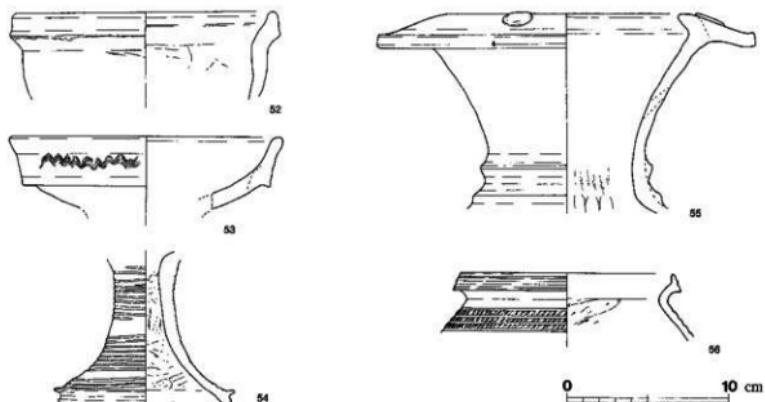
(9)は複合口縁を呈する壺である。口縁は垂直に立ち上がり、4条の擬凹線が施される。(10)は器台の受け部と思われる。比較的薄い器壁で、口縁端部は器壁が厚くなり丸く収める。口縁外面には12条の擬凹線を施す。

(11)~(13)はI層から出土している。(11)は半球形を呈する蓋と推定され、口縁部に小孔がある。(12)(13)は小型丸底壺で口縁端部は薄くのびている。(13)はほぼ完形に近く、底部は丸底で、胴部内面はヘラ削りである。(1)~(5)は松本IV-2、(6)~(7)は草田3期、(9)・(10)は草田2期にあたる。

(14)~(56)はA層のうち3・4層から出土している。(14)~(24)は短小で内傾する口縁を持ち、3から5条の凹線を施す。(14)~(17)は胴部外面は刷毛目調整で、内面は頸部付近は横撫でが行われ、それより肩部までは刷毛目調整である。(18)は口縁端部が直立気味で他のものに比べると幅



第33図 大溝出土遺物C-10・11 (A層)

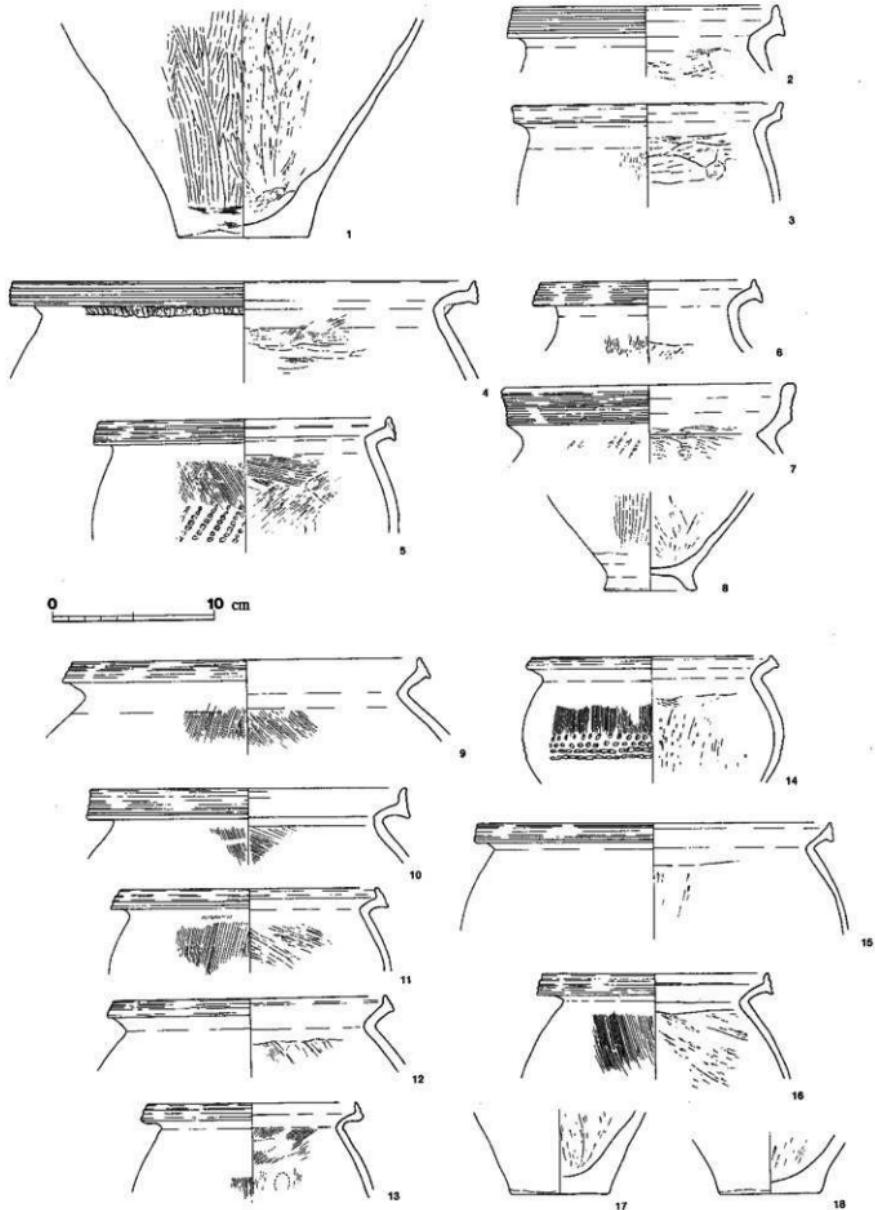


第34図 大溝出土遺物C-10・11 (A層)

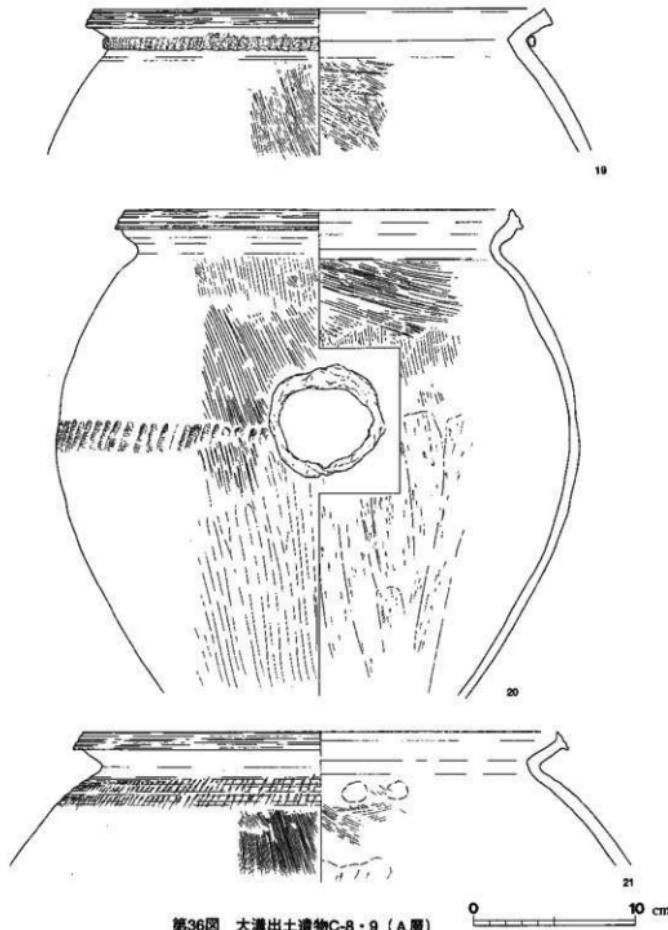
が広い。胴部内面は頸部以下刷毛目調整である。(14)～(18)は胴部最大径以下は現存していないが、残っている部分にはヘラ削りは見られない。(19)～(23)も内傾する短小な口縁部である。胴部内面の調整は肩部まで縦方向のヘラ削りが及んでおり、それから頸部までは刷毛目調整と横撫でである。(19)・(22)・(23)には肩部外面に櫛状工具による列点紋が施されている。

(24)～(26)は内面のヘラ削りが頸部まで及んでおり、頸部付近は横方向のヘラ削りである。(24)の口縁端部は短小で内傾しており、3条の凹線を施す。(25)・(26)の口縁端部は短いがやや外傾して立ち上がり3条の凹線を施す。

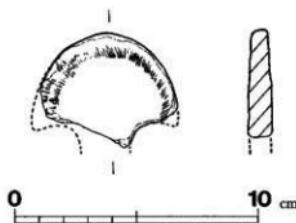
(27)は大型の壺である。口縁端部は短小であまり拡長せず、外面には3条の凹線が施される。口縁が水平に開く部分の内面にも3条の凹線が施される。頸部から胴部にかけては紋様が施されており、頸部に6条の凹線紋が施され、以下連続して胴部には列点紋・刺突紋(右上がり)・凹線紋・刺突紋(左上がり)・凹線紋・刺突紋(右上がり)・列点紋・列点紋の順に施紋されている。調整は頸部外面は縦方向の刷毛目調整の後撫でているようである。内面は頸部に横方向の刷毛目調整後に撫で、頸部途中から以下ヘラ削りである。(28)は全体の器形がわかるもので、口縁径にたいして胴部最大径が大きく胴が張ったプロポーションである。口縁部は外方に短く開き端部はあまり拡張せず3条の凹線が施される。胴部最大径には列点紋が2段施される。風化が著しく不明瞭であるが、外面は肩部は縦方向の刷毛目、胴部最大径以下は縦方向のミガキのようである。内面は縦方向のヘラ削りが頸部より2から3cm下まで上がっている。(14)～(23)・(27)～(29)は松本IV-2、(24)～(26)は草田1期にあたる。



第35図 大溝出土遺物C-8・9 (1~8 II層、9~18 A層)

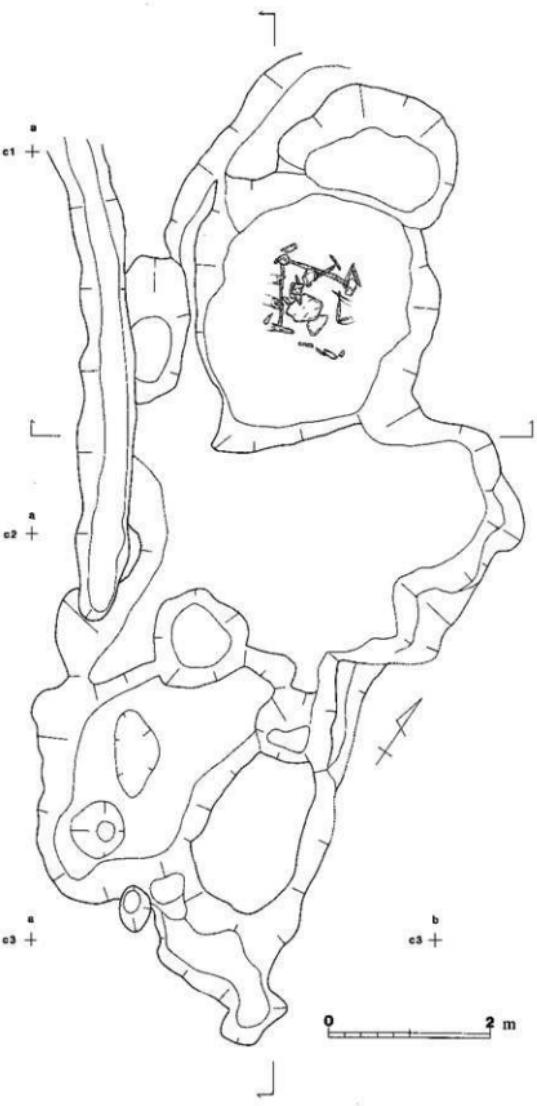


第36図 大溝出土遺物C-8・9 (A層)



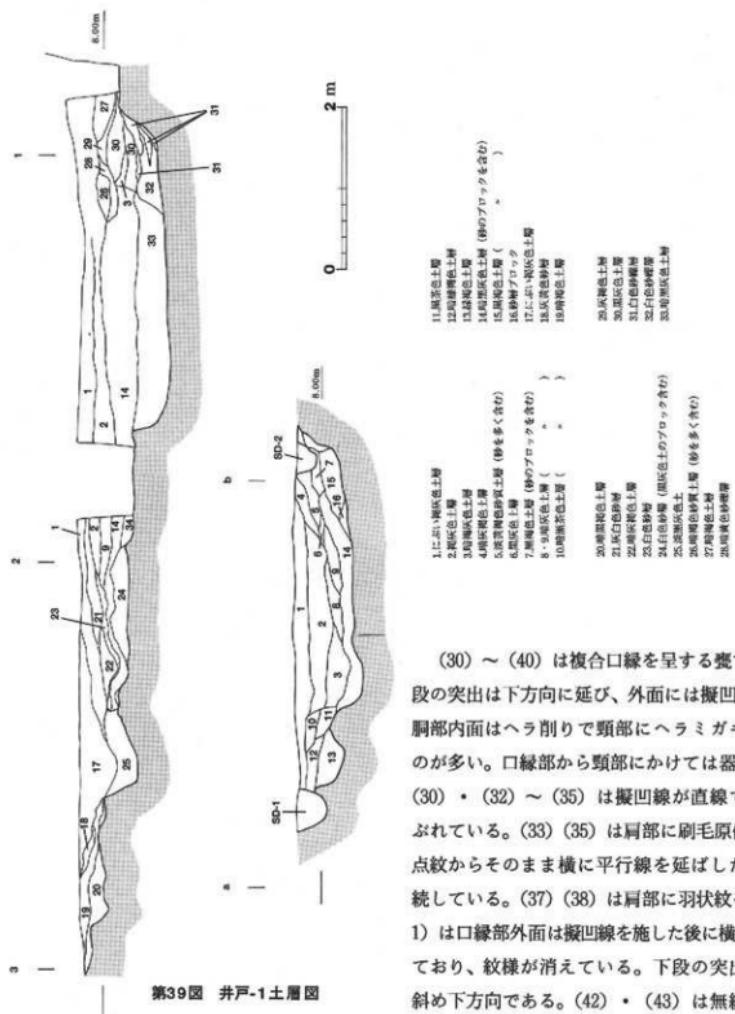
第37図 大溝出土遺物C-8・9 (A層)

(29) は、ほぼ完形に復元されている。比較的法量の大きな壺で胸部最大径は真ん中よりも上にある。口縁端部は大きく上下に拡張し内傾しており、4条の凹線を施している。頸部には貼り付け突帯に刺突紋がめぐる。貼り付け突帯は厚みがなく、刺突紋も雑な感がありかなり形態化している。胸部最大径には列点紋が2段めぐっている。この列点紋はやや雑な感じで1単位の間が連続していることから波状紋



第38図 井戸-1

のようにも見えるが、列点紋を弱冠横に引くような施紋方法をとっている。胴部外面は底部から3分の1はミガキが、それより頸部までは刷毛目である。内面は底部から最大径まではヘラ削りで、それより頸部までは刷毛目である。底部は法量のわりに小さいが自立できる。



第39図 井戸-1土層図

縁で、(42)は口縁端部は先細りとなり外側に折り曲げたようになっている。(43)は口縁部は外反して立ち上がり、均等な厚さで先端に平坦面を持つ。肩部には刺突紋が施されている。(30)～(41)は草田2期、(42)は草田5期、(43)は草田6期にあたる。

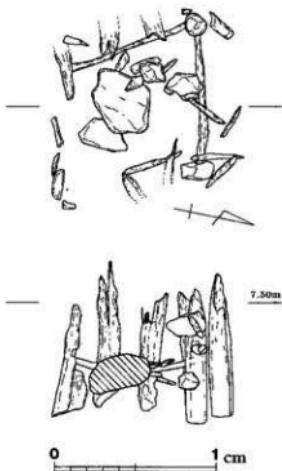
(44)～(51)は底部で、調整がわかるものは外面はヘラミガキで内面はヘラ削りである。(48)は内湾気味に立ち上がる底部に高台状の脚が付いており、比較的丁寧な作りをしている。

(52)は小型の鉢と思われ、複合口縁を呈している。口縁端部はそのまま丸く收め、下段の突出もなく稜がつく程度である。口縁部は内外面とも横撫でが行われ、胴部内面は削りの後に撫でているようである。外面には煤が付着している。(53)は器台の受け部であろうか、複合口縁を呈しており端部は

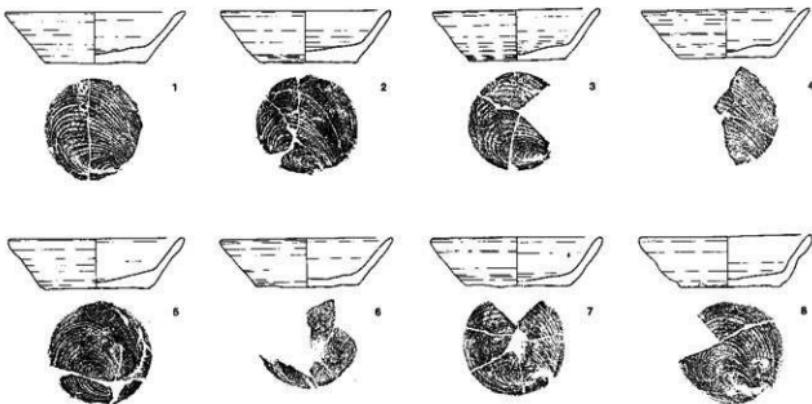
器壁がやや厚くなり断面が丸くなる。下段の突出は下向きである。口縁外面にはピッチのきつい波状文が施される。また、外面には赤色顔料が塗布される。(54)は高环の脚で螺旋に巡らされた沈線が3段施される。脚端部には深い凹線が施され2段になっている。(55)は北部九州の須次式のいわゆる鋤先状口縁を呈する壺である。頸部には2条の貼り付け突帯がある。口縁上面には円形浮紋が2カ所に残っており、3から4カ所についていると思われる。(56)は備後北部の塩町式土器と思われる。口縁端部には3条の凹線が施され、口縁部の作りは在地ものと変わらない。肩部には4条の凹線の間に刺突紋が3列施されている。内面頸部以下はヘラ削りである。この肩部と同じ紋様を持つ別個体の破片が同じ層からほかにも1点出土している。

C-8・9区(第35~37図)

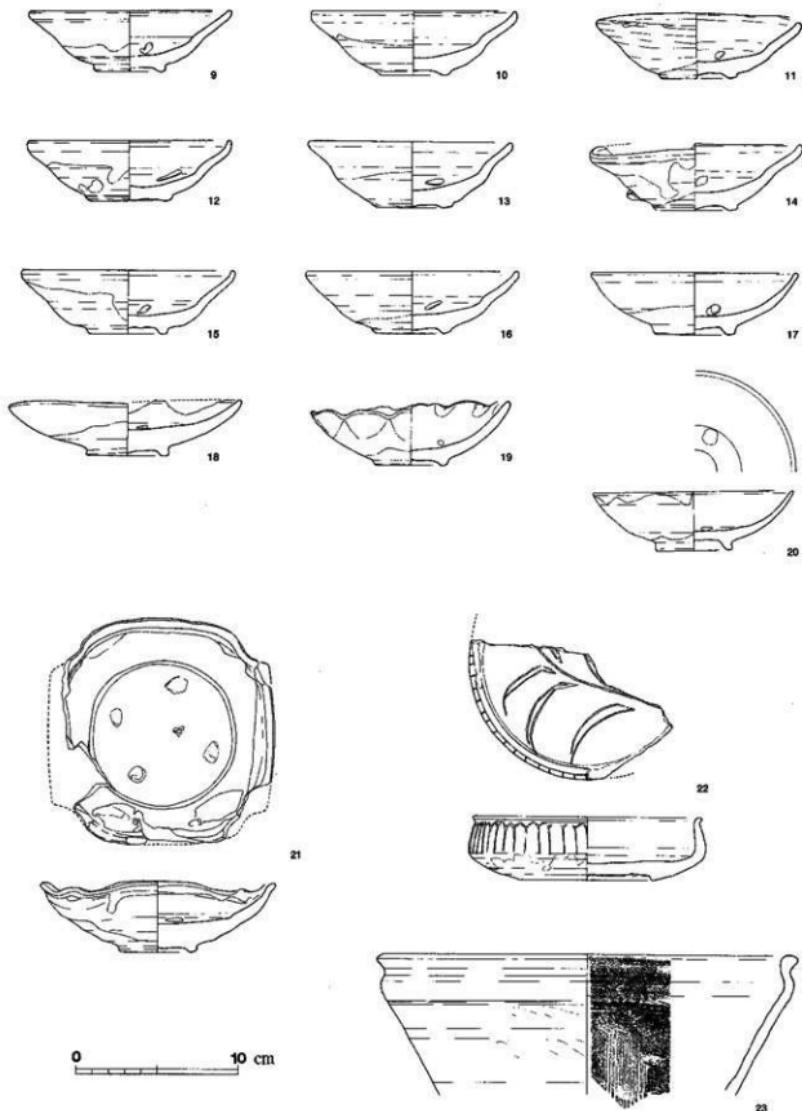
(1)~(3)はII層上部からの出土である。(1)は底部で底径8cmを測り、比較的大型の壺の底と推定される。(2)・(3)は壺の口縁部で、(2)は口縁端部の拡張はやや広く4条の凹線を施す。頸部は



第40図 井戸-1 (2)



第41図 井戸-1 出土遺物(1)



第42図 井戸-1 出土遺物 (2)

屈曲せず、緩やかに胴部へと続く。内面頸部以下は箇削りである。

(3) は口縁端部は短く上方にのみ延び、凹線の上を強く撫でているようである。内面頸部以下は箇削りである。

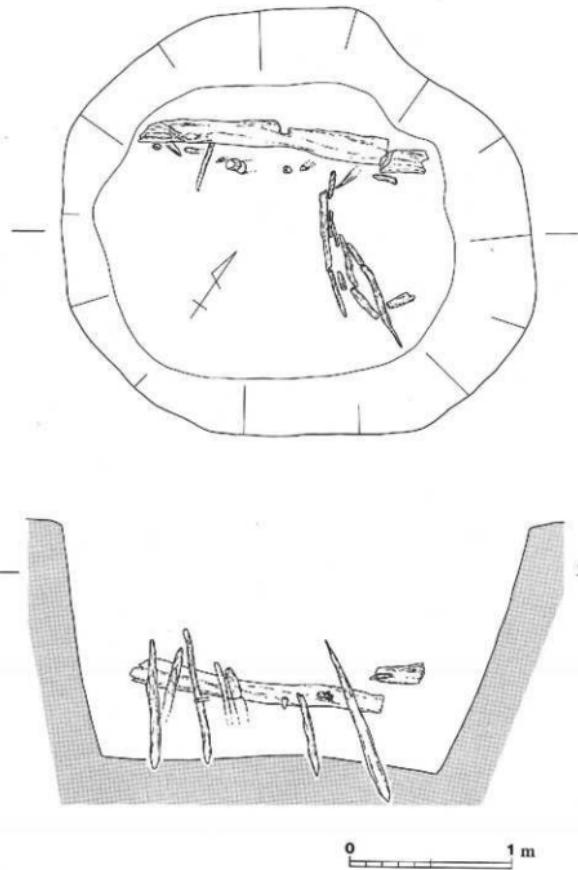
(4)～(8) は II 層下部からの出土である。(4)～(6) は口縁端部の拡張が短小で 3 条の凹線を施す。

(4) は頸部の貼り付け突帯にへらによる押圧紋が施される。胴部内面の頸部付近はヘラミガキである。(5) は胴部最大径に列点紋がある。(6) は頸部が屈曲せずにやや幅を持っている。頸部から下はヘラ削りである。(7) は複合口縁を呈し 7 条の擬凹線を施す。砂粒をあまり含まない胎土で、作りも丁寧で頸部以下もヘラミガキが施されている。頸部

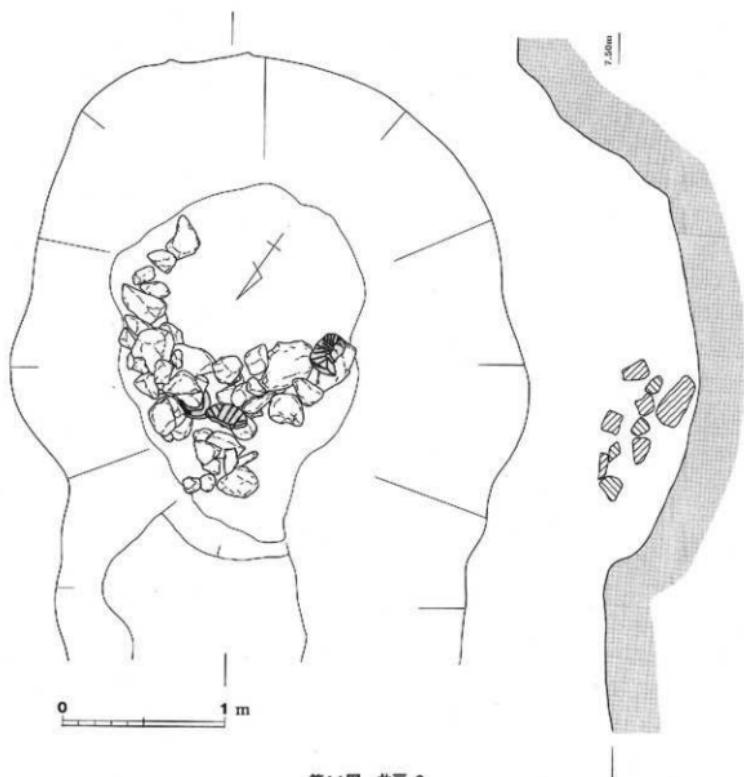
外面に列点紋が施されている。(8) は高台のような脚がついた底部である。底部は外面ヘラミガキで内面はヘラ削りである。脚は内外面とも横撫である。

(9)～(21) は A 層から出土している。(9)～(16)・(19)～(21) は口縁端部の拡張が短く、外面には凹線を施す。(9)～(11) は残っている部分では内面のヘラ削りは見られない。(12)～(16) は内面の削りが頸部付近にまであがっている。

(19) は口縁端部はほとんど拡張せず、頸部に列点紋の施された貼り付け突帯を持つ。胴部内面は肩部は刷毛目調整が施されており、削りは上がってきていません。(20) は口縁端部には 3 条の凹線が施



第43図 井戸-2



第44図 井戸-3

され、胴部最大径に列点紋がめぐっている。また、胴部には径 6 cm の穴があいており、焼成後にあけられたか注口がついていたものと想定される。胴部外面は上半は縦方向の刷毛目で下半は縦方向のヘラミガキである。内面は最大径以下は縦方向のヘラ削りで、頸部までは刷毛目調整である。(21) は塩町式の比較的大型の甕で、口縫端部は短小で 3 条の凹線を施す。胴部内面は刷毛目調整で残存している部分にわずかに削りが観察できることから、最大径以下はヘラ削りと思われる。肩部には 4 条の凹線が刺突紋を施した後に施される。この紋様は 2 条の凹線に対し刺突紋が 1 段施されるため、刺突紋が 4 列あるように見える。

(22) は分銅形土製品であり、推定で最大幅は幅 6 cm で、抉り部分の幅は 2 cm と思われる。厚さは 1 cm を測る。上面には長さ 2 ~ 3 mm の細線が外形の弧に沿って施され、左側は 2 列になっている。

(4) ~ (6) • (9) ~ (16) • (19) • (20) は松本IV-2、(2) • (3) • (6) は草田1期、(7) は草田2期にあたる。

この遺構は、調査区Cの北端で検出されたもので、砂礫層に掘り込まれた非常に大きな落ち込みになっている。この落ち込みの床面にはさらにいくつかの落ち込みがあり、北側と南側に大きな落ち込みがある。

この北側の落ち込みは幅3m・長さ3.2mの不整円形プランを呈し、その中心より井戸枠を検出している。本来はこの落ち込みの部分のみが井戸の掘り形と考えられ、その他の落ち込み部分は別の遺構があったか、井戸の廃棄時の擾乱と考えられる。この井戸枠は南北75cm・幅90cmを測り、現状では崩壊が進んでいるものの当初は正方形を呈していたものと思われる。井戸枠の構造は、四隅に杭が打たれており、杭にはほど穴が加工され、横木が4カ所それぞれめ込まれている。この枠の外側に横木に沿って幅15~20cmの板が隙間なく立てられていたものと思われる。この板も埋める側の片面をカットして鑿の先端のように加工している。

また、井戸枠内には長さ40cm・幅35cm・厚さ20cmの比較的大きな石の他数個の石がおかれている。また、落ち込みの上面からは石の他に、完形に近い土師質土器や陶磁器が出土していることから、廃棄する時点で祭祀が行われたものと思われる。

井戸一出土遺物（第41・42図）

(1)～(8)は土師質土器である。口縁部は直線的に開き、口径は10~11cm・底径は6cm前後におさまる。底部はすべて回転糸切りである。

(9)～(21)は唐津焼きである。(9)～(16)は同じ形態で法量もそろっている規格品である。口径は13cm前後、底径は5cm前後にそろっている。形態は体部の中程が外反するが、口縁部は内湾気味になり端部は上方につまみ上げたようになる。このため内面は底部と口縁部との境が段になっている。また、底部には4カ所に胎留めのがこる。高台は削り出して作られており高さはあまりない。内面と外面底部以外は釉がかかっている。(12)・(20)は内湾して立ち上がる口縁部で、端部もそのまま収める。高台が削り出されているが、比較的しっかりしている。(20)は内面は輪状に釉がかかっていない部分がある。(19)は口縁部が波状に成形されている。高台は幅も狭く低い。

(23)はすり鉢で口縁部は断面S字状になっている。スリ目は1単位が10本からなる。

井戸二（第43図）

この遺構は調査区の中央部で検出されたもので、堀形が非常に深く掘り込まれていることと、井戸枠と思われるものが底で検出されたことから井戸とした。南北2.9m・東西2.65m・深さ1.5mを測る堀形の中央に木組みの一部と思われるものが残っている。井戸枠は北側に7本の杭がほぼ直線的に打ち込まれており、その杭列の外側に長さ1.55m・幅0.16mの横木が置かれているような状況である。この横木は比較的大きな部材で、中央に幅5cm・深さ9cmのほど穴がある以外は、加工もあまり行われていない。

杭は幅5cm前後で、片面をカットして先端を作っている。杭は横木より50~60cmほど下まで打ち込まれている。また、東側には杭状の加工木が横木と同じレベルで検出されている。木組みの構造

としては杭を方形に打ち込みその周りに横木を組むような構造であったと思われる。

井戸-3（第44図）

この遺構は石組みの井戸で、堀形は南北3. 1m・東西3. 2mの不整円形プランを呈し、深さは1. 1mを測る。石積みは大半が失われており北半分を残すのみである。石積みの内包は径70cm前後と思われる。石積みは断面すり鉢状に積み上げており、石材は自然石ですり石を転用したものが含まれる。

第4章 まとめ

今回の調査地は、古志本郷遺跡の縁辺部にあたる部分と考えられることや、限られた範囲であったため、検出された遺構・遺物の数は多くはない。しかしながら、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけてこの遺跡において重要な役割を担ったと思われる大溝の一部が検出されたことは大きな成果といえる。また、古志本郷遺跡については出雲市教育委員会ならびに島根県教育委員会によってすでに8次調査まで実施され、さらなる調査も予定されていることから今後も新たな事実関係が明らかになることが予想される。以下では今回の調査ならびにこれまでの調査について整理し今後の備えとしたい。

1. 古志本郷遺跡の調査について

(1) 今回の調査（6次調査）

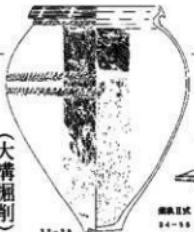
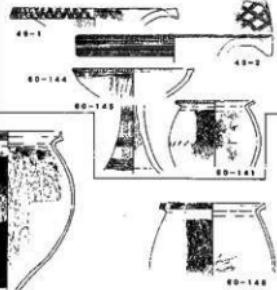
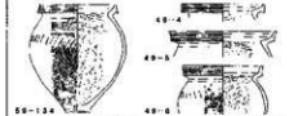
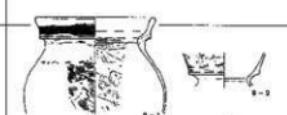
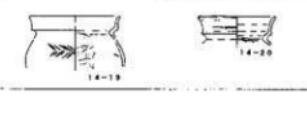
大溝について

大溝は調査区のB区の北側とC区の南側で検出され、途中は調査区外にあるが、その規模からも両調査区で検出された溝は同一のものと考えられる。A区では続きを検出できなかつたので、北に向きを変えて延びているものと思われる。また、第2次調査の古志公民館建設に伴う調査ではこの溝は検出されていないことから、おそらく今回の調査区より南側については市道本郷新宮線に沿って延びているものと思われる。大溝は東西にある微高地のちょうど谷間のような場所に掘削されており、東側の微高地を古志本郷遺跡、西側の微高地を正蓮寺周辺遺跡としている。また、市道本郷新宮線が現在の古志地区と神門地区の境界にもなっている。

大溝からは、多くの土器が出土している。図45は中期を松本編年¹、後期から古墳時代初頭までを草田編年²に従って整理したものである。確認されただけでも数回の掘り返しが行われているため、遺物は異なる時期のものが同じ層から出土することが多いが、B区では最初に堆積した層の土器は松本編年IVからV-1におさまる。また、全体的に松本IVの遺物量が多くを占めることや松本IIIの土器は出土していないことから大溝の掘削された時期は松本IVと言える。また、松本IVは2つに細分されているが、大溝から出土したものは口縁端部をしっかりと拡張しており、確認できるものでは内面へラ削りも胴部最大径から肩あたりまであがっていることから、松本IV-2に相当すると思われる。この溝は中期の末に掘削されたと考えられる。

その後、草田I期までは比較的多くの遺物が出土しているが、草田3期以降は急激に減少している。B区で検出されたSD1は草田4・5期であることや、後で紹介する1次調査では草田5期の土器が大量に出土していることから、大溝でのこの現象は遺跡の衰退を意味するものではないと考えられる。

大溝中の最新の土器は草田6期である。またB区では布留式古段階の壺がC区では最後の掘り返し部分の埋土から小型丸底壺が出土している。大溝は草田6期内の布留式と併行する段階に廃絶されることになる。古志本郷遺跡では草田7期の遺物はほとんど出土しておらず、草田6期後半から草田7期の早い段階で遺跡自体が解体していると考えられることから、大溝の規模縮小ならびに廃絶は遺跡自体の衰退を顕著に表している。

(時期)	〔他の遺構出土遺物〕		(遺跡の後期)
	松本Ⅲ	出 現 期	
IV 〔大溝掘削〕	 <p>〔6次調査大溝出土遺物〕</p> <p>分離式土器足 37-1 筒型式 34-58 輪底式 34-59</p> <p>32-29 14-28</p>	 <p>49-1 49-2 60-144 60-145 60-146 60-147 60-148</p>	支神谷遺跡 中期後半期
草田1	 <p>20-24 20-25 20-26 32-34 32-35 32-36 32-37 32-38 32-39 32-40 32-41 32-42 32-43 32-44 32-45 32-46 32-47</p>	 <p>49-1 49-2 60-124 60-125 60-126 60-127 60-128</p>	古志野遺跡1号人骨 (立岩佐共墓)
2	 <p>32-34 32-35 32-36 32-37 32-38 32-39 32-40 32-41 32-42 32-43 32-44 32-45 32-46 32-47 32-48 32-49 32-50 32-51</p>		
3	 <p>14-18 14-22</p>	 <p>5-2 5-3 5-4 5-5 5-6 5-7</p>	西谷2号墓 西谷3号墓
4	 <p>14-19 14-20</p>	 <p>5-8 5-9 5-10 5-11 5-12 5-13</p>	西谷4号墓
5	 <p>32-47</p>	 <p>54-80 55-124 55-127 55-128</p>	西谷6号墓 西谷9号墓
6 〔大溝埋没〕	 <p>32-48 28-13 32-49 15-24</p>	 <p>55-102 64-98</p>	前方後円墳時代 衰退期
7			空白期

第45図 古志本郷遺跡出土遺物変遷図



第46図 2次・6次調査遺構配置図（網掛けが弥生時代）

大溝出土外来系土器について

搬入品として備後北部の塙町式の壺（34図56・36図21）と北部九州の須玖II式³の壺（34図55）が出土している。また、分銅形土製品（37図）が1点出土している。これらの搬入品と併存する在地の土器は出土状況からは明らかに出来なかったが、塙町式については松本IVに併行するとされており、大溝出土の在地土器で最も古いのが松本IV-2であることから、これらの土器に伴うものと思われる。

須玖式については、現在のところ弥生中期から後期初頭にかけて北部九州と山陰の併行関係を考える材料はほとんどなく、直接その関係を知ることはできない。

この時期の畿内と北部九州の併行関係については多くの研究がなされている。両地域の後期にはズレが生じていたが、森岡秀人⁴や豊岡卓之⁵らの先見的な研究や池上曾根遺跡で年輪年代により河内IV-3の1点がBC53年であることが報告された⁶ことにより、両地域の後期の開始はほぼ一致するという考え方が多くなっているよう、ズレても一小様式程度という状況にあるようである⁷。出雲との併行関係がつかめる瀬戸内地方でも後期の開始が紀元前後の境頃に推定できることや⁸、土器の交差年代から北部九州と中部瀬戸内の後期の開始に大きなズレがないことが指摘されている⁹。出雲の後期初頭（松本V-1・草田1期）は鬼川市Iと併行する¹⁰ことから、出雲の後期の上限は瀬戸内や畿内の後期の上限とは一致しており、須玖II式と出雲の中期後葉（松本IV）が全部でないにしろ併行することが予想される。

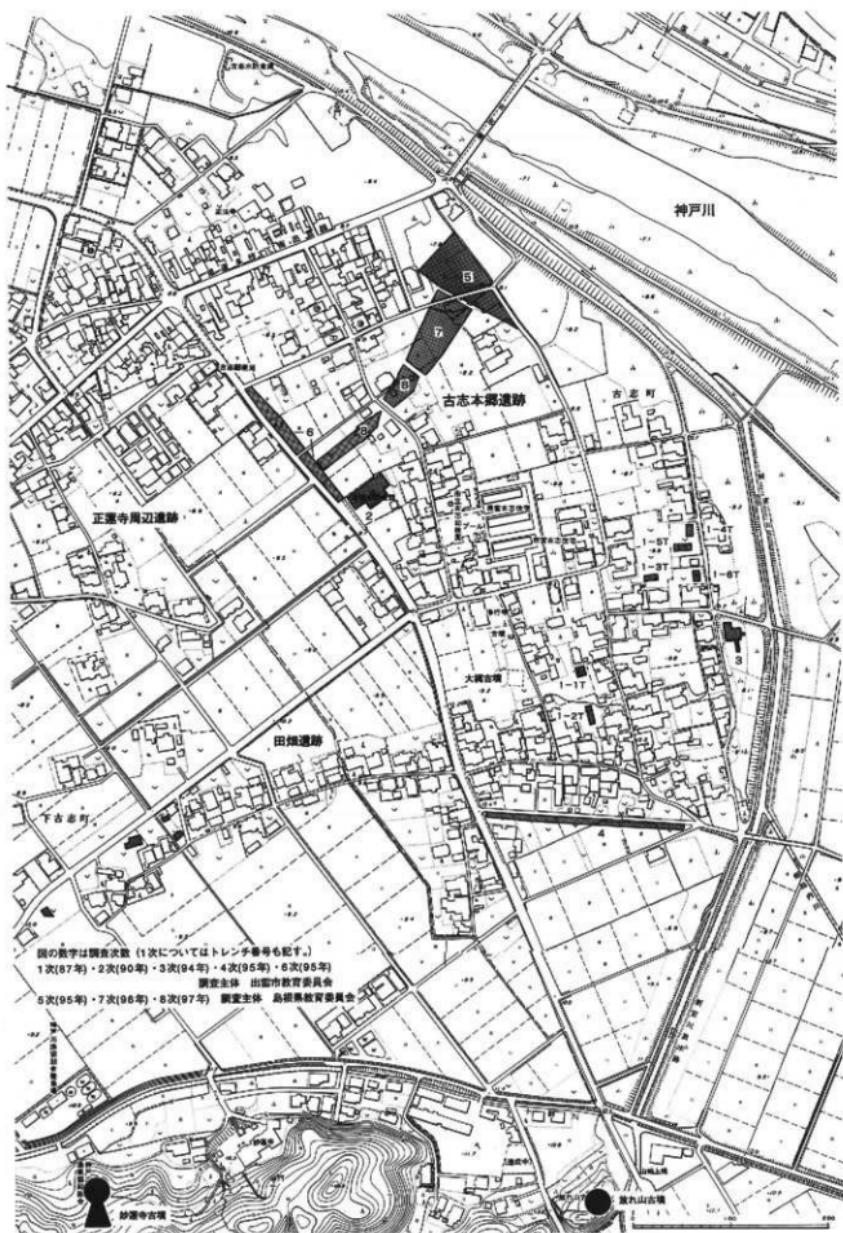
須玖II式は出雲の中期後葉（松本IV）のうちにあるとなれば、大溝出土の在地土器は松本IV-2が最も古のことから、今回出土した須玖II式の広口壺はこれらに伴うものと考えられる。

北部九州と山陰との中期後半から後期初頭の平行関係を考えるうえで参考になる資料として、平田市猪目洞窟第14号人骨が上げられる。この人骨には6個の南海産貝輪（立岩型）が右腕に装着され、後期初頭（松本V-1）の土器がともなっている。北部九州で立岩型の貝輪が盛行するのは中期後葉であることを考えると、両地域の後期の上限が大きくずれるとは考えにくい。松本IV-2（出雲）、塙町式（備後北部）・須玖II式（北部九州）が併行するとすれば、出雲・備後北部・北部九州の後期の開始期はほぼ一致することになる。

（2）1次調査（1987年）

この調査は、昭和62年度国庫補助事業として実施された古志地区遺跡分布調査として実施されたもので、古志本郷遺跡の範囲確認のため出雲市教育委員会（調査員 川上 稔）により自動的に行われた調査である。A地区とB地区に合計6箇所のトレンチが設定され発掘が行われている。

この調査は古志本郷遺跡の最初の発掘調査であり、多くの遺構・遺物が出土しているものの、これまでほとんど整理されることなく置かれているという状態であった。トレンチ調査ではあるものの古志本郷遺跡の中心部に近いところで調査が行われているため、大量の遺物が出土したトレンチもある。この遺跡を考える上で欠かすことのできないものであることから、調査者の許可のもと再整理をおこなった。今回は特に遺物量が多かったA地区的3トレンチ出土の遺物を中心に注記・接合作業ならびに実測を行った。また、遺物の出土地点は原図からおこしたものである。



第47図 古志本郷遺跡調査地 配置図

1 レンチ

1次調査での最も南に設定されたレンチで遺物の量は多くはない。それでもレンチ北端の落ち込み状遺構の埋土であるIV層の上面あたりから、草田1期の土器が出土している。報告書では細片のみの出土とされているが、その内の一つ(134)はほぼ完形に復元できた。また、時期は不明だが土壤からは人骨が出土している。

2 レンチ

このレンチでは東側半分が落ち込んでおり、そこから多くの土器が出土している。実測できるものは少なかったが、松本ⅢからⅣの遺物を中心としているようである。

3 レンチ

このレンチは 3×8 mで、遺構は全て地山である砂礫層で検出されている。遺構検出面の標高は9.30mを測り、第2次調査での竪穴住居の検出面よりもさらに50cm高くなることから、このあたりが微高地の最も高所にあたると思われる。

整理した遺物の大半は、レンチの西側半分で検出された落ち込み状遺構1ならびに遺構面の直上にあるⅢ層から出土したものである。この遺構は検出された部分で 3×5 m・深さ30cm程のものであるが、100個体以上の土器が出土している。この遺構は竪穴住居で、廃絶後に土器や貝が凹地に捨てられたと報告されている。

しかしながら、落ち込み状遺構1から出土した土器は、松本Ⅲから草田6期まで時間的な幅があり、大半は草田5期のものでしめられている。また、草田5期から6期のものには完形のものもあり、鼓形器台がいくつか並んで出土している状況からは単に廃棄されたものと言えるのか疑問である。

4 レンチ

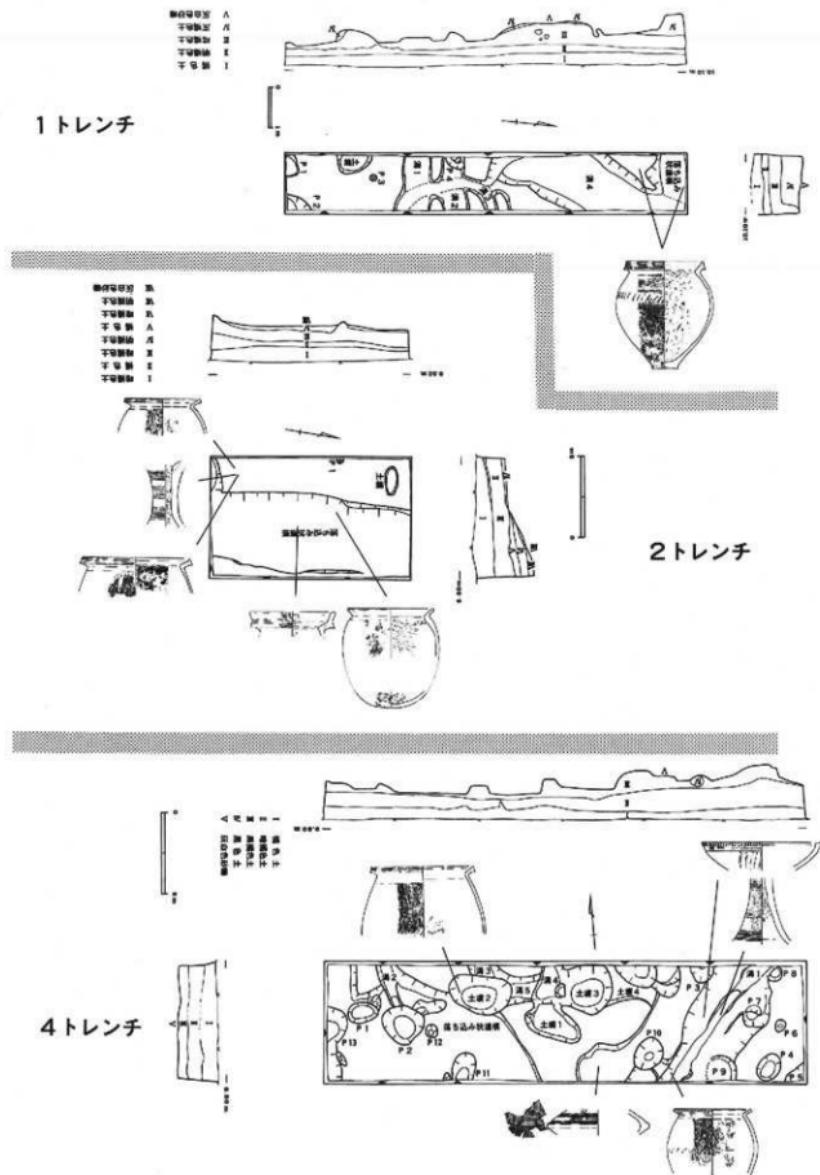
このレンチからは幅1.4m・深さ30~50cmの溝1が検出されている。この溝からは松本Ⅲ-1~2の遺物が出土しており、本遺跡では現在のところ最も古い遺構として注意される。これまで古志本郷遺跡は中期後葉に出現すると考えられていたが、その時期は中期中葉までさかのぼることになる。

(3) 第2次調査¹² (1990年)

この調査は古志公民館建設に伴うもので 570m^2 が調査されている。今回の調査区の南に隣接したところである。弥生時代から近世に至る多くの遺構が検出されているが、弥生時代の遺構としては3棟の竪穴住居と溝がある。いずれも松本Ⅳ-2にあたり大溝の掘削された時期と重なる。SI01ならびにSI02からは各種の石製品や石材が出土している。SI02では玉生産の可能性が指摘されている。

(4) 第3次調査¹³ (1994年)

この調査区は新宮川のすぐ西岸で、遺跡の東端にあたる。遺構は確認されておらず、弥生上器などの遺物がわずかに出土している。このあたりは、微高地の下に位置するものと思われる。



第48図 1次調査1・2・4トレンチ遺構図（報告書を一部改変）

(5) 第5・7・8次調査¹⁴ (1995年~97年)

95年から97年にかけて斐伊川放水路建設事業にともない島根県教育委員会により発掘調査が実施されている。古志本郷遺跡においてはこれまでにない大規模な調査で、弥生時代中期後葉の竪穴住居や古墳時代初頭の規模の大きな溝など多くの遺構が検出されている。

2. 古志本郷遺跡と出雲西部の集落遺跡

(1) 古志本郷遺跡の消長

古志本郷遺跡は、1次調査の3トレンチや4トレンチでは松本Ⅲの土器が出土しており、この時期の遺構もあることから。中期中葉には出現しているようである。しかしながら今回の調査で検出された大溝は松本IV-2に掘削されたものであることや、これまで確認されている住居址は松本IV-2以降であることなどから、集落が安定するのは中期の末葉になってからと推定される。大溝からは松本IV-2から草田6期までの遺物が出土しており、これまでの調査でも草田7期以降の遺物はほとんど知られていない。また、大溝からは布留式古段階の土器が出土しており、草田6期の一部は布留式と併行すると考えられる¹⁵ので、古志本郷遺跡は草田6期後半から7期初めの古墳時代の初頭には一端姿を消すようである。

(2) 集落で検出される規模の大きな溝について

今回検出された大溝は松本IV-2期に掘削された後に何度も掘り返しを行いながら使用され、草田6期に埋まっている。この溝の状況は集落の消長をそのまま反映しており集落においても重要な役割を担っているようである。天神遺跡・正蓮寺周辺遺跡でも規模の大きな溝が検出されている。これらの中には断面がV字形をするものもあり、集落の立地する微高地の縁辺部にて検出されることが多いため環濠として報告される例が多い。ここではこれらの溝について検討してみたい。

天神遺跡第7次調査¹⁶では4条の平行して延びる溝が検出されており、そのうちSD06は幅4.06m、深さ1.33mを測り、多くの遺物が出土している。溝の底と両端からは松本Ⅲの土器が出土しており、中央部からは草田6期の土器が一括廃棄された状態で出土している。このなかにはやはり布留式の土器が若干混じっている。調査者は中期中葉に掘削された溝を凌瀬しながら使用し、古墳時代の初頭に廃棄した可能性を指摘している。この溝では掘削時と埋没時の遺物しか出土していないが、この間も使用されていたとすれば古志本郷の大溝と全く同じ状況であることが指摘できる。

天神遺跡は中期中葉に出現する遺跡であるが、検出される遺構・遺物は中期中葉のものが多く出現期から安定した状況であったことがうかがえる。古志本郷遺跡は中期中葉の遺物も数点出土しているが、安定して遺物が出土するのは中期の後葉で、大溝はこの時期に掘削されている。両遺跡とも集落の初期段階にこのような溝を設けていることが言える。また、出雲西部の平野部には弥生前期から中期前葉の遺跡はほとんどなく、中期中葉から後期初頭までに出現し急速に広がっていくことが言われており、天神遺跡や古志本郷遺跡はその典型例と言える。

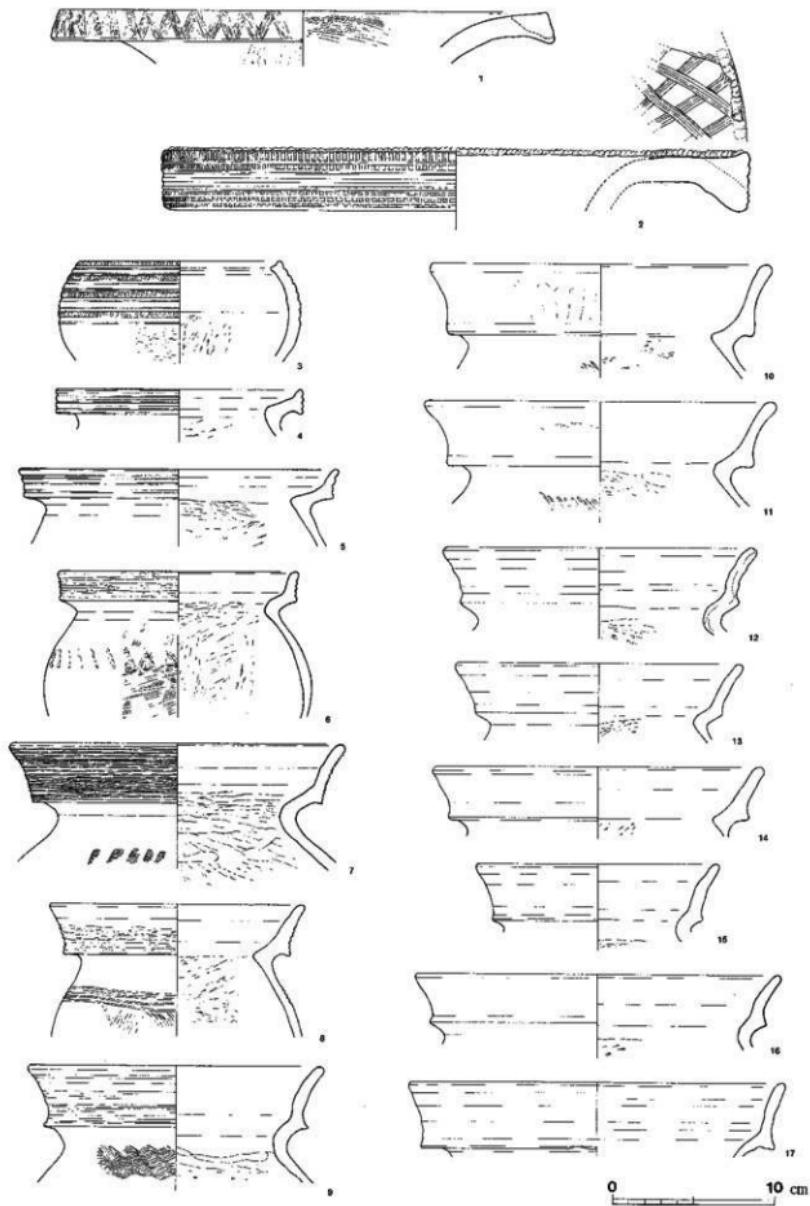
これらの溝はほんの一部が検出されたのみで、環濠と呼べるものかどうかは今後の調査の進展を待たなければならない。確かに防衛的な性格を備えていたかもしれないが、低地に集落を営むための排

水等の役割も大きかったと思われる。このような溝を集落の初期段階に掘削することは低地に集落を営むための基盤整備だったのではないだろうか。中期中葉からの集落の急増は、環境変化により生活可能な土地を確保できるようになつたことがその理由とされているが、鉄器の流入や移動による人口の増加により、集落を經營していくための環境整備が可能になったのが中期中葉から後葉だったのでないだろうか。そして、後期初めには、平野の各所に遺跡が出揃うことになる。

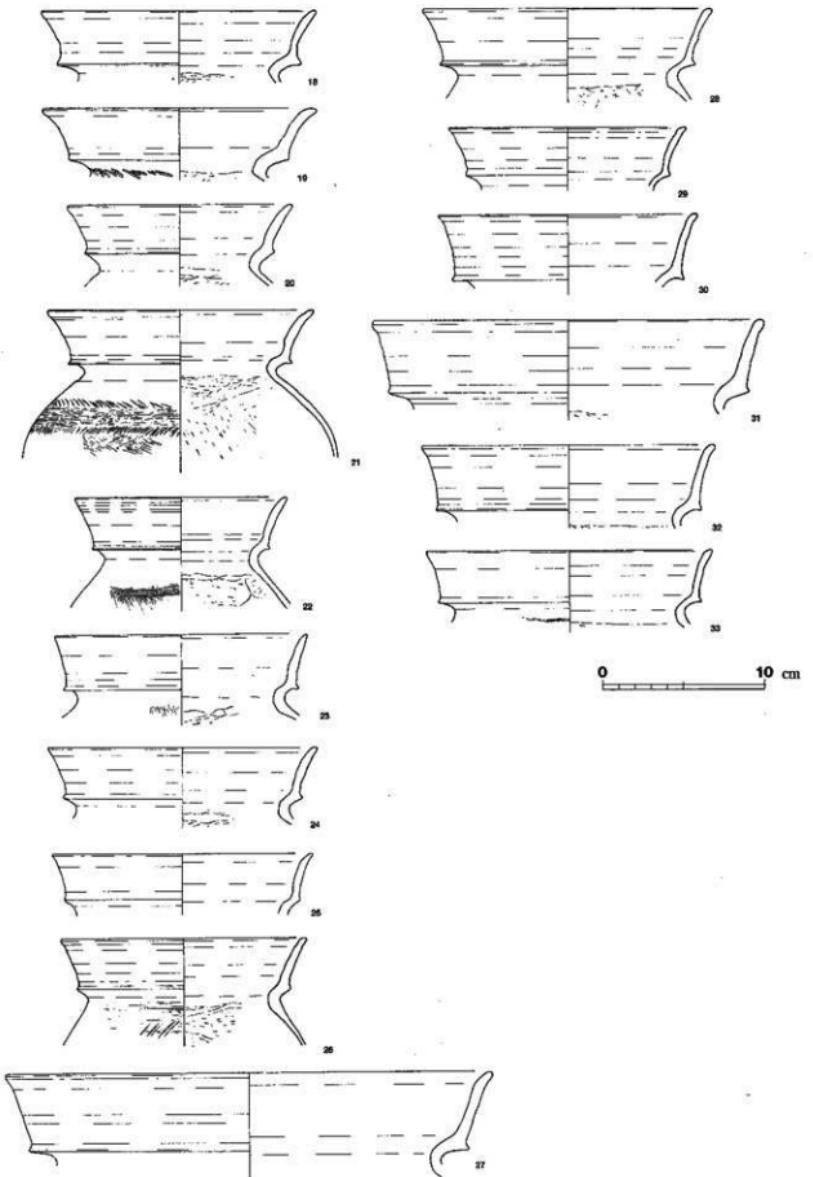
そしてこれらの溝は草田6期後半には埋没しており、在地の土器とともに布留式の土器があることから、古墳時代初頭には平野部の各遺跡の溝が一齊に埋まっている可能性がある。草田7期以降の遺物がどの遺跡でも激減することをふまえると、古墳時代初頭に平野部の中心集落は一齊に解体していると考えられる。弥生時代後期末から終末期にかけて巨大な四隅突出型埴丘墓を作りながら、最古段階の前方後円墳の出現を見なかつたことは、このような集落の変化と無関係ではなかろう。

(註)

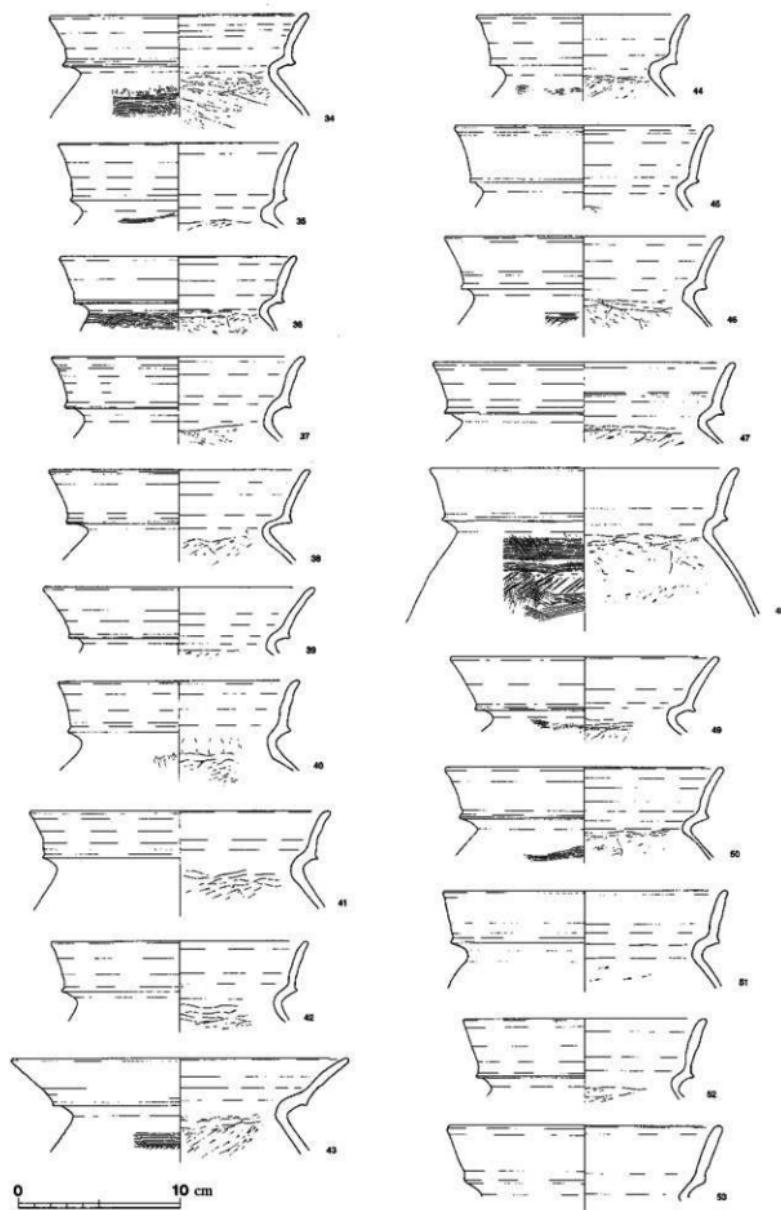
- 1 松本岩雄「出雲・隱岐地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社 1992年
- 2 赤沢秀典『講武地区県宮闕場整備事業発掘調査報告書』5南講武草田遺跡 鹿島町教育委員会 1992年
- 3 実測図を福岡市立博物館常松幹夫氏に見ていただいたところ須玖II式にあたるとの教示を受けた。
- 4 森岡秀人「弥生時代曆年代論をめぐる近畿第V様式の時間幅」「信濃」第37巻第4号 1985年
- 5 豊岡卓三「『畿内』第V様式曆年代の試み」「古代学研究」108・109 1985年
- 6 秋山浩三「B、C52年の弥生土器一池上曾根遺跡の大型建物・井戸出土資料と年輪年代」「大阪文化財研究」第11号 1996年
- 7 都出比呂志「総論—弥生から古墳へ」「古代国家はこうして生まれた」角川書店 1998年
- 8 平井 勝「理化学的年代測定からみた曆年代—中國・四國地方」「第40回埋蔵文化財研究集会 考古学と実年代」I 1996年
- 9 平井典子「弥生時代後期における中部瀬戸内と北部九州の交流」「古代吉備」第19集 1997年
- 10 藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」「考古学雑誌」第64巻 第4号 1979年
- 11 川上 稔「古志地区遺跡分布調査報告書」出雲市教育委員会 1988年
- 12 各トレンチからは今回整理以外にも弥生時代から平安時代にいたる多くの遺物が出土している。残念ながら報告書ではほとんど紹介されておらず、細片しか出土していないはずのトレンチから完形の土器が復元できるなど、報告内容にかなりの矛盾がある。出土状況など正確な報告を再度行う必要性を感じる。
- 13 川上 稔「出雲市埋蔵文化財調査報告書」第4集 出雲市教育委員会 1994年
- 14 この報告書に掲載されている遺構全体図の国土座標は誤っていることがわかった。調査時の杭の資料が全く残っていないことから、合成図の作成にあたっては現在の古志公民館に重ね合わせている。
- 15 岸 道三「出雲市埋蔵文化財調査報告書」第5集 1995年
- 16 島根県埋蔵文化財調査センター『斐伊川放水路発掘調査物語』PART3, 4 1997年, 1998年 島根県埋蔵文化財調査センター平石 光氏からも御教示を受けた。
- 17 出雲市における近年の調査で布留式を伴った草田6期の良好な一括資料が増加している。それによると布留0式と草田6期が併行することになるが、草田6期標識資料には庄内式を伴うもの(CD-4区)もあることから、布留0式の上限が草田6期のなかにあると言える。また、壠(中型)の底部丸底化を指標とした場合、小谷式の上限も草田6期のなかにあると考えられるが、布留式の上限よりもやや下がるようである。なお、この場合も神原神社古墳の土器は草田7期のなかでとらえるべきであろう。
- 18 正蓮寺周辺遺跡B区SI04『遺跡が語る古代出雲』出雲市教育委員会 1997年)
- 19 天神遺跡第7次調査SD06(岸 道三『天神遺跡第7次発掘調査報告書』出雲市教育委員会・島根県出雲土木事務所)
- 20 岸 道三他『出雲市駅付近連続立体交差事業地内天神遺跡第7次跡発掘調査報告書』出雲市教育委員会・島根県出雲土木事務所 1997年



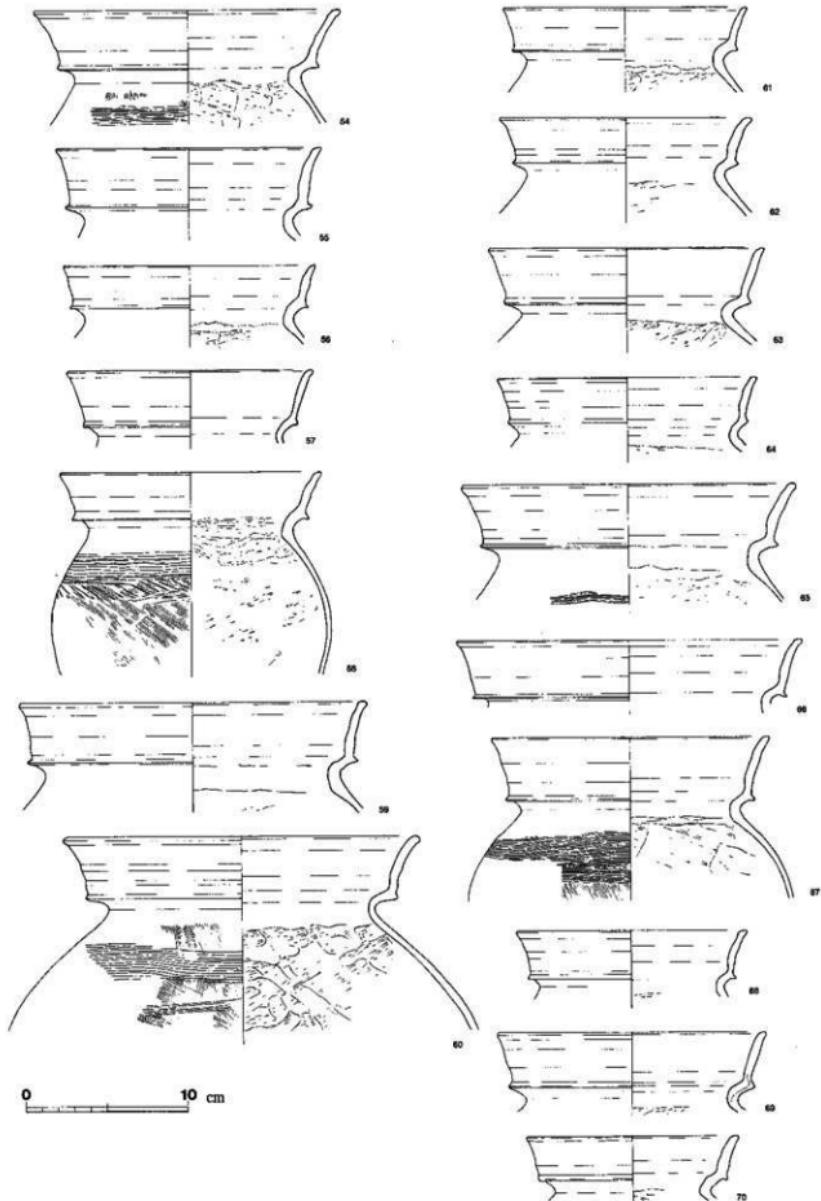
第49図 1次調査3トレンチ出土遺物 (1)



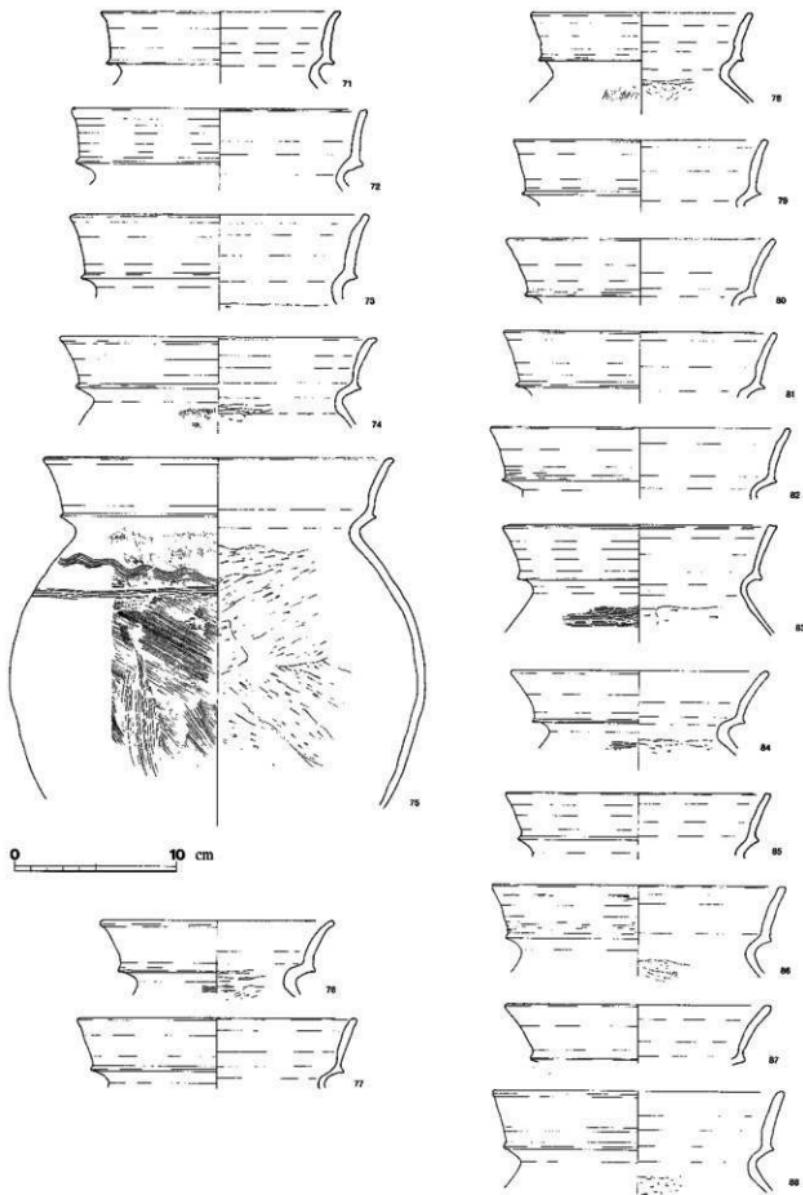
第50図 1次調査3トレンチ出土遺物 (2)



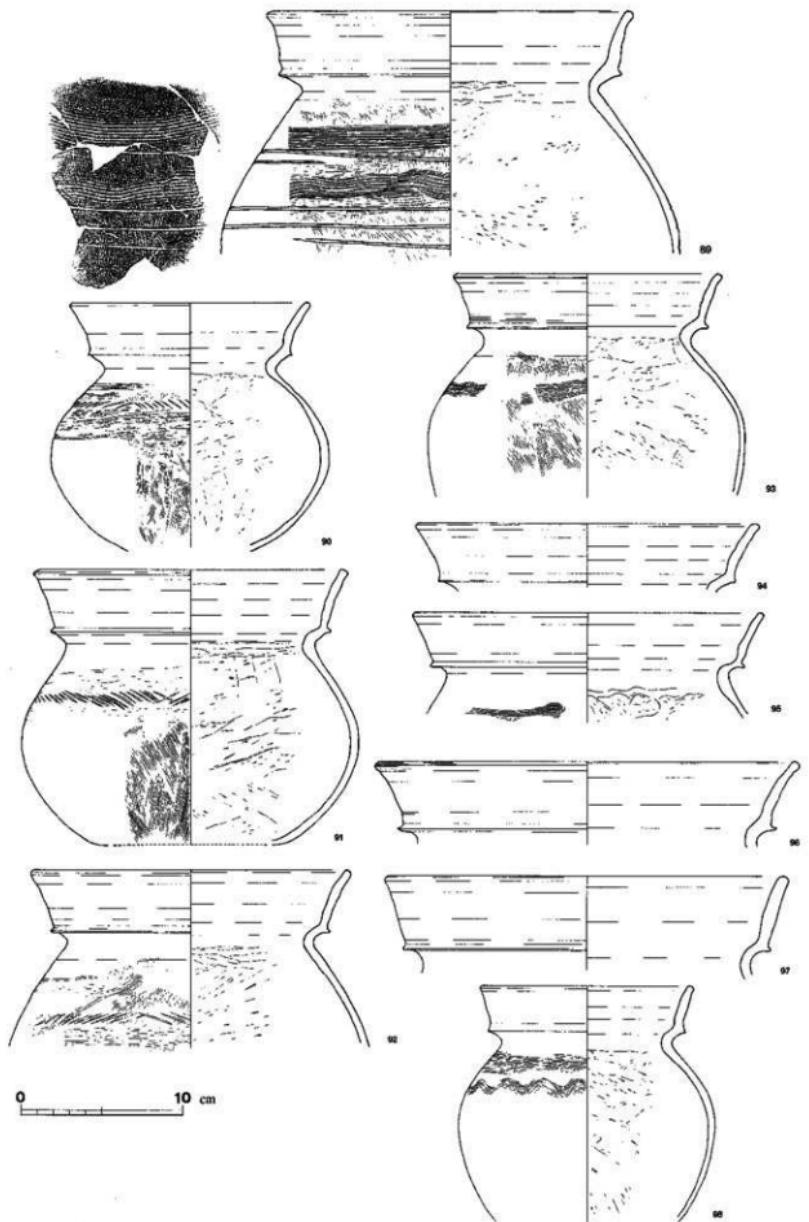
第51図 1次調査3トレンチ出土遺物 (3)



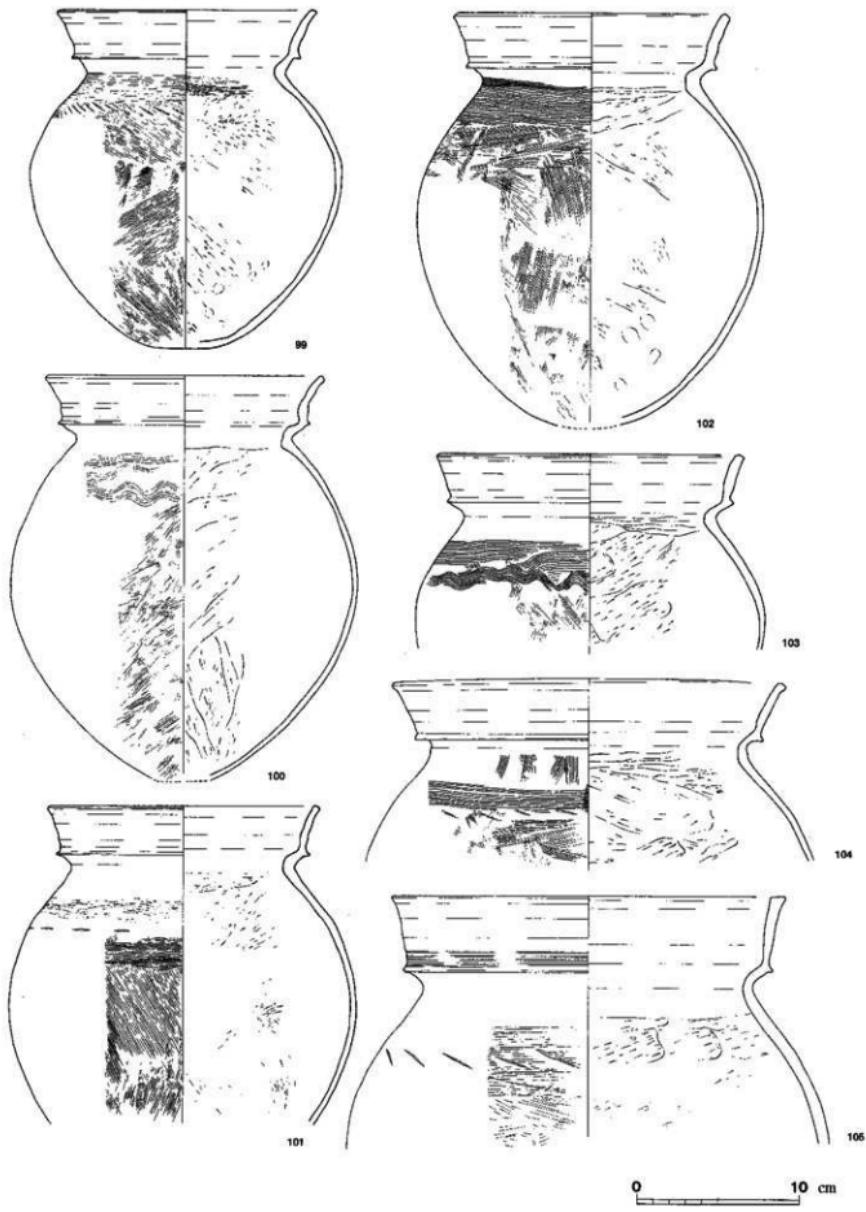
第52図 1次調査3トレンチ出土遺物 (4)



第53図 1次調査3トレンチ出土遺物 (5)

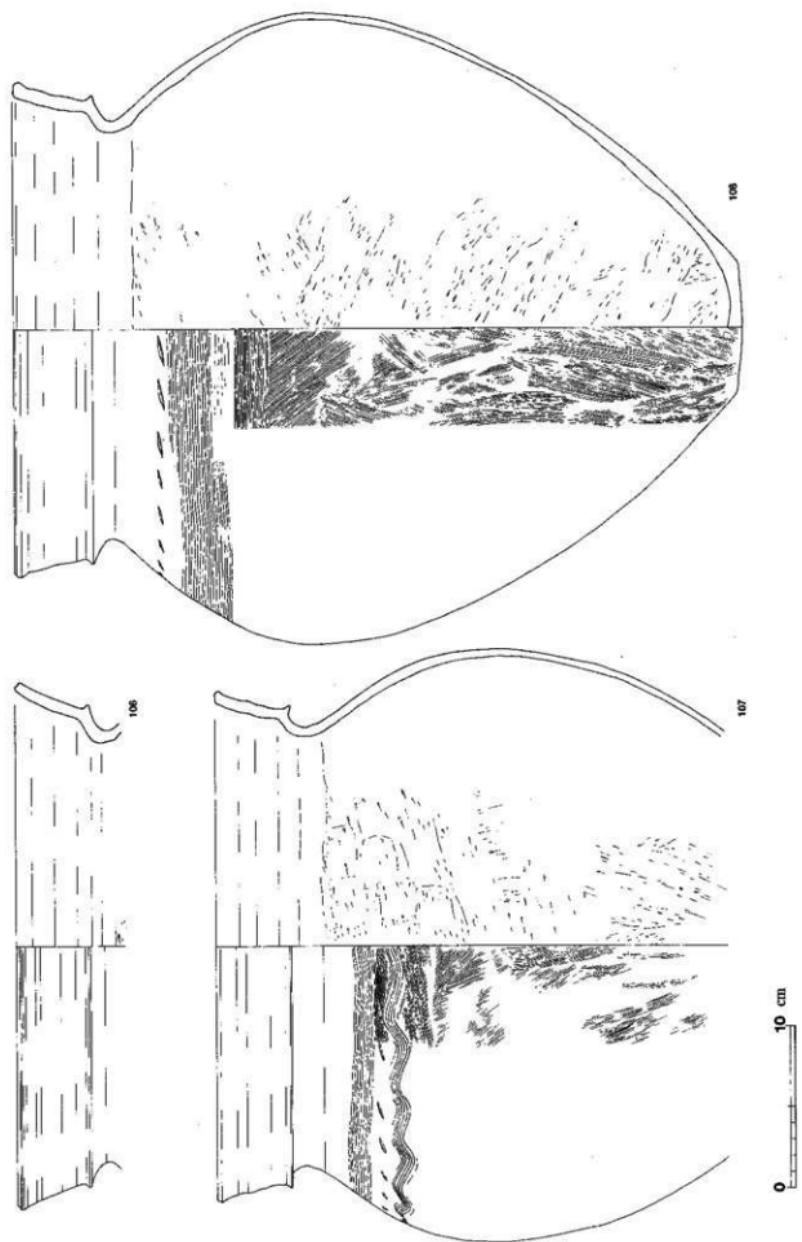


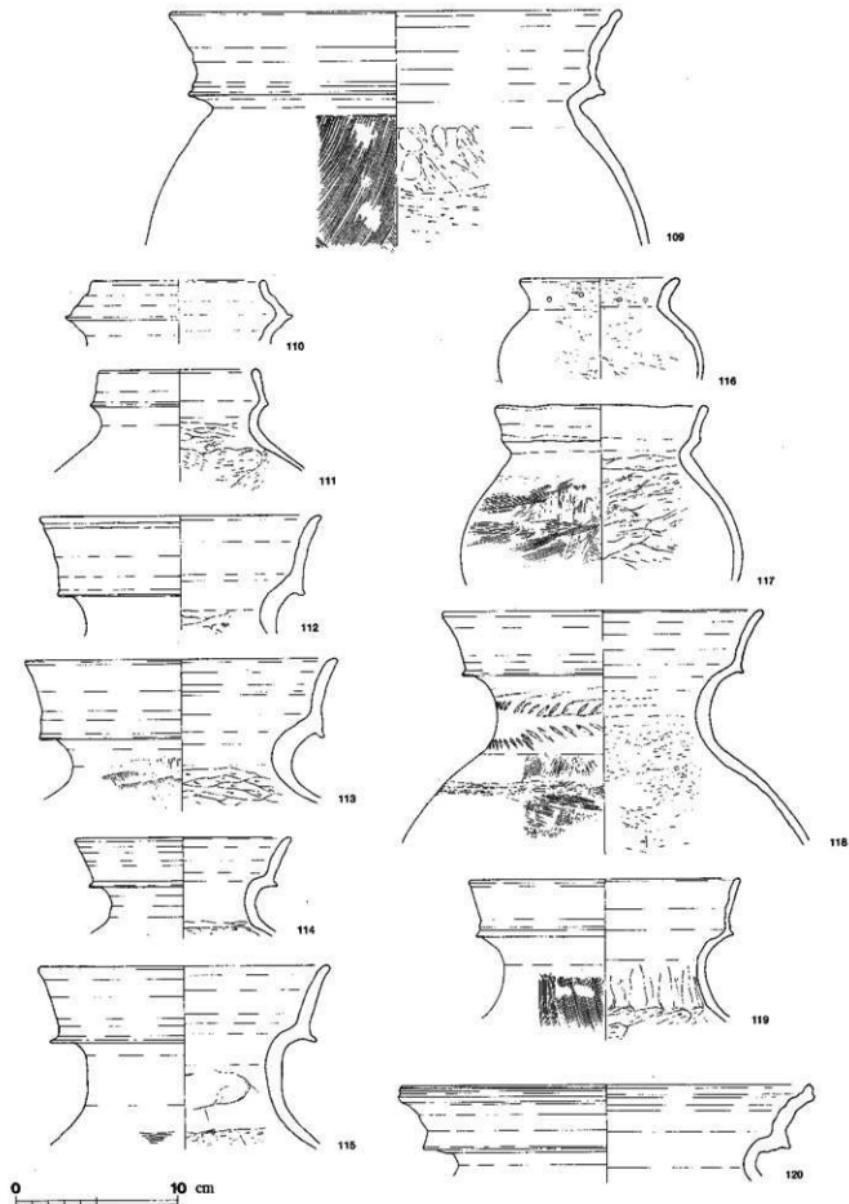
第54図 1次調査3トレンチ出土遺物 (6)



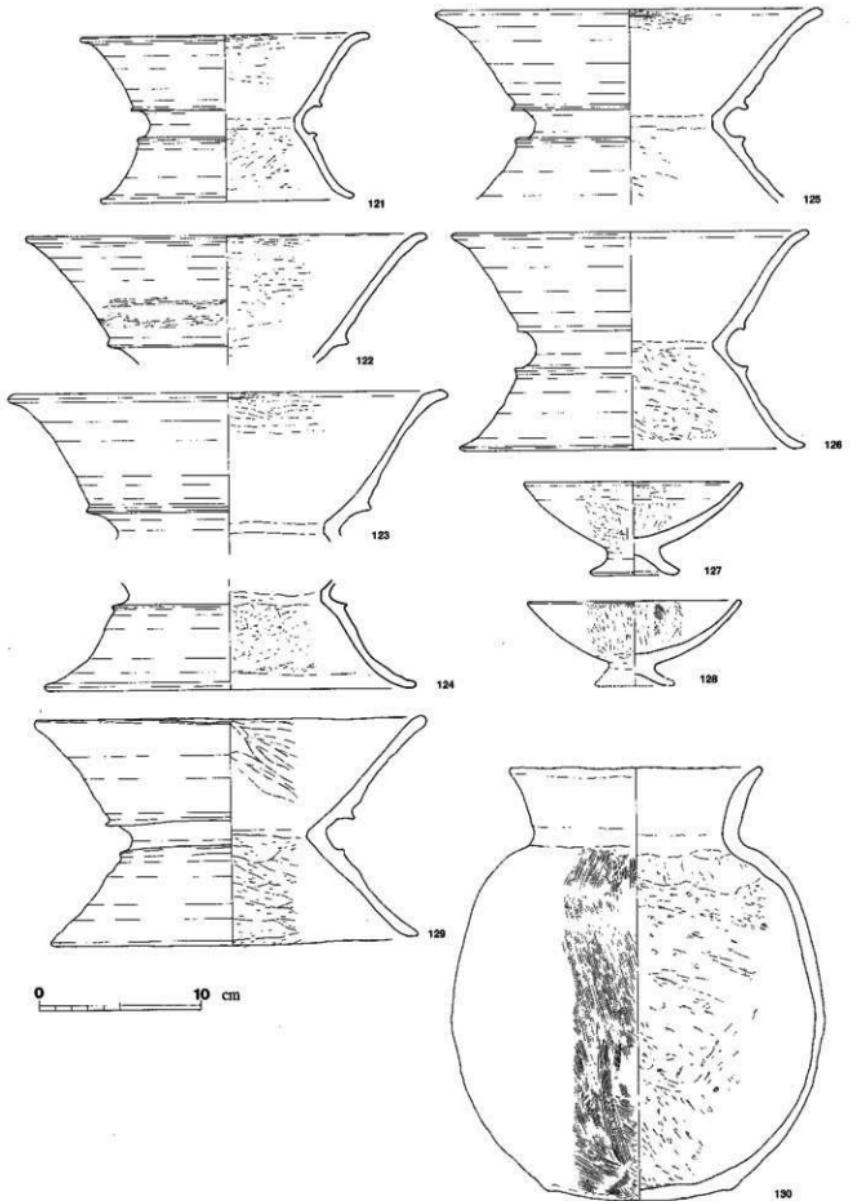
第55図 1次調査3トレンチ出土遺物 (7)

第56図 1次調査3トレンチ出土遺物 (8)

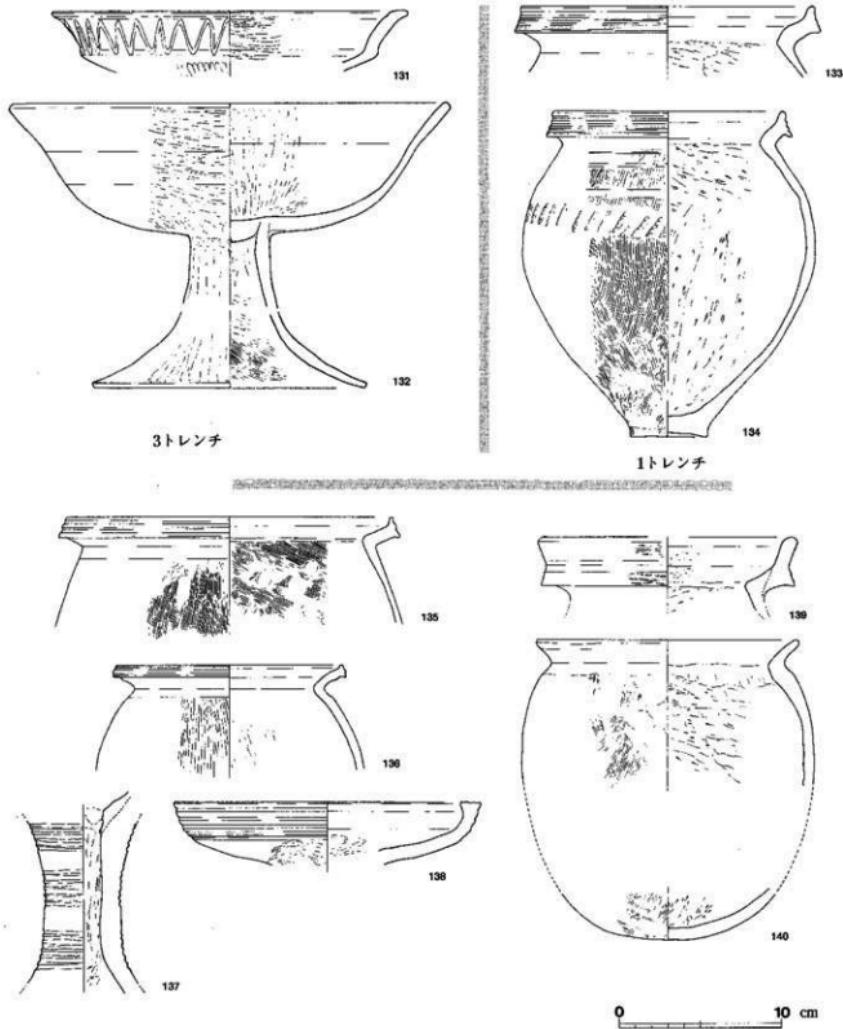




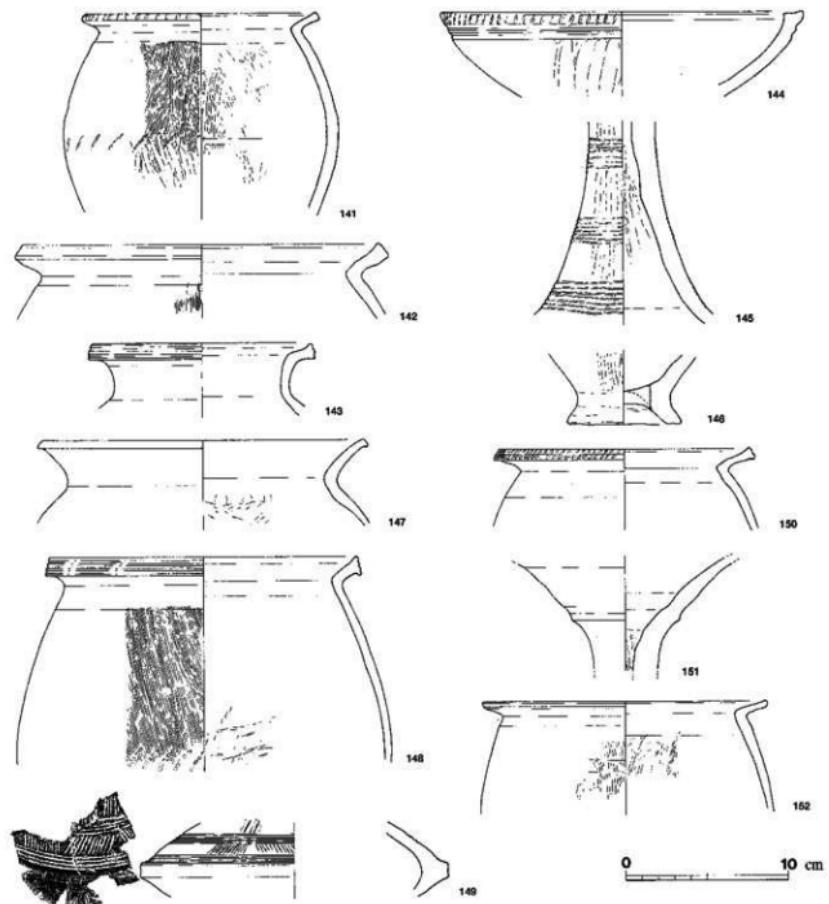
第57図 1次調査3トレンチ出土遺物 (9)



第58図 1次調査3トレンチ出土遺物 (10)



第59図 1次調査3トレチ (11)・1・2トレチ出土遺物



第60図 1次調査4トレンチ出土遺物

遺物観察表

(第6次調査)

番号	調査区	遺構名	種別	法量(単位: cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	
				口径	底径	器高				
4-1	A	环身(須恵器)	11	3.4			底部は回転ヘラ削り	淡灰色	微砂粒含む。	
4-2	A	环身(須恵器)	10.9	4			底部は回転へら削り。灰被り	淡灰色	微砂粒含む。	
9-1	B	SD01	甕	22.4			口縁外面に貝殻復縁による擬凹線。肩部に貝殻による刺突紋。胴部内面はへら削り。	橙褐色	1~2mmの砂粒を多く含む。石英・金雲母。	
9-2	B	SD01	器台		22.3		受け外表面は擬凹線の上から擦でか。	淡橙色	砂粒は少ない。石英。	
9-3	B	SD01	甕	19			口縁端部は薄く延びる。	内外面 煤付着	微砂粒多い。石英・金雲母。	
9-4	B	SD01	甕	16			口縁端部は丸くおさめる。	淡黄褐色	微砂粒多い。金雲母。	
9-5	B	SD01	甕	17.2			口縁部は端部内面を強く撫で、つまみ上げたような形態になる。内面は頸部へラミガキ、胴部へら削り。	橙色	微砂粒多い。石英。	
9-6	B	SD01	器台		23		外面撫で調整、内面は削り後撫で。	橙色	微砂粒多い。石英。	
13-1	B	大溝	甕	16			口縁端部に2条の凹線。外面絞方向の刷毛目。	淡黄色	微砂粒多い。石英。	
13-2	B	大溝	甕	19			口縁端部に3条の凹線。風化が著しい。	橙色	微砂粒多い。	
13-3	B	大溝	甕	16			口縁端部に4条の凹線。胴部内外面と刷毛目調整。	黄色	微砂粒多い。	
13-4	B	大溝	甕	21.2			口縁端部に3条の凹線。胴部内面頸部以下へら削り。	淡褐色	微砂粒多い。石英・金雲母。	
13-5	B	大溝	甕	18.2			口縁部に3条の凹線。胴部内外面頸部付近は指頭圧痕で、以下へら削り。	橙褐色	微砂粒多い。石英・黒雲母。	
13-6	B	大溝	甕	17.6			口縁端部が垂直に立ち上がり、複合口縁化の初段階の様相を呈する。	橙褐色	微砂粒多い。石英。	
13-7	B	大溝	甕	16.6			口縁端部は垂直に拡張し、3条の凹線を施す。	黄褐色	微砂粒多い。石英。	
13-8	B	大溝	壺(頸部)				頸部外面に5条の凹線の上段に指頭圧痕帯を貼り付ける。内外面とも刷毛目調整。	黄褐色	微砂粒多い。石英。	
13-9	B	大溝	短頸壺	10.4			頸部外面に5条以上の沈線を施す。端部平坦面は内傾する。	淡褐色	微砂粒多い。石英・黒雲母・金雲母。	
13-10	B	大溝	甕	25.6			胴部内面は削り後ナデまたはナデのみ。口縁端部は拡張せずに3条の凹線を施す。	黄褐色	微砂粒多い。石英・黒雲母・金雲母。	
13-11	B	大溝	甕	19.4			口縁端部は上方に拡張し4条の擬凹線を施す。頸部にはへらによる刺突紋。胴部内面頸部以下はへら削り。	灰白色	微砂粒多い。黒雲母・石英。	
13-12	B	大溝	器台				受け外表面には貝殻腹縁による擬凹線。	淡橙褐色	微砂粒多い。石英。	
13-13	B	大溝	甕(底部)		5.0		内面へら削り。外面へラミガキ。	黄褐色	微砂粒多い。石英・金雲母・黒雲母。	
14-14	B 3	大溝	甕	29.0			頸部は外側に開き、口縁端部は拡張せずに3条の凹線を施す。	黄褐色	微砂粒多い。	
14-15	B 4・5	大溝	甕	14.4			口縁端部には3条の凹線。胴部内面は頸部まで絞方向の削りが上がっている。	黄褐色	微砂粒多い。石英・黒雲母。	
14-16	B 3	大溝	甕	17.6			口縁端部に3条の凹線。胴部内面は頸部以下絞方向のへら削り。	黄褐色	微砂粒多い。石英・金雲母。	
14-17	B 3	大溝	甕				口縁部は上方に拡張する複合口縁初段階の形態。内面頸部以下へら削り。	黄褐色	微砂粒多い。石英。	
14-18	B 4・5	大溝	甕	14.8			口縁部は外反して立ち上がり、擬凹線を施す。内面頸部以下はへら削り。	黄橙色	微砂粒多い。石英。	
14-19		大溝	甕	16.4			口縁端部は丸く收める。肩部には繊維紋。内面頸部以下はへら削り。	橙色	微砂粒多い。黒雲母。	

番号	調査区	遺構名	種別	法量(単位: cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土
				口径	底径	器高			
14-20	B 2	大溝	甕	14.0			口縁部は外反して立ち上がり、端部は丸く收める。内面頸部以下へラ削り	橙色	微砂粒多い。 石英
14-21	B 3	大溝	甕(底部)		9.0		内面へラ削り。	浅黄橙色	微砂粒多い。 石英・黒雲母
14-22	B 4	大溝	裝飾甕				頸部に突帯がつく。とっ帯には櫛状工具による列点紋を施す。	黄褐色	微砂粒多い。
14-23	B 3	大溝	器台				頸外面には掘凹線を施していると思われる。底部にはピッヂの一定しない刻突紋がある。	黄褐色	微砂粒多い。 石英
15-24	B 5	大溝	甕	17.8		24.8	単純口縁で直線的に開く。端部は平坦な面を持つ。肩部には平行綫紋と波状紋を施す。頸部外面は刷毛目、内面はへラ削り。底部は丸底。	黄褐色 外面部肩部以外・内面底に媒付着。	微砂粒多い。 布留式
16-25	B 6	大溝付近	甕	19.8	30 残存長		口縁端部は上方に拡張し、3条の凹線を施す。頸部外面は最大径に櫛状工具による列点紋を施し、それより上は刷毛目、下はラミガキ。内面は頸部付近まで縱方向のへラ削りが上がる。	浅黄色	微砂粒多い。 石英・黒雲母。
17-26	B 1	大溝	甕	20.0			口縁端部は上下に拡張し、3条の凹線を施す。頸部内面は頸部付近まで削りが上がる。	黄褐色	微砂粒多く含む。
17-27	B 2	大溝	甕	15.0			口縁端部には3条の凹線、肩部には列点紋を施す。内面頸部以下へラ削り。	灰黄色	微砂粒多い。 石英
17-28	B 2	大溝	甕				口縁端部はまろ上げたような形態。下段突出は下垂する。	黄褐色	微砂粒多い。 石英
17-29	B 2	大溝	甕	17.4			口縁端部は折り曲げたようになる。下段はあまり突出しない。	浅黄橙色	微砂粒多い。 石英
17-30	B 3	大溝	注口土器				外面ナデ調整。	黄褐色	微砂粒多い。 黒雲母
18-1	B 5		高坏	18.8			口縁と底部のさかいに段を持つ。接合法は円盤光沢による。	淡橙褐色	砂粒が少ない。
21-1	B 4	道状遺構	甕	17.4			口縁端部に3条の凹線。内面頸部以下はへラ削り。	黄褐色	微砂粒多い。
21-2	B 5	道状遺構	器台?	28.2			器壁が厚く大型の土器と思われる。口縁には4条の凹線。外側に赤色顔料塗布。	断面 黄褐色	微砂粒多い。 石英
21-3	B 3	道状遺構	甕	32.0			口縁端部には4条の凹線。内面は荒い刷毛目。	淡黄褐色	微砂粒多い。 石英
21-4	B 4	道状遺構	甕	19.6			口縁端部は丸く收める。下段突出は横方向。頸部以下へラ削り。	淡橙褐色	微砂粒多い。 金雲母
21-5	B 5	道状遺構	甕	19.2			やや外反して開く単純口縁で、端部に平坦面を持つ。頸部に平行綫紋。	黄褐色	微砂粒多い。 石英
21-6	B 4	道状遺構	甕	18.8	21.1		単純口縁はやや外反し、端部は薄く延びる。頸部は円形容で外面は刷毛目、内面はへラ削り。	橙色	微砂粒多い。 石英
21-7	B 4	道状遺構	甕	21.8			単純口縁は直線的に開く。端部は薄く延び上面に平坦面を持つ。頸部は外面は刷毛目、内面はへラ削り。	淡橙褐色	微砂粒多い。 石英
21-8	B 4	道状遺構	坏				坏の高台部分の小片。赤色顔料を塗布。	断面 黄褐色	砂粒はあまり含まない
21-9	B 5	道状遺構	坏蓋(須恵器)	13.6	4.5		口縁と天井の壇に段がある。天井は複数回転へラ削り。口縁端部は丸く收める。	灰色	砂粒が少ない。
25-1	C 9	SK01	甕				底部は破損され失われている。外面へラミガキ、内面へラ削り。	暗赤褐色	微砂粒多い。 金雲母
29-1	C10-II	大溝	甕	20.8			口縁端部に拡張は短いが、3条の凹線を施す。頸部には突帯を張り付けた後に列点紋を施す。	浅黄橙色	微砂粒多い。 石英・黒雲母
29-2	C10-II	大溝	甕	19.6			口縁端部はほとんど拡張しないが、2条の凹線を施す。内面頸部付近まで削りがあがっている。	黄褐色	微砂粒多い。 石英・黒雲母
29-3	C10-II	大溝	甕	21.8			口縁端部を拡張し、3条の凹線を施す。内面頸部付近まで削りがあがる。	淡褐色	微砂粒多い。
29-4	C10-II	大溝	甕	18.4			口縁端部の拡張は大きく、4条の凹線を施す。内面頸部付近にへラ削りは見られない。	淡黄褐色	微砂粒多い。

番号	調査区	遺構名	種別	法量(単位:cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	
				口径	底径	器高				
29-5	C10・II	大溝	壺	14.2			口縁端部を拡張し4条の凹線を施す。胴部内外面とも崩毛目。内面頭部付近には指頭压痕。	黄褐色	微砂粒多い。	
29-6	C10・II	大溝	壺	21.6			複合口縁の外面には10条の矮凹線を施す。内面は頭部へラミガキ、以下はヘラ削り。	褐灰色	微砂粒多い。	
29-7	C10・II	大溝	壺	20.6			複合口縁外面には8条の辺縁を施す。内面頭部以下はヘラ削り。	黄褐色	微砂粒多い。	
29-8	C10・II	大溝	壺又は壺			8.2	外面へラミガキ、内面へラ削り。	暗褐色	微砂粒多い。石英	
29-9	C10・II	大溝	壺	18.0			複合口縁には4~5条の凹線を施す。頭部が比較的長い。	黄橙色	微砂粒多い。	
29-10	C10・II	大溝	器台	22.6			複合口縁には12条の複凹線を施す。端部は丸く收める。	淡褐色	微砂粒多い。石英・長石	
29-11	C10・II	大溝	蓋		7.3	3.8	半球形を呈し、端部には小孔がある。	黄褐色	微砂粒多い。石英・金雲母	
29-12	C10・II	大溝	小型丸底壺	7.4			口縁端部は薄く延びる。	橙褐色	微砂粒多い。	
29-13	C10・II	大溝	小型丸底壺	7.2		8.3	やや膨らんだ球形の胴部に直線的に延びる口縁が付く。内面頭部以下へラ削り。	橙褐色	微砂粒多い。石英	
30-14	C10・II	大溝	壺	17.8			口縁端部は上下に拡張し4条の凹線を施す。胴部残存部分は内外面とも崩毛目。	褐色	微砂粒多い。石英・黒雲母	
30-15	C10・II	大溝	壺	19.6			口縁端部は上下に拡張し5条の凹線を施す。胴部残存部分は内外面とも崩毛目。	淡褐色	微砂粒多い。	
30-16	C10・II	大溝	壺	18.2			口縁端部は拡張は短く、2条の凹線を施す。胴部残存部分は内外面とも崩毛目。	淡黄褐色	微砂粒多い。	
30-17	C10・II	大溝	壺	20.2			口縁端部は上下に拡張し3条の凹線を施す。胴部残存部分は内外面とも崩毛目。	淡黄色	微砂粒多い。長石	
30-18	C10・II	大溝	壺	24.2			口縁端部は上下に拡張し4条の凹線を施す。内面頭部付近まで削りが上がる。	淡黄褐色	微砂粒多い。	
30-19	C10・II	大溝	壺	19.6			口縁端部は上下に拡張し3条の凹線を施す。頭部最大径には列点紋。内面は頭部まで削りが上がる。	淡黄褐色	微砂粒多い。黒雲母・石英	
30-20	C10・II	大溝	壺	24.4			口縁端部の拡張は小さく3条の凹線を施す。内面頭部付近まで削りが上がる。胴部外面は崩毛目。	淡黄褐色	微砂粒多い。	
30-21	C10・II	大溝	壺	20.2			口縁端部は上下に拡張し3条の凹線を施す。内面頭部付近まで削りが上がる。	淡褐色	微砂粒多い。石英	
30-22	C10・II	大溝	壺	13.2			口縁端部の拡張は小さく3条の凹線を施す。頭部には列点紋。内面頭部付近まで削りが上がる。	淡褐色	微砂粒多い。	
30-23	C10・II	大溝	壺	16.4			口縁端部の拡張は小さく、3条の凹線を施す。胴部には列点紋。内面頭部最大径まで削りが上がる。	黄褐色	微砂粒多い。	
30-24	C10・II	大溝	壺	21.4			口縁端部の拡張は小さく3条の凹線を施す。内面頭部以下はヘラ削り。	黄褐色	微砂粒多い。	
30-25	C10・II	大溝	壺	14			口縁端部は垂直に拡張し、3条の凹線を施す。頭部には刺突紋。頭部以下へラ削り。	淡褐色	微砂粒多い。	
30-26	C10・II	大溝	壺	13.4			口縁端部は垂直に拡張し、3条の凹線を施す。頭部以下へラ削り。	浅黄色	微砂粒多い。	
31-27	C10・II	大溝	壺	38.0			口縁部は水平に開き端部は上方に拡張し3条の凹線を施す。頭部から肩にかけて紋様が入る。内面頭部以下はヘラ削り。	黄褐色	微砂粒多い。	
31-28	C10・II	大溝	壺	24.0	6.2	35.4	胴部最大径が上にあり胴の張った形態。2段の列点紋が入る。内面頭部付近までヘラ削りが上がる。	黄褐色	微砂粒多い。黒雲母	

番号	調査区	造構名	種別	法量(単位: cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	
				口径	底径	器高				
32-29	C10-II	大溝	甕	23.8	7.2	41.8	口縁端部は内傾し幅広で8条の凹線を施す。頭部には刺突紋沿が、肩部には列点紋が2段施す。胴部外側1/3以下はミガキでそれ以上は研毛目。内面は最大径以下へラ削り。	淡黄色	微砂粒多い。 石英	
33-30	C10-II	大溝	甕	19.6			複合口縁には5条の脛凹線を施した後にナデ調整を行なう。内面頭部はミガキ、以下はヘラ削り。	淡黄色	微砂粒多い。	
33-31	C10-II	大溝	甕	18.6			複合口縁には8条の脣凹線。	黄橙色	微砂粒多い。	
33-32	C10-II	大溝	甕	19.2			複合口縁には7条の脣凹線。内面は頭部から口縁はミガキ、頭部以下はヘラ削り。	淡褐色	微砂粒多い。 石英	
33-33	C10-II	大溝	甕	19.4			複合口縁には9条の脣凹線。肩部には列点紋(貝殻によるものか)。内面頭部はミガキ、以下へラ削り。	明褐色	微砂粒多い。	
33-34	C10-II	大溝	甕	18.0			複合口縁には6条の脣凹線。内面頭部以下へラ削り。	淡黃褐色	微砂粒多い。 雲母	
33-35	C10-II	大溝	甕	18.1			複合口縁には9条の脣凹線。肩部には列点紋(貝殻によるものか)。内面頭部はミガキ、以下へラ削り。	において黄色	微砂粒多い。	
33-36	C10-II	大溝	甕	17.4			複合口縁には8条の脣凹線。内面頭部と口縁部はミガキ、頭部以下へラ削り。外面部頭部は板で撫でたものか。	淡褐色	微砂粒多い。	
33-37	C10-II	大溝	甕	26.2			複合口縁には貝殻による脣凹線、肩部には羽状紋。	黄褐色	微砂粒多い。 石英・長石・ 金雲母	
33-38	C10-II	大溝	甕	25.6			複合口縁には10条の脣凹線。肩部には羽状紋。	橙褐色	微砂粒多い。 金雲母・長石	
33-39	C10-II	大溝	甕	22.8			複合口縁には10条の脣凹線。肩部には羽状紋。	浅黄橙色	微砂粒多い。	
33-40	C10-II	大溝	甕	22.8			複合口縁には9条の脣凹線。頭部以下へラ削り。	浅黄色	微砂粒多い。	
33-41	C10-II	大溝	甕	27.8			複合口縁外面は脣凹線を施して消したものか。	淡褐色	微砂粒多い。	
33-42	C10-II	大溝	甕	20.0			複合口縁で端部は丸く收める。下段突出は横方向。	淡橙褐色	微砂粒多い。	
33-43	C10-II	大溝	甕	20.4			複合口縁で先端は面を持つ。下段突出は横方向で、やや鋭さに欠ける。肩部に刺突紋がある。	橙色	微砂粒多い。	
33-44	C10-II	大溝	底部		8.7		外面はミガキか。	黄褐色	微砂粒多い。 石英	
33-45	C10-II	大溝	底部		10.0		外面はミガキ、内面はヘラ削り。外面に煤付着。	淡褐色	微砂粒多い。 石英	
33-46	C10-II	大溝	底部		4.4		外面はミガキか。内面はヘラ削り。	暗褐色	2~3 mmの砂 粒多く含む。	
33-47	C10-II	大溝	底部		6.0		外面はミガキ、内面へラ削り。	淡褐色	微砂粒含む。	
33-48	C10-II	大溝	底部		4.2		幅6 mmの高台が着く。内面へラ削り。	明褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
33-49	C10-II	大溝	底部		6.0		外面ミガキ、内面へラ削り。	淡褐色	微砂粒含む。	
33-50	C10-II	大溝	底部		5.4		外面ナデか。	暗黄褐色	微砂粒多い。 黑雲母・石英	
33-51	C10-II	大溝	底部		6.4		内面へラ削り。	每褐色	2 mm以下の砂 粒多い。	

番号	調査区	遺構名	種別	法量(単位: cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	
				口径	底径	器高				
34-52	C10・II	大溝	鉢		16.4		短小な複合口縁を呈する。内面は削りの後ナデか?	明褐色	微砂粒多い。	
34-53	C10・II	大溝	器台?	17.0			複合口縁は端部がやや厚く断面が丸くなる。下段突出部は下垂する。口縁にはピッタのきつい波状紋がめぐる。外面は赤色顔料塗布。	淡黄褐色 (断面)	微砂粒多い。 石英・金雲母	
34-54	C10・II	大溝	高 壕		10.8		壺蓋に通る沈線が3段ある。内面は端部以外はへラ削り。	淡褐色	微砂粒多い。	
34-55	C10・II	大溝	壺	23.4			錐状口縁を呈し、口縁上面には径1.8 cmの円形浮出紋が4~5付くと思われる。頸部には突帯が2条着く。	暗褐色	微砂粒多い。	須玖式
34-56	C10・II	大溝	壺	13.2			口縁端部は上下に拡張し3条の凹線を施す。4条の凹線の間に刻み目が3段に施される。	暗褐色	微砂粒多い。	埴町式
35-1	C8・9	大溝	底 部		8.0		外面ミガキ、内面へラ削り。	淡褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
35-2	C8・9	大溝	壺	16.4			口縁端部の拡張は大きく、4条の凹線を施す。頸部以下へラ削り。	黄褐色	微砂粒多い。 金雲母	
35-3	C8・9	大溝	壺	16.8			口縁端部は上方のみ小さく立ち上がる。内面頸部以下はへラ削り。	灰褐色	微砂粒多い。	
35-4	C8・9	大溝	壺	28.6			口縁端部の拡張は小さく3条の凹線を施す。頸部には貼り付け突帯に刻みを入れる。頸部頸部付近はミガキ。	淡橙褐色	微砂粒多い。	
35-5	C8・9	大溝	壺	18.2			口縁端部の拡張は小さく3条の凹線を施す。肩部には別点紋がめぐる。内面肩あたりまで削りがしがる。	黄褐色	微砂粒多い。 金雲母・黒雲母・石英	
35-6	C8・9	大溝	壺	13.4			口縁端部の拡張は小さく3条の凹線を施す。内面頸部はへラ削り。	淡黄褐色	微砂粒多い。	
35-7	C8・9	大溝	壺	18.2			複合口縁は端部がやや厚い。外面には7条の鋸切線。頸部には文様がある。	明黃褐色	微砂粒多い。	
35-8	C8・9	大溝	底 部		5.8		幅6mm・高さ1cmの高台が付く。外面ミガキ、内面はへラ削り。	橙褐色	微砂粒多い。	
35-9	C8・9	大溝	壺	21.6			口縁端部は上下に拡張し3条の凹線を施す。	淡灰褐色	微砂粒多い。	
35-10	C8・9	大溝	壺	19.6			口縁端部は上下に拡張し4条の凹線を施す。	淡黄褐色	微砂粒多い。	
35-11	C8・9	大溝	壺	16.0			口縁端部は上下に拡張を施す。頸部残存部は内外面とも刷毛目。	淡褐色	微砂粒多い。	
35-12	C8・9	大溝	壺	16.8			口縁端部の拡張は小さく2条の凹線を施す。頸部以下へラ削りか?	淡橙褐色	微砂粒多い。	
35-13	C8・9	大溝	壺	13.0			口縁端部は上方のみ拡張し、2条の凹線を施す。内面頸部付近まで削りが上がる。	赤褐色	微砂粒多い。	
35-14	C8・9	大溝	鉢	14.8			口縁端部はわざかに肥厚する程度で、2条の凹線を施す。頸部残存部に列点紋。内面頸部付近まで削り。	にぶい橙色	微砂粒多い。	
35-15	C8・9	大溝	壺	22.0			口縁端部の拡張は小さく3条の凹線を施す。内面頸部まで削りが上がる。	にぶい橙色	微砂粒多い。 石英	
35-16	C8・9	大溝	壺	14.1			口縁端部は上下に拡張し3条の凹線を施す。内面頸部以下へラ削り。	橙褐色	微砂粒多い。	
35-17	C8・9	大溝	底 部		6.2		外面へラ削り。	橙褐色	微砂粒多い。	
35-18	C8・9	大溝	底 部		6.6		外面へラ削り。	橙褐色	微砂粒多い。	
35-19	C8・9	大溝	壺	28.0			口縁端部は肥厚する程度で、3条の凹線を施す。頸部の貼り付け突帯には列点数。	橙褐色	微砂粒多い。 金雲母・石英	

番号	調査区	遺構名	種別	法量(単位:cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土
				口径	底径	器高			
36-20	C8-9	大溝	甕	23.8			口縁端部は上下に拡張し3条の凹線を施す。肩部最大径には刷毛目原体による刻突紋がめぐる。また肩部最大径には幅7cmの穴があり注口のようなものが着いていた可能性もある。肩部内面は最大径以下は削り、頸部までは刷毛目。	黄褐色	微砂粒多い。
36-21	C8-9	甕	甕	29.4			口縁端部は上下に拡張し、3条の凹線を施す。肩部には4条の凹線に2段の刻み目がある。見た目には4段の刻み目に見える。肩部内面調整は頸部付近は刷毛目、肩部以下へう削り。	黄褐色	微砂粒多い。 黒雲母・石英 塙町式

(第1次調査)

番号	トレンチ番号	種別	法量(単位:cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土
			口径	底径	器高			
49-1	3 T	甕	30.2			口縁部は大きく水平に開き、端部はやや厚くなり施す。外面ミガキ、内面刷毛目。	暗褐色	微砂粒多い。 石英・長石
49-2	3 T	甕	36			口縁部は水平に開き端部は断面三角形になる。端部には6条の凹線の後に刻み目を2段に入ることから見かけは6段になる。口縁上面には施す。外面ミガキが縁には指頭圧痕帯がほどこされる。	黄褐色	微砂粒多い。 石英・長石
49-3	3 T	鉢	12.4			膨らんだ球形の肩部で、7条の凹線の間を4段の刻み目紋を施す。外面下半部はミガキ、内面下半部はへう削り。	黄褐色	微砂粒多い。 黒雲母・石英
49-4	3 T	甕	15.0			口縁端部は直立し、3条の凹線を施す。内面頸部以下へう削り。	橙褐色	微砂粒多い。 金雲母・黒雲母・石英
49-5	3 T	甕	19.6			口縁部は上方に拡張し複合口縁の初段階の様相を呈し、3条の凹線を施す。肩部下1cmほどはミガキ、それ以下はへう削り。	浅黄褐色	微砂粒多い。 金雲母・石英
49-6	3 T	甕	14.8			口縁部は上方に拡張し複合口縁の初段階の様相を呈し、3条の凹線を施す。肩部には列点紋。内面頸部以下1cmほどミガキ、以下へう削り。	にじむ黄褐色	微砂粒多い。 金雲母
49-7	3 T	甕	20.4			複合口縁は外面に擬凹線状。肩部には羽状紋。内面頸部はミガキ、以下へう削り。	暗赤褐色	砂粒少ない。
49-8	3 T	甕	15.6			複合口縁は擬凹線の後ナデ調整。肩部には4条の平行線紋と目登による刻突紋か。内面頸部はミガキ、以下へう削り。	橙色	微砂粒多い。
49-9	3 T	甕	18.0			複合口縁は外反し擬凹線を擦して消している。肩部には良好による波状紋。内面頸部はミガキ、以下へう削り。	暗褐色	1~2mmの砂粒多い。 長石・金雲母
49-10	3 T	甕	20.6			複合口縁は器壁が厚く外反する肩部には刻突紋がめぐるようである。頸部以下へう削り。	黄褐色	微砂粒多い。 石英・長石
49-11	3 T	甕	20.4			複合口縁は器壁が厚く外反する肩部には刻突紋がめぐるようである。頸部以下へう削り。	橙褐色	微砂粒多い。 石英
49-12	3 T	甕	18.8			複合口縁は外反して立ち上がり、器壁はやや厚い。内面頸部はミガキ、以下へう削り。	暗褐色	微砂粒多い。 金雲母・石英
49-13	3 T	甕	17.5			複合口縁は斜め外方に直線的に立ち上がる。頸部以下へう削り。	灰白色	微砂粒多い。 石英
49-14	3 T	甕	20.0			複合口縁は器壁が厚く斜め外方に立ち上がる。頸部以下へう削り。	橙褐色	微砂粒多い。

番号	トレンチ番号	種別	法量(単位:cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	
			口径	底径	器高				
49-15	3 T	甕	14.8			複合口縁は外反して立ち上がり、端部はそのまま丸く收める。下段突出は穢がつく程度。	黄褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母・ 黒雲母	
49-16	3 T	甕	22.4			複合口縁は外反し手立ち上がり、端部は丸く收める。下段突出は穢がつく程度。頭部以下へラ削り。	淡褐色	微砂粒多い。 金雲母	
49-17	3 T	甕	22.9			複合口縁は外反して立ち上がり、端部は丸く收める。下段突出は斜め下向き。	浅黄褐色	微砂粒多い。 石英	
50-18	3 T	甕	16.8			複合口縁は外反して立ち上がり、端部は先細りになる。下段突出は横方向。	黄褐色	微砂粒多い。 金雲母・石英	
50-19	3 T	甕	16.8			複合口縁は外反して立ち上がり、端部は先細りとなる。下段突出は穢がつく程度。頭部に刺突紋。	橙色	微砂粒多い。 石英・黒雲母	
50-20	3 T	甕	14.0			複合口縁は外反して立ち上がり、端部は先細りとなる。下段突出は短く横方向。内面頭部はミガキ、以下へラ削り。	淡褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
50-21	3 T	甕	16.4			複合口縁は外反して立ち上がり、器壁は薄く端部も引き延ばしたようになる。頭部には平行織紋の上下に刺突紋。下段突出は短小で横方向。内面頭部はミガキ、以下へラ削り。	黄褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
50-22	3 T	甕	12.9			複合口縁はやや外反気味に立ち上がり、器壁が薄く端部も引き延ばしたようになる。下段突出は短小で横方向。頭部には平行織紋。	灰白色	微砂粒多い。	
50-23	3 T	甕	15.4			複合口縁は直線的に延び、端部は薄く引き延ばしたようになる。下段突出は短小で横方向。	淡褐色	微砂粒多い。 金雲母・石英・ 黒雲母	
50-24	3 T	甕	16.6			複合口縁は直線的に延び、端部は薄く引き延ばしたようになる。下段突出は短小で、横方向。	橙色	微砂粒多い。 石英・黒雲母	
50-25	3 T	甕	16.0			複合口縁は外反気味に立ち上がり、端部は薄く引き延ばす。下段突出は穢がつく程度。	橙褐色	微砂粒多い。 金雲母・黒雲母・ 石英	
50-26	3 T	甕	15.2			複合口縁は直線的に立ち上がり、端部は薄く引き延ばしたようになる。頭部には横方向の刷毛目と織紋がめぐる。内面頭部はミガキ、以下へラ削り。	橙色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
50-27	3 T	甕	30.0			複合口縁は直線的に延び、端部は折り曲げたようになる。下段突出は短小で横方向。	淡黄褐色	微砂粒多い。 石英・黒雲母	
50-28	3 T	甕	17.6			複合口縁は直線的に延び、口縁端部は折り曲げたようになる。下段突出はシャープで横方向。	黄褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
50-29	3 T	甕	14.8			複合口縁は直線的に立ち上がり、薄く延びる端部を折り曲げて上面に平坦面を持つ。下段突出は穢がつく程度。	淡褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母・ 黒雲母	
50-30	3 T	甕	16.0			複合口縁は直線的に延び、端部は折り曲げたようになる。下段突出は、斜め下向き。	橙色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
50-31	3 T	甕	24.0			複合口縁は直線的に立ち上がり、端部はそのまま丸く收める。下段突出はシャープで横方向。	淡黄褐色	微砂粒多い。 石英	
50-32	3 T	甕	18.0			複合口縁は直線的に立ち上がり、端部はそのまま丸く收める。下段突出は斜め下向き。	淡橙褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
50-33	3 T	甕	17.6			複合口縁は直線的に立ち上がり、端部は内側を擦てて糊くする。下段突出は横方向で、シャープさ欠く。	黄褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
51-34	3 T	甕	15.8			口縁部は外反して立ち上がり、端部はそのまま丸く收める。下段突出は横方向でシャープ。頭部には横方向の刷毛目。内面頭部はミガキ、以下はへラ削り。	淡黄褐色	微砂粒多い。	

番号	トレンチ番号	種別	法量(単位: mm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	
			口径	底径	器高				
51-35	3 T	壺	14.6			複合口縫は外反気味に立ち上がり、端部は丸く収める。下段突出は短小で横方向。	黄褐色	微砂粒多い。 金雲母・石英	
51-36	3 T	壺	12.4			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部はそのまま丸く収める。肩部には平行綫紋。下段突出は横方向で深い。	暗灰黄色	微砂粒多い。	
51-37	3 T	壺	15.4			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部はそのまま丸く収める。下段突出は斜め下向き。	におい膚色	微砂粒多い。	
51-38	3 T	壺	16.2			複合口縫は直線的に開き、端部は丸みがあるが先端に平坦面を持つ。下段突出は短小。	におい膚色	微砂粒多い。 石英	
51-39	3 T	壺	16.6			複合口縫は大きく開き、端部はそのまま丸く収める。下段突出短くやや下向き。	灰白色	微砂粒多い。 石英	
51-40	3 T	壺	14.8			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は丸く収める。内面頸部には指頭疣状。頸部以下はヘラ削り。	淡黄褐色	微砂粒多い。 石英・黒雲母・ 金雲母	
51-41	3 T	壺	18.6			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部はやや薄くのばす。下段突出は横方向で短小である。内面頸部はミガキ、以下ヘラ削り。	灰褐色	微砂粒多い。 金雲母・黒雲母・ 石英	
51-42	3 T	壺	15.8			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部はやや薄くのばす。下段突出は横方向。内面頸部はミガキ、以下ヘラ削り。	黄褐色	微砂粒多い。 金雲母・石英	
51-43	3 T	壺	20.8			複合口縫は大きく直線的に開き、端部は先細りとなり丸く収める。肩部には平行綫紋と下段に羽状紋が施される。内面頸部はミガキ、以下ヘラ削り。	灰白色	微砂粒多く含む。	
51-44	3 T	壺	13.2			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部はやや薄くなり丸く収める。	淡黄褐色	微砂粒多い。	
51-45	3 T	壺	15.8			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部はそのまま丸く収める。下段突出は横方向で短小。	灰白色	微砂粒多い。 石英	
51-46	3 T	壺	17.2			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は丸く収め若干折り曲げる。肩部には平行綫紋と羽状紋がめぐるようである。	黄橙色	微砂粒多い。 石英	
51-47	3 T	壺	18.7			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は先細り、若干折り曲げる。	灰白色	微砂粒多い。 石英	
51-48	3 T	壺	19.0			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部はそのまま丸く収める。肩部には平行綫紋と羽状紋がめぐる。内面頸部ミガキ、以下ヘラ削り。	浅い黄褐色	微砂粒多い。	
51-49	3 T	壺	16.6			口縫部は直線的に開き気味に立ち上がり、端部はそのまま丸く収める。下段突出はシャープである。内面頸部はミガキ、以下ヘラ削り。	灰白色	微砂粒多い。 石英	
51-50	3 T	壺	17.0			複合口縫は直線的に立ち上がり、先端はやや膨脹が厚くなり丸みのある平坦面を持つ。下段突出はシャープである。	淡黄褐色	微砂粒多い。	
51-51	3 T	壺	17.6			口縫端部は直線的に立ち上がり、端部はそのまま丸く収める。下段突出は短小。	黄褐色	微砂粒多い。 金雲母・石英	
51-52	3 T	壺	15.0			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部はそのまま丸く収める。	黄褐色	微砂粒多い。 金雲母・石英	
51-53	3 T	壺	17.0			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は丸く収める。下段突出は不明瞭で丸くなる。	淡褐色	微砂粒多い。 石英・黒雲母	
52-54	3 T	壺	19.0			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は丸く収めるが上面に平坦面を持たせる。	暗灰褐色	微砂粒多い。	

番号	トレチ番号	種別	法量(単位:cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	
			口径	底径	器高				
52-55	3 T	壺	18.8			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は若干折り曲げて上面に平坦面をつくる。下段突出は短小。	淡褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
52-56	3 T	壺	15.6			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は若干折り曲げて上面に平坦面をつくる。下段突出は短いがシャープである。	黄褐色	微砂粒多い。 金雲母	
52-57	3 T	壺	15.2			複合口縫は直線的に立ち上がり端部はわずかに折り曲げる。下段突出はやや下向きで、シャープさなく。	黄褐色	微砂粒多い。 雲母	
52-58	3 T	壺	16.2			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は薄くなり丸みがあるが平行線紋と難波紋がめぐる。内面頸部はミガキ。以下へラ削り。	浅い黄橙色	微砂粒多い。	
52-59	3 T	壺	21.4			複合口縫は直立気味になり、端部はやや厚くなり丸みはあるが上面に平坦面を持つ。下段突出はシャープである。	淡褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母・ 黒雲母	
52-60	3 T	壺	22.0			複合口縫はやや外反気味に立ち上がり、端部はやや厚くなり折り曲げる。肩部には平行線紋。	灰黄色	微砂粒多い。 金雲母・石英	
52-61	3 T	壺	15.0			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部はやや細くなり、内側に平坦面をつくる。	浅い黄褐色	微砂粒多い。	
52-62	3 T	壺	15.2			複合口縫は直線的に立ち上がり、口縫端部は先削りになるが、上面に平坦面を持つ。下段突出はシャープさなく。	黄褐色	微砂粒多い。 石英・黒雲母	
52-63	3 T	壺	17.0			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は先削りとなり折り曲げる。	浅黄橙色	微砂粒多い。 石英	
52-64	3 T	壺	16.0			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は丸味があるが上面に平坦面を持つ。	黄褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
52-65	3 T	壺	20.6			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は丸く取め上面に平坦面を持つ。肩部には平行線紋がめぐる。	灰白色	微砂粒多い。	
52-66	3 T	壺	21.4			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は折り曲げて上面に平坦面を持つ。下段突出はシャープ。	黄橙色	微砂粒多い。 石英	
52-67	3 T	壺	17.2			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は丸味があるが上面に平坦面を持つ。肩部には平行線紋と羽状紋がめぐる。	淡褐色	微砂粒多い。	
52-68	3 T	壺	14.4			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は丸味があるが上面に平坦面を持つ。	黄褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
52-69	3 T	壺	16.4			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は若干折り曲げて上面に平坦面をつくる。	淡褐色	微砂粒多い。 石英・黒雲母	
52-70	3 T	壺	13.0			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は折り曲げて上面に平坦面をつくる。	黄褐色	微砂粒多い。 金雲母	
53-71	3 T	壺	14.8			複合口縫は直立してたちあがり、端部は折り曲げるようにして上面に平坦面をつくる。下段突出はシャープ。	黄褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
53-72	3 T	壺	18.2			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は丸味があるが上面に平坦面を持つ。下段突出は横方向でやや厚い。	淡黄褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
53-73	3 T	壺	18.6			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は若干折り曲げて、上面に平坦面をつくる。	淡褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
53-74	3 T	壺	19.6			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は折り曲げる。下段突出はシャープ。頸部はミガキ。以下へラ削り。	黄橙色	微砂粒多い。 金雲母	
53-75	3 T	壺	21.6			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は丸く取めナデにより上面に平坦面をつくる。肩部には波状紋と平行線紋がめぐる。肩外面は刷毛目、内面はヘラ削り。	にぶい黄橙色	微砂粒多い。	

番号	トレンチ番号	種別	法量(単位:cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	
			口径	底径	器高				
53-76	3 T	壺	14.4			複合口縫はやや開き気味で、端部は薄くのばした後折り曲げる。	灰褐色	微砂粒多い。	
53-77	3 T	壺	17.2			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部はやや厚くなり丸味があるが上面に平坦面を持つ。下段突出はシャープ。	灰白色	微砂粒多い。 黒雲母・金雲母	
53-78	3 T	壺	13.6			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部はやや厚くなり、丸味があるが先端に平坦面を持つ。下段突出は短く。	褐色	微砂粒多い。 金雲母・石英・ 黒雲母	
53-79	3 T	壺	15.6			複合口縫は直立気味に立ち上がり、端部はやや厚くなり丸味があるが先端に平坦面を持つ。	黄褐色	微砂粒多い。 金雲母・黒雲母・ 石英	
53-80	3 T	壺	16.6			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部はやや厚くなり丸く収める。	褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
53-81	3 T	壺	16.6			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は厚くなりそのまま丸く収める。下段突出はシャープ。	黄褐色	微砂粒多い。 黒雲母・金雲母・ 石英	
53-82	3 T	壺	18.6			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は丸味があるが先端に平坦面を持つ。下段突出は短い。	橙色	微砂粒多い。 石英・金雲母・ 黒雲母	
53-83	3 T	壺	17.0			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は厚くなりしっかりした平坦面を持つ。	灰白色	微砂粒多い。 石英	
53-84	3 T	壺	15.8			複合口縫は開き気味に立ち上がり、端部は丸味があるが先端に平坦面を持つ。下段突出は横方向でシャープ。	黄橙色	微砂粒多い。 石英	
53-85	3 T	壺	16.4			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は厚くなり上面に平坦面を持つ。下段突出はシャープ。	淡褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
53-86	3 T	壺	18.2			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部はやや厚くなり丸味があるが、上面に平坦面を持つ。	にじむ橙色	微砂粒多い。 石英	
53-87	3 T	壺	16.4			複合口縫は開き気味に立ち上がり、端部はやや厚くなり丸く収める。下段突出も丸味がある。	淡褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
53-88	3 T	壺	18.0			複合口縫は直立気味になり、器壁は厚くなり上面に平坦面を持つ。下段突出はやや短小がしっかりしている。	灰白色	微砂粒多い。	
54-89	3 T	壺	22.8			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は厚く、丸く収めた若干折り曲げたようになる。はっきりした平坦面はない。肩部には沈線が2段にめぐらし、その間に平行線紋と波状紋が施される。沈線は陶質土器の影響か?	浅い黄橙色	微砂粒多い。 石英	
54-90	3 T	壺	15.0			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部はやや厚くなり丸く収める。肩部には平行線紋と羽状紋がめぐる。	淡褐色	微砂粒多い。 金雲母	
54-91	3 T	壺	19.4			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は厚くなり丸味があるが先端に平坦面を持つ。下段突出は横方向でシャープ。肩部には平行線紋と葉描紋がめぐる。	淡褐色	微砂粒多い。 金雲母	
54-92	3 T	壺	19.8			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は厚くなり丸味があるが平坦面を持つ。下段突出はシャープ。肩部には平行線紋と葉描紋がある。	黄褐色	微砂粒多い。 金雲母・石英・ 黒雲母	
54-93	3 T	壺	16.8			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は厚くなり先端に平坦面を持つ。下段突出は横方向にしっかりとしている。肩部には波状紋がある。	黄褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母	
54-94	3 T	壺	21.4			複合口縫は開き気味に立ち上がり、端部は厚くなり上面に平坦面を持つ。下段突出はやや鍔詰を欠く。	淡赤褐色	微砂粒多い。	

番号	トレンチ番号	種別	法面(単位: cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	
			口径	底径	器高				
54-95	3 T	甕	21.8			複合口縫は端部は厚くなり丸く収める。明瞭な平坦面はない。下段突出はシャープ。	浅い黄橙色	微砂粒多い。石英。	
54-96	3 T	甕	26.4			複合口縫はやや開き気味で、端部は厚くなり丸味があるが、平坦面を持つ。下段突出は、シャープ。	褐色	微砂粒多い。石英・金雲母。	
54-97	3 T	甕	25.0			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は厚くなり丸味があるが、平坦面を持つ。	淡褐色	微砂粒多い。黒雲母・金雲母・石英。	
54-98	3 T	甕	13.2			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は厚くなり平坦面を持つ。肩部には平行継続と波状紋がぐるぐる。	黄褐色	微砂粒多い。石英・黒雲母・金雲母。	
55-99	3 T	甕	16.2	3.5	20.9	複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は上面に平坦面を持つ。肩部には平行継続と重複紋がぐるぐる。底部は痕跡的に残る。	黄褐色	微砂粒多い。石英・金雲母。	
55-100	3 T	甕	17.2		25.0	複合口縫は途中から外方に折れる。端部は外側に平坦面を持つ。肩部には平行継続と波状紋がぐるぐる。底部は痕跡的に残る。	黄褐色	微砂粒多い。金雲母・石英。	
55-101	3 T	甕	16.8			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部はやや外側に持つ。肩部には平坦面を持つ。肩部には波状紋と羽状紋がぐるぐる。	黄褐色	微砂粒多い。金雲母・石英。	
55-102	3 T	甕	17.2		25.6	複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は厚くなり丸味があるが先端に平坦面を持つ。下段突出はシャープ。肩部は直線的に残る。	黄褐色	微砂粒多い。金雲母・石英。	
55-103	3 T	甕	19.0			複合口縫は直線気味で、端部は厚くなり丸味があるが先端に平坦面を持つ。下段突出は外方にしつこかっている。肩部には平行継続と波状紋がぐるぐる。	棕褐色	微砂粒多い。金雲母・石英。	
55-104	3 T	甕	24.4			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は外側に持つ。肩部には平坦面を持つ。肩部には平行継続と羽状紋がぐるぐる。	棕褐色	微砂粒多い。金雲母・石英。	
55-105	3 T	甕	24.4			複合口縫は直線気味で、端部は外側に膨らみ平坦面を持つ。肩部には羽状紋がぐるぐる。	黄褐色	1~2mm程度の砂粒多い。石英。	
55-106	3 T	甕	32.4			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は先端に平坦面を持つ。	浅い黄橙色	微砂粒多い。	
55-107	3 T	甕	31.6			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は上面に平坦面を持つ。肩部には平行継続と波状紋がぐるぐる。	黄褐色	微砂粒多い。石英・金雲母・黒雲母。	
55-108	3 T	甕	30.4	8.0	45.0	複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は外側にやや丸味ある平坦面を持つ。肩部には羽状紋と平行継続がある。底部は自立しない。	黄褐色	微砂粒多い。	
57-109	3 T	甕	28.0			複合口縫は外反気味に立ち上がり、端部は丸く収める。	浅い黄橙色	微砂粒多い。石英・金雲母。	
57-110	3 T	甕	11.0			複合口縫は内傾し、端部は丸く収める。	黄橙色	微砂粒多い。	
57-111	3 T	甕	10.0			複合口縫は内傾し、端部は丸く収める。内面頭部はミガキ、以下へ削り。	黄橙色	微砂粒多い。石英・金雲母。	
57-112	3 T	甕	17.4			複合口縫は直線的に立ち上がり、端部は丸く収めやや折り曲げる。下段突出は下向き。	淡黄褐色	微砂粒多い。	
57-113	3 T	甕	19.4			複合口縫は外反気味に立ち上がり、端部は薄く伸び若子折れる。下段突出は下向き。	黄褐色	微砂粒多い。石英。	
57-114	3 T	甕	13.4			複合口縫は直線的に延び、端部は先細りとなる。下段突出はシャープ。	黄褐色	微砂粒多い。石英。	

番号	トレンチ番号	種別	法量(単位:cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土
			口径	底径	高さ			
57-115	3 T	壺	18.0			複合口縁は直線的に立ち上がり、端部は丸く收め若干折れる。下段突出はシャープ。	淡黄褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母
57-116	3 T	壺	9.8			単純口縁は短く外反する。頸部には2孔一対の円孔がある。外面ミガキ、内面は口縁から胸部上半はミガキで以下は削り。	黄褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母
57-117	3 T	壺	13.2			複合口縁は短く丸味がある。肩部の横方向の刷毛目は切られ途切れである。	淡黄褐色	砂粒少ない。
57-118	3 T	壺	19.8			複合口縁はやや外反し、端部はそのまま丸く收める。下段突出は斜め下向き。頸部には羽状紋が2段めぐる。肩部には平行線紋がめぐる。	にぶい赤褐色	微砂粒多い。 石英
57-119	3 T	壺	16.8			複合口縁は直線的に立ち上がり、端部はやや外側に膨らみ上面に平坦面を持つ。下段突出はシャープ。内面頸部は指撫で。	浅い黄褐色	微砂粒多い。 金雲母・黒雲母
57-120	3 T	壺	25.6			複合口縁は大きく開く特異な形態を呈する。端部は上面に抵抗し凹線が施される。	赤褐色	微砂粒多い。
58-121	3 T	器台	18.0	15.8	10.2	受け部内面はミガキ。脚部内面はヘラ削り。筒部は削りの後ナデか。外面は横撫で。	黄褐色	微砂粒多い。
58-122	3 T	器台	24.8			外面には部分的に擬凹線のような平行線がある。内面はミガキ。外面は横撫で。	黄褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母
58-123	3 T	器台	27.4			内面は口縁部分はみがき。外面は横撫で。	黄褐色	微砂粒多い。 金雲母・石英
58-124	3 T	器台	23.0			脚部内面はヘラ削り、端部は横撫で。筒部内面は削り後撫でか。	橙褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母
58-125	3 T	器台	24.2			受け部内面は端部はミガキ、以下ナデか。脚部はヘラ削り。	黄褐色	微砂粒多い。
58-126	3 T	器台	22.3	21.6	13.4	受け部内面は横ナデか。脚部内面はヘラ削り。筒部内面はかなり幅狭くなる。	黄褐色	微砂粒多い。
58-127	3 T	低脚環	13.8	5.8	5.8	环部是比较的深い。环内面は綫方向のミガキで、端部は撫で。环外表面は綫方向のミガキの後ナデか。	橙褐色	微砂粒多い。 金雲母・石英
58-128	3 T	低脚環	13.4			环部是比较的深い。环部は内外面とも刷毛の後ミガキ。	黄褐色	微砂粒多い。 石英・金雲母
58-129	3 T	器台	24.2	22.6	14.0	受け部・脚部とも直線的に開く。受け部内面はミガキ。脚部内面は削り。外面は横撫で。	淡橙褐色	微砂粒多い。 金雲母
58-130	3 T	壺	15.6	11.2	26.7	口縁部は直線的に開く単純口縁。端部は先削りとなる。脚部はあまり張りのない形態で、立直しないが大きな底がある。脚部外表面は荒い刷毛目、内面はヘラ削り。	淡黄褐色	もとほどの大きな砂粒を多く含む。
59-131	3 T	高 环	22.0			底部と口縁部の境には段を持ち、口縁部は底面に状の暗駆が入る。脚部は上面に平坦面を持つ。内面は豊かなミガキ。底部外表面は綫方向のミガキ。	橙色	砂粒少ない。
59-132	3 T	高 环	27.0	16.2	17.4	环部は比較的深く、口縁部は弱冠外方に折れる。环内面は綫方向のミガキ。脚部は綫方向のミガキ。脚部は外面ミガキ、内面は筒部が削りで刷毛目。接合法は内盤充填で、内盤の中心には刺突痕がある。	赤褐色	砂粒は少ない。
59-133	1 T	壺	18.0			口縁端部は内傾し4条の凹線を施す。内面頸部以下はヘラ削り。	赤褐色	1mm程度の砂粒多い。石英・黒雲母

番号	トレンチ番号	種別	法量(単位:cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	
			口径	底径	器高				
59-134	1 T	壺	14.2	4.8	20.1	口縁端部は上下に拡張し内傾している。外面には3条の凹線施す。肩部には刻み目がある。内部は頸部以下へラブリ。	橙色	2mm程度の砂粒多い。石英・金雲母。	
59-135	2 T	壺	20.2			口縁端部は上下に拡張し2条の凹線施す。肩部は内外面とも刷毛目。	黄褐色	微砂粒多い。石英・金雲母・長石	
59-136	2 T	壺	13.8			口縁端部はわずかに拡張し、2条の凹線施す。内部頸部付近まで削りが上がる。	浅黄褐	微砂粒多い。	
59-137	2 T	高坏				脚筒部には凹線が3段めぐっている。内部はしづりの痕跡あり、裾部分は削りのようである。	黄褐色	微砂粒多い。石英・金雲母	
59-138	2 T	高坏	18.8			坏部は浅く口縁部は直立気味である。口縁外縁と上面には凹線を施す。	明黄褐	微砂粒多い。石英・金雲母・長石	
59-139	2 T	壺	16.0			複合口縁は短小で器壁が厚い。外面には撫摸凹線が施される。	黄褐色	微砂粒多い。石英・金雲母	
59-140	2 T	壺	16.2			堆疊口縁は短い。肩部は器壁が厚く、外面刷毛目。内面へラブリである。自立しないと思われるが比較的大きな底盤がある。	暗褐色	微砂粒多い。石英・黑雲母・金雲母	
60-141	4 T	壺	14.8			口縁端部は拡張せず、端部に刻み目がめぐる。肩部最大径に刻み目がある。脚筒部外面上半は刷毛目、下半はミガナ。内部は刷毛目で残存部分に削りはない。	橙色	微砂粒多い。石英・黑雲母	
60-142	4 T	壺	22.2			口縁部はやや厚くなる。	淡橙褐色	微砂粒多い。石英・金雲母・長石	
60-143	4 T	壺	13.6			口縁端部はわずかに拡張し、2条の凹線を施す。	黄褐色	微砂粒多い。石英・金雲母	
60-144	4 T	高坏	22.4			坏部は半球形を呈し、端部には平坦面を持つ。	褐色	淡部外面には刻み目と凹線がめぐる。	
60-145	4 T	高坏				脚筒部には凹線が3段施される。内部にはしづりの痕跡がある。	褐色	微砂粒多い。石英・金雲母	
60-146	4 T	底部	7.2			高台が付く底部で、底は後から充填されているようである。	暗褐色	微砂粒多い。石英・長石・金雲母	
60-147	4 T	壺	22.4			直線的に聞く單純口縁で、端部は下方に肥厚し平坦面を持つ。内面頸部以下はへラブリ。	橙色	微砂粒多い。石英	
60-148	4 T	壺	19.2			口縁端部は上下に拡張し3条の凹線を施す。肩部最大径には列点状がめぐる。内部肩部最大径までは削りが上がる。	黄褐色	微砂粒多い。石英・黑雲母・金雲母	
60-149	4 T	裝飾壺				算盤玉状の肩部で最大径は突帯状になる。肩部には平行線紋と刺突紋が2段にある。	黄褐色	2mm程度の砂粒多い。石英	
60-150	4 T	壺	15.4			口縁端部は拡張せず、外面には刻み目がめぐる。	橙褐色	微砂粒多い。石英・長石	
60-151	4 T	器台?				筒部と大きく聞く受け部とからなる。調整は横振で。	橙色	微砂粒多い。石英・黑雲母・金雲母	
60-152	4 T	壺	17.6			口縁部は短小で、端部は先削りである。脚筒部はない外面とも刷毛目。	淡褐色	微砂粒多い。	

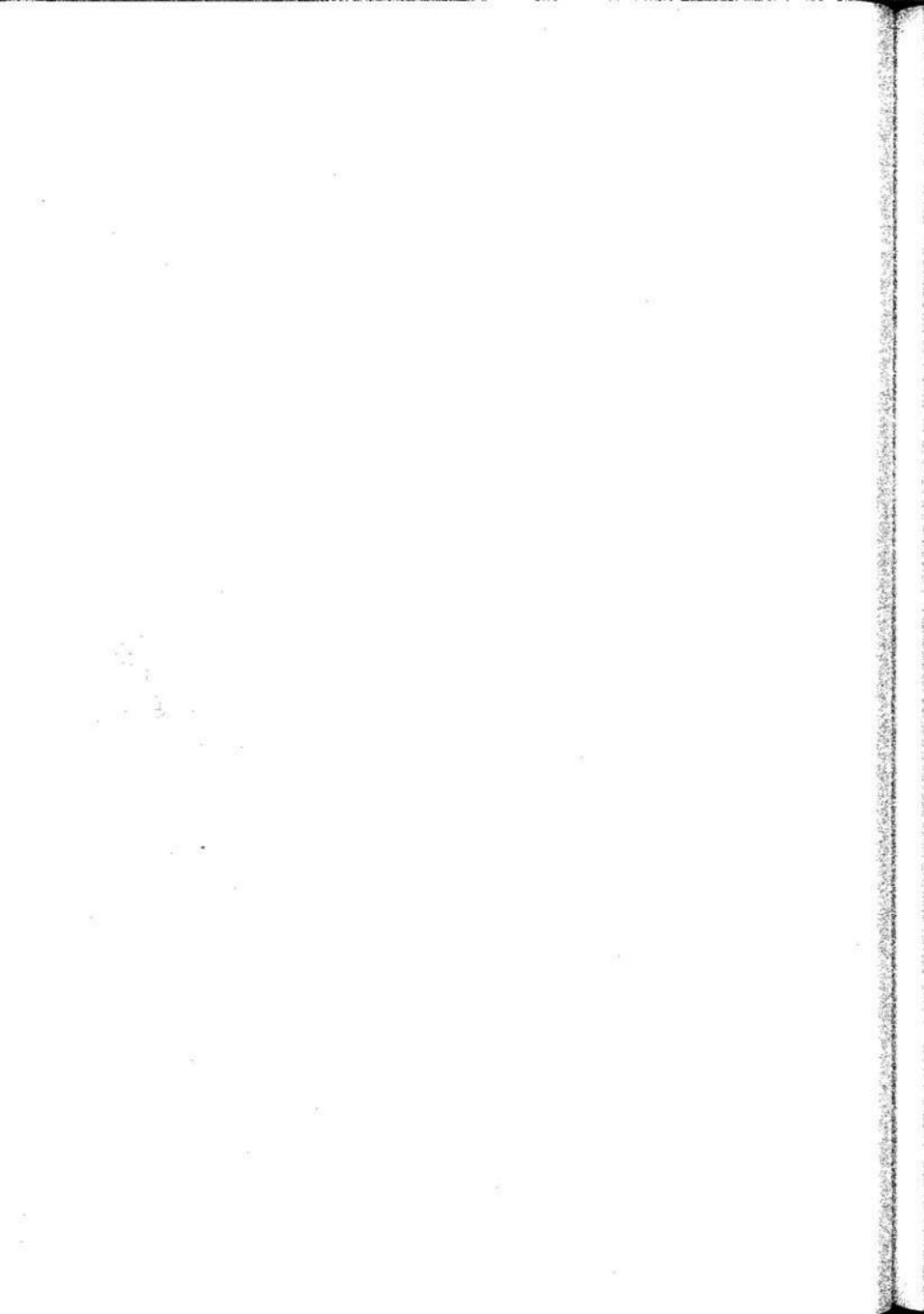
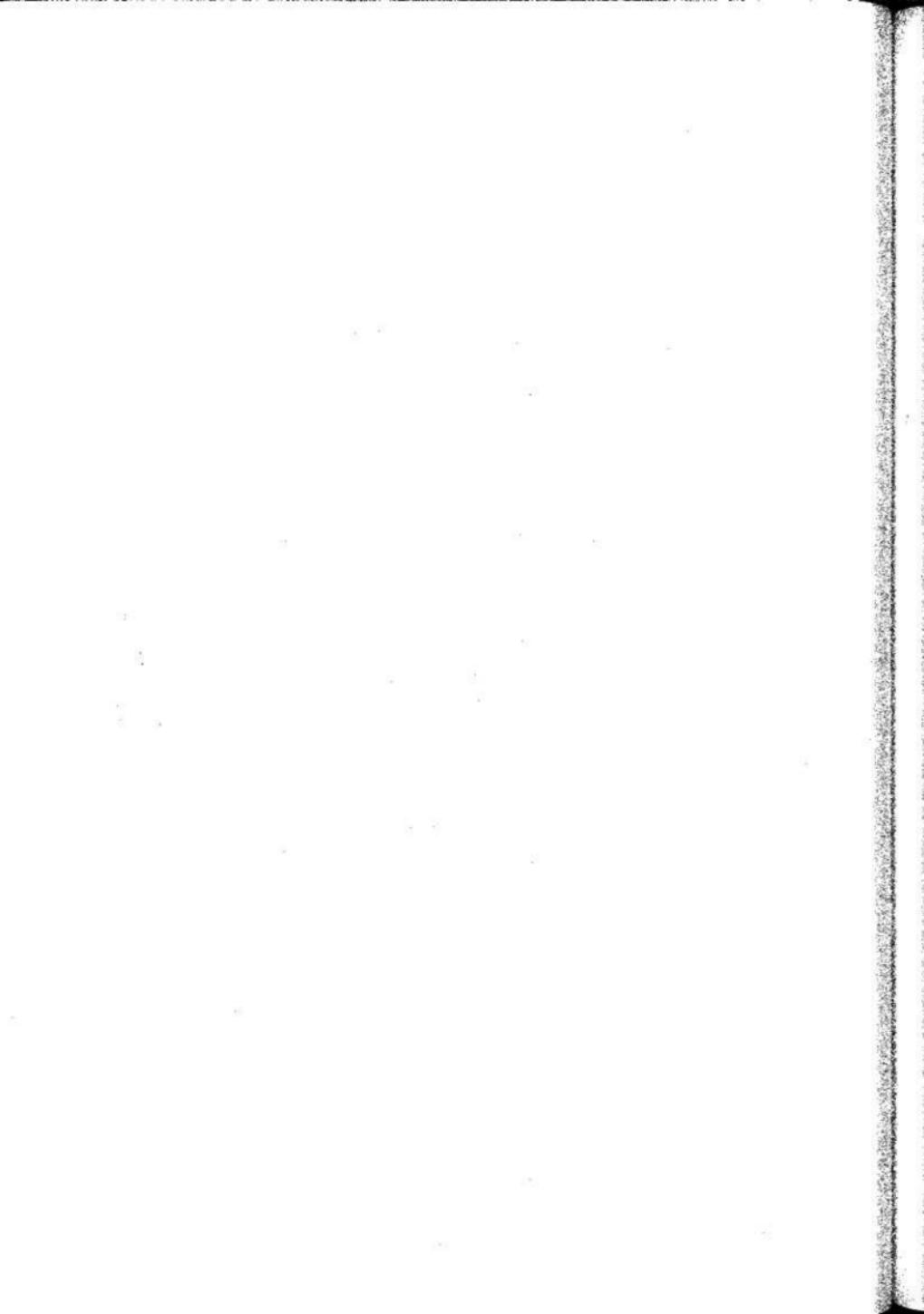


図 版







古志本郷遺跡空中写真（北西から）



古志本郷遺跡空中写真（南から）



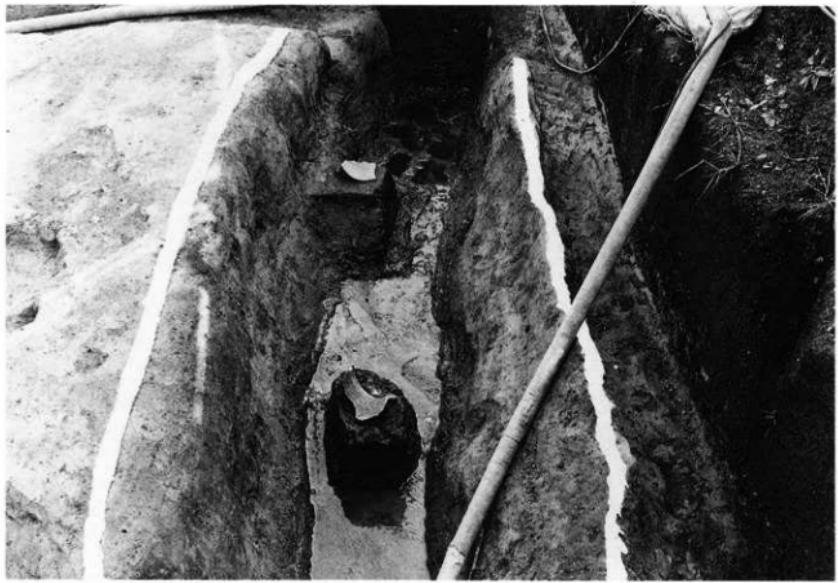
古志本郷遺跡より西側



第6次調査地点（上から）



調査前の状況



調査区B SD1



調査区B 大溝



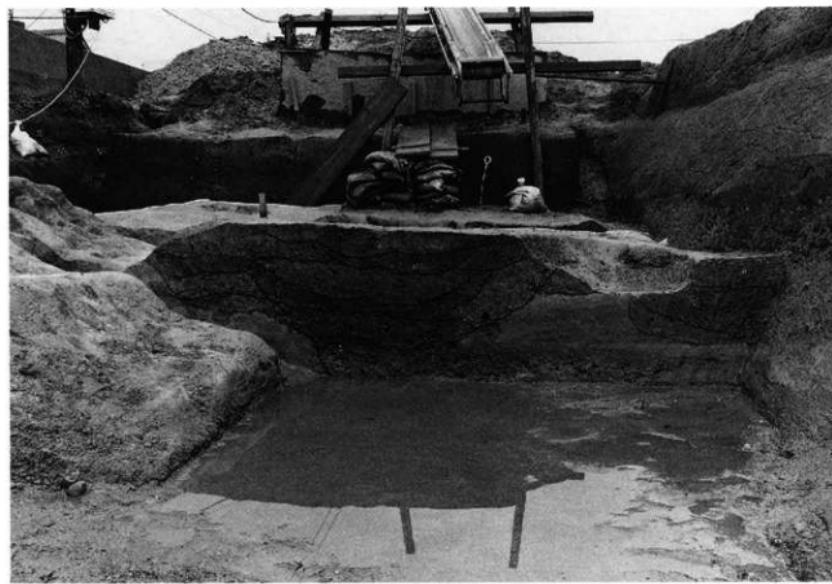
調査区B 大溝



調査区B 大溝



調査区B 大溝



調査区B 大溝土層堆積状況 (2line)